

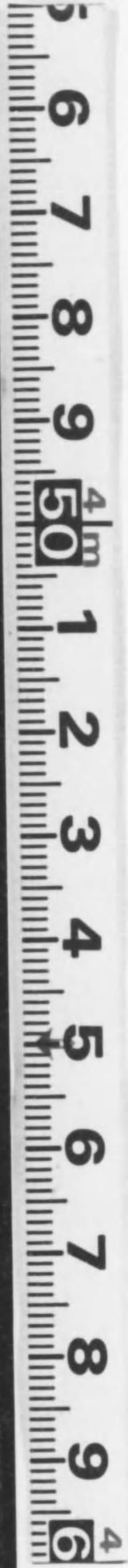
332

332-444



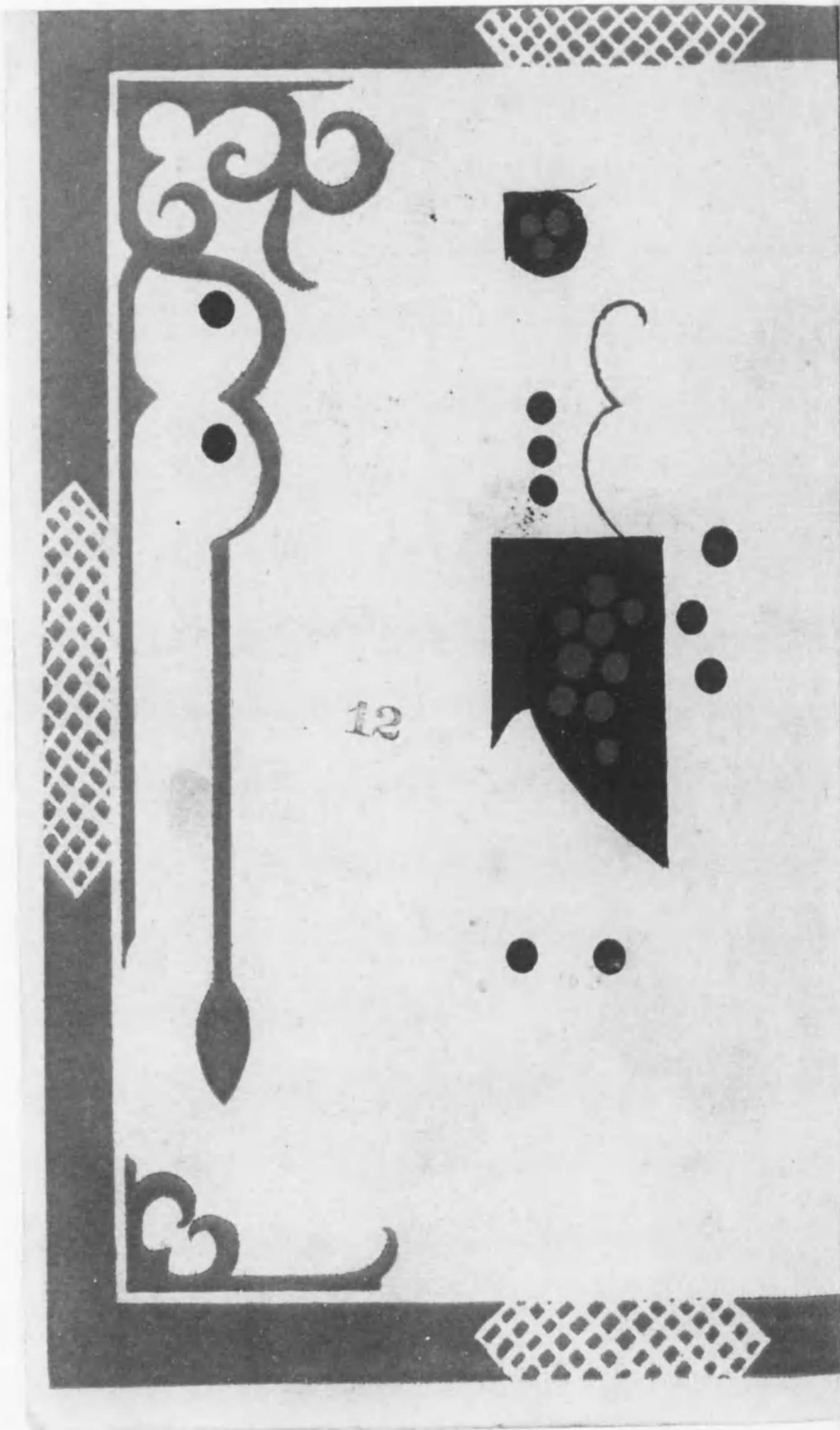
1200501390548

4

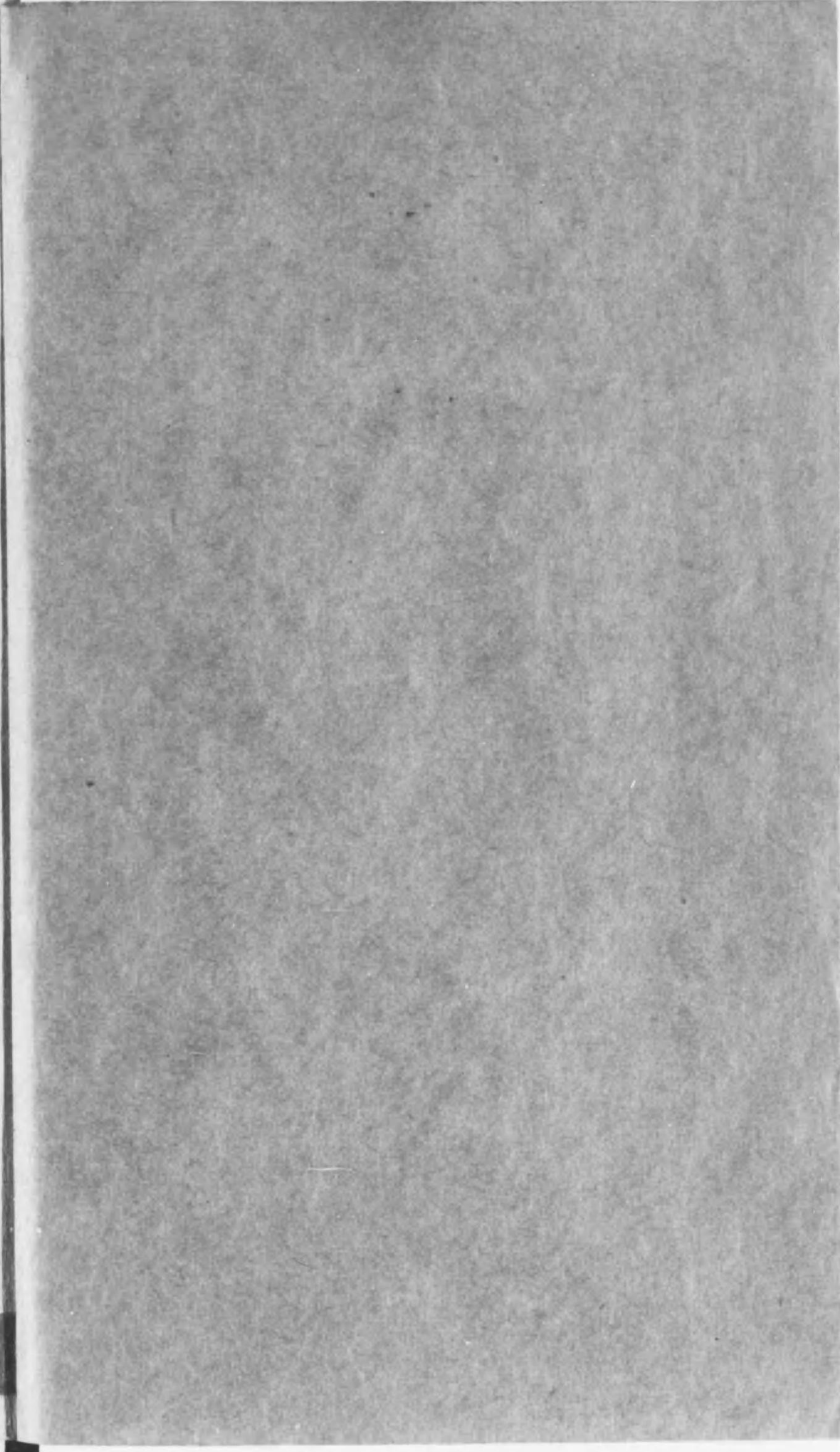


始



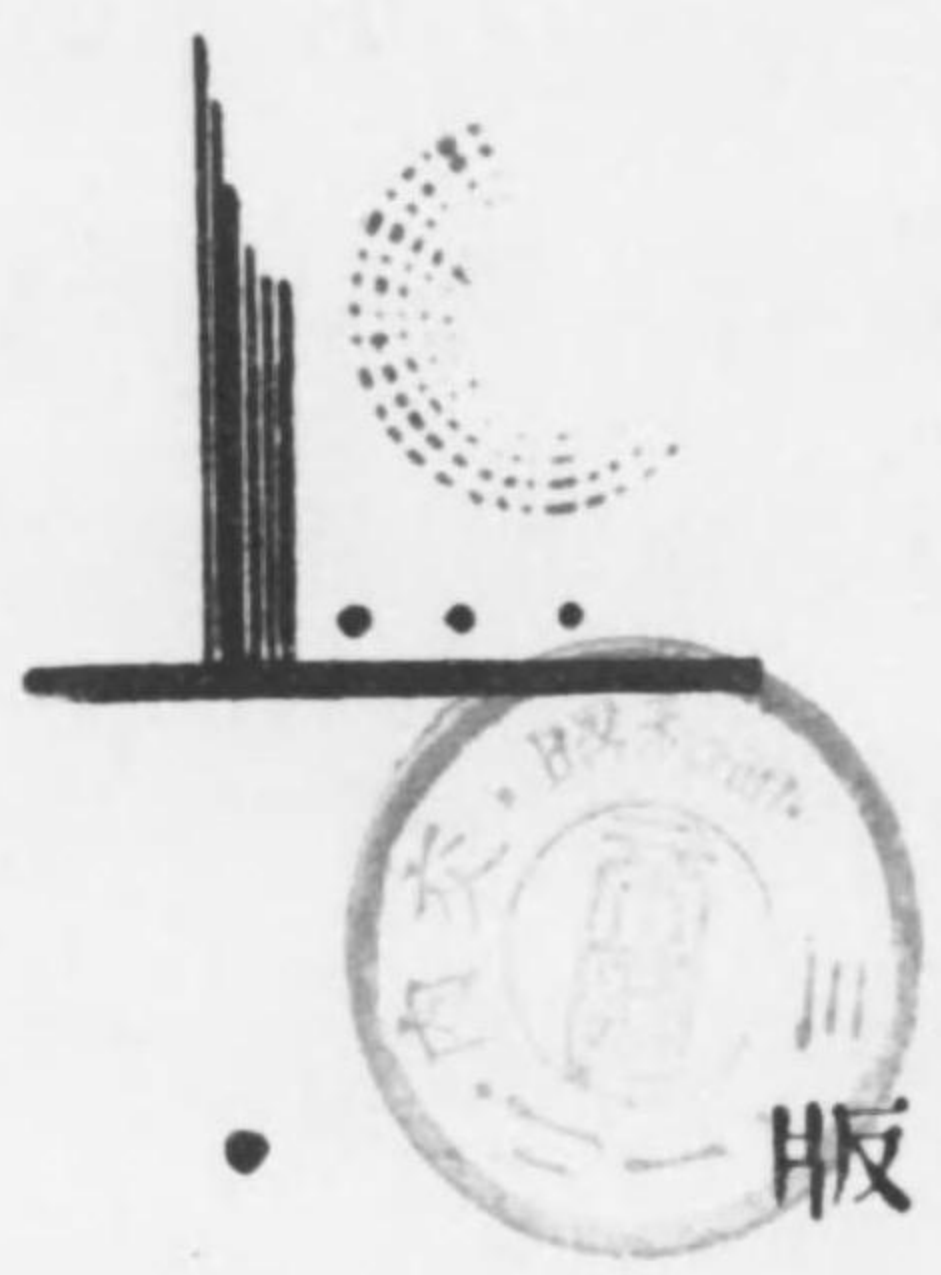


12



戀年と愛
他のそ

著年松村松



京 電
版 堂 陽 春

332444

生物學の社會觀

自序

蟻や蜂の共産的の社會組織に必要な條件は、第一、能力の同一なること。第二、女王外の女性には生殖器の退化を要求すること。第三、怠業は絶対に許されないこと。それで始めて共産的の社會が成立するのである。今日の吾々の社會は、幾十萬年の星霜を経て、漸次、かく進化し來つたものなるが故に、その社會制度を根本的に改造するが如きはその不可能は兎に角、今日の露國の如く、破壊に陥り、遂に世界の先進國とその歩武を等しくし能はざるに至るのである。總て食物でも、習慣でも、因襲でも、急激に變改することはその人の壽命を短縮することになる。

本書は生物學上の見地に立脚して、現代の社會を批判し、その穿き違へられた思想を摘發し、社會に處する健全な道を述べた積りである。而して爲に論ずる十の問題は何れも人間の現代に處するに大關係のあるものである。殊に米食や、産兒制限や、變愛や、生命のエレキシアやの問題は何れも吾々に重要な問題である。その他娛樂の考察と云ひ、「科學と宗教」と云ひ、「生存競争と相互扶助」と云ひ長命の意義と云ひ、教育の意義と云ひ、何れもが今日の處世法に關係せざる

ものがない。而して文明とその將來の問題になると、民族の消長に關するもの少なからざるを以て著者は殊に注意して執筆した積りである。以上これ等の問題は多く思想上のそれであるが、若し夫れ人體的の考察に到りては他日、章を改めて讀者と相見えるの時あるを期す。

昭和三年十二月

於札幌 松村 松年識

目次

- 一、社會性と人間性……………一
- 二、文明とその將來……………二三
- 三、教育の意義……………五一
- 四、娛樂の考察……………六九
- 五、科學と宗教……………八三
- 六、民族と米食……………一〇一
- 七、生存競争と相互扶助……………一三五
- 八、戀愛と年齢……………一七七
- 九、長命の意義……………一九五
- 一〇、生命のエレキシア……………二〇七

一、社會性と人間性

生物界の研究を進むれば進める程、生物が如何に生に執着してゐるか、知れる。彼の蕪菁や蘿蔔の葉を幾ら摘み取つても、更に新芽を出して、枯死することはない。併しながら一度、その花を開き種を結べば、彼等は間もなく枯れてしまふ。而してその種は地に落ちて根を出し、莖を抽き、更に花を開き、終には種を結び、而してその生命を子々孫々へと傳へて行く。彼等は生れ、生長し、生殖し、而して死すると云ふ四つの過程を繰り返して居る。それが爲めに爰に永遠の生命がある。

生物の目的は蓋し子孫の繼續にあるが故に、第一、生きることが必要である。その蕃殖力は春の雑草の萌へ出づる如く、夏の蛆蟲の蕃殖、旺盛なるが如く、その生活力は頗る強く、容易に何者もそれを遮断し得ないのである。

彼の鬪々として花間に戯るの胡蝶は、その卵子を産下せんが爲めに、朝より夕に至る迄、彼處是處にと徘徊してゐる。これが爲めに、或は蜘蛛の網に掛ることもあらう、或は蜂に捕はるゝこともあらう。然れど彼れの翅は強くして、それに一種、波動の運動のあるが爲めに、容易に敵害に掛らないのである。蟲害を被れるの果實、礫の地に生長せる植物、これ等の生長は何れもが頗る早いのである。古き種子を産下すれば二年草でもその年内に開花して實を結ぶ。蓋し斯くの

如き事情の下にある。植物は、長く生存し能はざるが故に、その枯死に先ち、子孫の繼續を計らざるを得ないのである。何れの植物も、澤山の果實を結ばば、多く枯れて仕舞ふ。少しでも生活力のある間は、その全勢力を擧げて花を開き、その實を結ばんとする。片輪の人間や、病者の早熟するのや、その他、印度人や阿弗利加人の十歳前後で生殖するものや、その何れもが子孫の繼續を急がんが爲めと見て良いのである。吾々の存在する地球、生物の大なる搖籃。そこには確に寛大さがあり、人間の如き我利々々が少しもない。晨に赫々たる太陽は隈なく地球上を照らし、夕には眞如の月が廻く慈母の如き光りを投げてゐる。春は花笑ひ鳥は歌ふ。夏の緑、秋の紅葉、水は滾々として流れ、風は颯々として吹く。これなれば自然は確に善である様に見える。然れど暴風は吹き荒み、天地晦冥に屬するの時、自然は確に惡である様にも見える。

抑も善と云ひ惡と云ふ、或は善と云ひ、益と云ふ。これ等の言葉は必ずしも正確の眞理を現はしてゐない。吾々の收穫物を盜食するものが敵であり、その敵を殺すものが吾々の味方である。甘藍の螟蛉は菜葉を食するを以て吾々は極力これを驅除するが、それは甘藍に對して同情があるのではなく、吾々の利益に對する必要上の驅除法である。

食慾の爲めの狂氣的競争、それが總てを決定する人間の基調となるのである。即ち力は正義で

あり、詐欺も泥棒も、畢竟するに、生きんとする生物の努力の對象に外ならない。自然の美は人間の爲めに存在してゐると云ふ、それは大なる淺見であるとならば云ふてゐる。

自然は吾々に新鮮なる野菜を供給して呉れるが、それは又螟蛉の生活にも必要な食物である。自然は甘き櫻桃を作りて吾々を喜ばしめるが、それを食ふ蛆蟲も亦その分與を要求して吾々と競争せんとする。吾々が利益を得れば、彼等も亦利益を得てゐる。吾々が自然の寵愛兒であれば彼等も亦同じく自然の寵愛兒である。吾々の目的がその子孫の蕃殖にあれば、彼等の目的も亦そこにある。その目的の爲めに、その厭きな貪婪性が、螟蛉にも蛆蟲にも否、人間にも必要なものである。彼等の胃腑は食ふが爲めの夫れであり、餓鬼の如く食るのが彼等の使命である。彼等の生きんとする努力は吾々の生きんとするそれと何等の差異はない。生物の天下は蓋し胃の天下で、食物なくして戀愛も道德も宗教もあつたものでない。人は自ら稱して萬物の靈長と云ふ。彼れには生殺與奪の能力はあるがその爲めの權力はない。善も惡も、畢竟するに、人間の利己より打算せられた夫れであつて、決して絶對性のものでない。

山野は切り開かれ、蟲は食ふに糧なく、住むに家がなくなる、吾々の同胞は、今や米國フレノの葡萄園より放逐せられんとしてゐる。彼等にはその生きんが爲めにその山野も、葡萄園も亦

必要なのである。彼の雀は春時、害虫を捕食するを以て人類に有益であるが、秋になれば穀物を食ひ農家に有害である。春秋の兩季によりて、ピツクリ箱の様に、その害益を轉倒する様な社會に、絶對の善惡が何處にあらうか。

花を媒介するの蝶は人類の友であり、その菜葉を食するの子供は敵である。その子供に寄生するの蜂が友であり、その蜂を殺すものが敵である。然らばその益や害に如何なる標準があらうか。その生活の權利を侵害せられた場合が害であり、敵であり又惡でもある。その生活を助長するものが益友であり、味方であり又、善である。彼の有名なる詩人ブラウニングは、至上善とは何ぞやの問ひに對して、「處女の接吻にあり」と答へた。即ち彼れの至善は必ずしも吾々の至善とは一致してゐないのである。その善惡の標準も亦人によりて大に異なりて居る。故に西哲シヨペンハウエルは道德の標準を定むることは困難であると喝破した。彼のアインスタインの相對性原理は人間社會の道德や倫理の基礎を根柢より轉覆した。蓋し倫理も、宗教も、哲學も、生物學の研究によりて、昔日と大にその出發點を異にしたからである。而して生物界の善惡は、徹頭徹尾、相對性であつて、善の神があれば又惡の神もある理である。善の宇宙があれば又惡の宇宙もある理である。世界の民族が斯くの如く地球上に割據してゐる間は、道德の標準も倫理の基礎も、亦爰

に樹立する理には行かない。敵國に款を通ずるものが賊であり、他の民族の爲めに貢獻するものが己れの民族の敵である。自國の隆盛、己れの民族の幸福、何れもが自己の隆盛であり、又自己の満足であるに違ひない。

一定の財産や土地を有して割據するの社會に、己れの民族にも他の民族にも都合の良いと云ふ理由は何處にもない。一方が隆盛になれば必ず他の一方は衰退してゐる。

夫れ共存共榮の現象は民族や團體間の社會には存在してゐるが、その他には絶對に存在してゐない。畢竟するに民族を超越する共存共榮の現象は何處にもない。

一國と一國との同盟は他の強國に對するのそれであり、人と人との提携は相互の利益の秤に立脚してゐる、狼と狐の同盟は兎を捕へんが爲めの夫れであり、兎と兎の共棲は狼や狐に對しての夫れである。その利害の相反する社會に、甲にも乙にも、利益のある理由は何處にもない。例へて幾百萬年後に、トマス・ペーンの所謂、世界の祖國や、ウエルの所謂、世界の政府が實現せられても、生きるに云ふ權利が人間にある以上は、武陵桃源の仙境は愚か、永遠の平和は蓋し望まれないのである。その生きんが爲めの努力は、子々孫々へと、益々濃厚になり行くであらう。

要するに總ての慾望は自己満足にある。而して自己満足の對象は生の歡喜にあり、生活權利の

保障にある。而して生に執着するの本能は、生物を永遠に継続せしめて、それが永遠の生命となり、それが亦生物の目的でもある。

人生は生れてから死する迄、徹頭徹尾、悪戦苦闘である。若し平和、安逸の時がありとすれば、それは墓場に入りてからである。故に獨逸では墓場のことをフリードホーフ(平和の庭)と云つてゐる。

人は一種の動物であつて、その活動する所に人生の意義がある。人は便々たる腹を鼓して何等、植物性の生活を送るべきものではない。人は蒙昧であればある程、怠惰の本能に支配せられてゐるが、文明に進めば進む程、益々その怠惰の本能を征服するのである。露國には働かないものは食ふべからずの法律を作つてゐるが、それは怠惰の人間の多きことを意味してゐる。文明の人間になればなる程假令、家に蓄財があつても、何等労働の必要がなくとも、而かも猶、労働は愉快であり、天職であると云ふ考へに支配せらるゝのである。人に苦がありてこそ始めて樂があるもので、苦も樂も畢竟するに相對性のものである。弓も弦を引き矢を放つてこそ意義があるが、引かぬ弓は、點さぬ提燈と同様に何等の意義がない、人間も亦奮闘努力する所に意義があつて、これに自然と愉快が伴ひ來るのである。併しながら人の活動には心身の健全なる體格が必要である。

彼の有名なるマシユースは「成功の第一義は、健康なる體格であり、その體格は明晰なる頭腦よりも少なくとも五割の利益がある」と言ふてゐる。人間は所謂、生あつての物種で、世には生なくして何物もない。人間の理想が如何に高遠であつても、病氣や神經衰弱に罹ればその存在の意義がない、人間は何んと言つても健康なる動物となるの必要がある。而してその目的は何んと言つても自己満足にある。即ち己れの幸福であり、己れの安身立命にある。要するに奮闘努力の對象は人に迷惑を掛けない享樂にある。而かもその享樂は、科學的の夫れであつて、迷信的であつてはならない。他力的にあらずして自力的であらねばならない。彼の山中鹿之助は天に向つて吾れに七難八苦を與へ呉れと叫んだ様に、吾々は困難に接面する所に、人生の愉快があり、そこに自己満足がある。センチメンタルの人間の様に、神佛に冥福を祈り、宗教的の病的暗示によりて去就するものゝ如きは吾が黨の關知せざる所である。達魔の脱壁九年と同様に、懷手式の空想や迷想は現代人には禁物である。カーライルの言つた様に奮闘せざるものは眞の英雄ではない。吾人の背後には人類の努力と、人類の勝利との六千年が横はつてゐる。未だ征服せられざるエルドロス(寶の山)がある。英雄は則ち力であり、戦闘士であり又自然征服者の選手でもある。而して英雄は遂に世界を征服するのである。ナポレオンは優秀なる大將の第一義はその強健にあると

喝破した。彼のダニエルウエプスターの萬人を壓伏した獅子吼の大雄辯はその偉大の體格に歸因してゐる。彼のビスマークの獨逸聯邦を併合せるが如き偉業も亦その強健なる體格にあつた。而してその強健なる體格は蓋し英雄の屬性であつて、決して缺くことの出来ないそれである。

人は動物である以上は、活動の一方には、休養を要するのである。英雄には所謂、閑日月が必要なのである。而して爰に道樂や趣味の生活が人間に必要なやつて来る。蓋し人は連続的に緊張し得るの體性を有してゐないからである。尺蠖の屈するや伸びんが爲めであるが如く、人も亦進化せんが爲めにその退化も亦必要である。人生は旅の如きもので、人がその旅舎に着き休眠するのは總て一層の勢力を得て、更に大なる旅をなさんが爲めである。又一方、榮養物のある食物を攝取するにあらざれば、人は活動し得ないのである。昔時は精神一到何事かならざらんやと言ふてゐたが、今日ではその過まれることが知れて來た。而かもその精神は専ら食物によりて涵養せらるゝのであるから、吾人はこの食物の問題を等閑に附してならない。

一方、吾人は主觀的の宗教問題や、その他演繹的思考問題に貴重なる時間を浪費してはならない。而して克己、攝生、而かも合理的、秩序的の行動が人生に必要なである。而してそれが現代の知識に立脚せる行動であらねばならない。

吾々の社會組織は數千年の星霜を経て、野蠻時代や蒙昧時代を通り、漸く今日の文明に進み來つたのである。故にこれを根本より打破、改造するが如きは、不可能は兎に角、非常のネゲチーブである。彼の露國では今日、祖先傳來の帝國を倒壊して、所謂、共産的の勞農政府を組織した。これは専らクロボトキンの相互扶助の僻論にそのヒントを得たと曰はれてゐる。社會組織をなすの蟻や蜜蜂の社會が抑も圓滑に進み行くのは、蓋しその組織の共産的なるが爲めであると彼等は云ふ。然れど蟻や蜜蜂の社會の共産なるものは、その前提として體格や智能の同一を意味するのである。又女王の外、全部が生殖器の退化せる職蜂若くは職蟻である。即ち蟻や蜜蜂の社會が一體であつて、その團體が一個人と同様に活動し居るのである。吾々の身體が幾百億の細胞より成り、それが或は眼となり、口となり、手となり、足となりて、各々分業的に活動し居るのと何等、選ぶ所がない。故に蟻や蜜蜂の社會に忘業するものが多ければその社會の破滅となるのである。人間の身體の細胞も亦サボルものが多ければそれこそその死滅となるのである。即ち蟻や蜜蜂は、畢竟するに、吾々の身體組織と同様の關係にある。人間の細胞にしても、その蟻や蜂の個體にしても、何れもが同等の能力を有して居るのである。然るに人間になると、他の生物と同様に、その能力に於ては毫も同一ではない。露國では、勞農政府組織後の三年目、即ち千九百十八

年に、一大早魃が起つたのである。所がその當時、ヴルガの大河には洋々たる水を見ながらも、それを引き擧げることが出来なかつた。即ち筋肉的の労働者にはその水を引き上げて利用する様な脳力がなかつたのである。又ウクライナやコウカサスの地方には小麦やその他の穀物が無限に蓄積せられてゐたのである。然るに鐵道の破壊によりてその運搬が不可能に陥り、而かもそれを修復するの技術者がゐなかつたのである。その當時、彼等の有能者は何れもが海外に亡命してゐたのである。その他、或は鑛物の如き或は石炭の如き無限の天然物を有しながらも、彼等は技術者の缺乏の爲め、遂にそれを開掘し得なかつたのである。如何に國に一億の人間が居つても、教育なき眼に一丁字なき勞農者許りでは、それこそ蒙昧時代の人間と相違ぶ所がない。露國の法律はその當時、一萬ルーブル以上の遺産を禁じ、それ以上を有するものあれば全部政府が沒收したのである。それでは人間の奮闘努力の精神を萎靡せしめ、國は益々貧苦に陥るの外はないのである。露國は働かないものは食ふべからずの法律を作り、僧侶や貴族を全滅せしめたのである。所が彼等は今や自ら作れる法律に掛り、所謂、自縛自縛となつて、百萬の乞食によりて大に惱されてゐる。今やそのルーブルは五十錢臺に下落し、國は年を遂うて益々疲弊し來らんとしてゐる。蓋しこの共産的の制度は、生物學上の原則に反して、根本的に脱線してゐるからである。況んや

今日迄、吾々の築き上げた傳統的の文明を根柢より轉覆したのであるから、今日、露國を昔時の帝政時代に恢復するには、餘程の年月を要するであらう。否、彼等は今や文明より置き去りに遇ひ、再び世界の一等國とその歩武を等しくすることは困難であらう。而して露國は今やその失政に醒め、教育なき無能者を貶して、有能者の寡頭政治に還元したのである。

夫れ動物はその母體より生れ來るや、一として同一なるものはない。彼等は、その體力に於ても、その智力に於ても、大に異つてゐる。老翁の狐には老翁の子供が生れ、優秀なる家系には優秀なる子孫が生れる。而してその能力は更に教育によりて助長せらるゝのである。その頭腦の如何によりては或は電氣王のエヂソンとなり、或は大化學者のラボジエムとなり、又ヘルモホルツにもなる。或は時に千古の英雄ナポレオンを出し、又時にはジスレリーを出し、モツソリニーを出すのである。吾々は露國の共産的、勞農政府に鑑み、今や學者や英雄や偉人の産出を冀ひ、その英雄や偉人に憧憬するのである。一國に大英雄が現はれるにあらざれば、その國を世界的に雄飛せしめ得ない。國に大發明家を生むにあらざれば、その國の富力を増大ならしめ得ない。吾々はなだらかな時を社會に與へて、その社會を改造することは好いが急激にそれを改造するが如きは蓋し革命であつて、而かもその革命は古來、行き過ぎて破壊に陥つてゐる。若し吾々が、蟻や

蜜蜂の社會の様に、共産的の社會を組織せんと欲せば、宜しく第一に生殖階級、即ち女王や雄蜂や雄蟻を守り立てざるを得ないのである。第二に女王外の女性には、全部生殖器を退化せしめざるを得ないのである。而して若し全部のものがその女王より生れ来る子供を保育し、教育し、而してそれを守り立て、行く様になれば、そこで始めて共産的の社會が成立する。併しながら、その社會の生殖能力を有する女性は單一女王であつて、他の女王を決して容れないのである。而かも亦その社會は絶對の服従、絶對の本能に縛られてゐて、一步も自由行動が許されないのである。これが即ち蟻や蜜蜂の共産的、社會組織であるから、吾々は大に覺る所がなければならぬ。吾は生物學を研究するに當り、社會組織に暗示を受くる所が決して少なくないのである。

生物は種と種との生存競争によりて進化し、その種の團體より成立する國と國との競争によりて、その興亡が定まるのである。故に吾々は、この原則に立脚して社會を組織し又改造せざるを得ないのである。戦争は飽く迄、避けなければならぬが、さりとて無抵抗になればその國は退化する。戦争があつて始めて社會が進歩し、人間も亦進歩發達することになる。これが傳統的の社會性であり、人間性でありとすれば、宗教家の言ふ様な、抵抗主義や、博愛主義や、隱遁主義や、無妻主義や、その他、社會の進歩發達を阻害する様な、因襲や習慣は大に戒めざるを得ない。

幾等、宗教家や道學者が高遠なる言論を披瀝しても、社會は依然として生存競争である。その争闘に因り斯くの如く進化し來つた人間であり、社會である。而かもその抵抗力の増進は、蓋し進化の一階段であるからだ。無抵抗主義の社會は亡び、敵國なきの國家は滅亡する。羅馬は強敵カルターゴを失つて亡びた。國家は民族を團體とする夫れである以上は、世界同胞主義の實現せらるゝことは先づあるまい。國家を超越する猶太民族や、世界同胞的の社會主義は蓋し民族の敵である。故に吾人は民族間の協力一致を計り、相互扶助を奨励し、一旦、緩急事あれば、國家に殉ずるの民族思想を涵養せざるを得ない。現代に於ける社會主義は民族を誤り、國家を危殆に導くものである。

夫れ教育は實質的に生殖の延長である。教育の目的は完全なる人間を造ることにある。種族の維持繁榮がその目的であらねばならない。世はスペンサーの所謂適者生存であるから、民族としては、健全なる社會を組織する爲めに、圓滿なる常識ある人間を造らねばならない。吾々には心身共に健全なる子孫を生殖すべき義務がある。父母の懷より生れたる子供等は、丁年になる迄は依然として父母の懷にあるもので、雀の巢立ちと同様に、肉體的にも、精神的にも缺陷だらけである。彼等を保護し、指導し、教育することは、父母や國家の義務である。人は生殖を終りたり

とて、漫然これを放棄すべきものでない。畢竟するに教育は生殖の延長であるからだ。教育には家庭教育や、学校教育や、社會教育の三種がある。又これを受ける者によりて、智育と體育と徳育との三種がある。而して何んと言つてもその内の智育が第一である。今日の教育は智育に重きを置き過ぎてゐるが、それでもそれが社會の進運に伴ひ居るのであるから、先づそれで差支へはあるまい。否、國家は更に一層の教育機關を具へ、更に一層の學者や發明家を作るの必要がある。今や米國では津々浦々の郵便局に到る迄、學士が多數に奉職してゐる。これでこそ始めて世界に誇り得るの文明國と言ひ得るのである。これでこそその國の眞價値が高まるのである。

第二は體育であるがこれも亦今日大に獎勵せらるゝ様になつて來た。然れど如何に體育ありと雖も、今日の社會はその選手を高位高官に採用する様になつてゐない。如何に體育を獎勵するも大發明家や、大政治家は現はれて來ない。故に智育はその主であつて、體育は則ちその副である。併しながら、吾々は健全なる體軀には健全なる精神の宿ることを忘れてはならない。

第三は徳育であるが、これは體育よりも大に劣り居るものである。何んとなれば今日、如何に徳の大きい人間も、知識なく教育なきに於ては、主觀的に陥り易く、到底、重要な地位を社會に得ることが出來ない。如何に孔子の道を説き、如何に聖人の教を彼れ是れ言つても、その品行をも

慎まざる富者や、有力者を社會の上位に立たしめある以上は、徳育上、何等、好果を納めるの望みはない。如何に勤儉貯蓄をしても、一生涯掛つて僅な財産すら出來ない社會の一方に、投機的や相場的の一攫千金を得るの道のある以上は、到底完全なる徳育は望まれないのである。今日、富を得たる者は勤儉貯蓄以外の何物かによりて得たことを人の知る以上は、依然として世は惡化せざるを得ない。世には文明を呪ふ者があるが、その思想こそ國運の進歩を阻害するものである。社會組織に呪ふべきの缺陷がありとすれば、徳育はその救済には餘り効力がないのである。凡そ人類が多くなればなる程、徳育は益々衰へ行くであらう。然れど吾々は智育あり、體育あり、兼て徳育のある人間の社會の上位に立つことを切望するものである。今日、幸にも徳望なきものは社會より除外せられんとするの傾きがある。徳育なきものは社會の交際場裡より除名せられんとする所に迄、世は進み來つたのである。彼の前科ものには今日、社會は如何なる地位をも與へないのである。故に徳育は社會の獎勵なくとも各自、進んでこれを修めんとするの傾きがある。苟も社會に地位を贏ち得たる教育あるものは、世に徳育の何等の機關なきも、自ら進んで能くそれを修め得るのである。自發的にその徳を磨き、その精神を修養する様に社會は進み來つたのである。現今、社會制裁なるものが嚴存する以上は、人は左程、惡い事が出來ないのである。これが

現今、宗教の衰へ、社會道徳の進み來つた所以である。

今日迄の倫理は人間を靈妙なる一種特別なるものと思つてゐたのである。その思想は則ち幼稚なる時代の殘物であつて、吾々は今日、人間性の眞相を知ることにより、今後、倫理的思想も亦大に改善せねばならぬと思ふのである。孔子は性は善なりと言ひ、荀子は性は惡なりと言つてゐるが、世の中に、畢竟するに、善もなければ又惡もないのである。蓋し善と言つても、惡と言つても、要するに何れもが相對性のものであつて、これは人間が社會を組織するより起るの實際問題である。若し人間がロビンソンクルソーの如く、孤島に單獨の生活を送つて居れば、勿論、惡や善のある筈がない。爰にフライデイが現はれ來り、始めて善惡の觀念が現はれ來つたのである。換言すれば、世の中には絶對の善もなく、又絶對の惡もない。即ち勝てば官軍、負ければ賊軍の關係にある。戰時、同民族に對しての善行は、敵國に對しての惡行となる。人間の幼稚なる時代に、善であると考へたことが、文明の今日、惡であつた場合が決して少なくない。人間はアミーバから進化し來つたもので、アミーバは生れるや直ちに植物性の小生物を以て食としてゐる。彼等は足を出し、手を出し、強盜的の生活をしてゐる。これより進化し來つた人間に何等、性の善なるべき筈がない。されど文化は、下等動物を征服することによりて現はるゝのであるから、

世が進むに従ひ、所謂、惡は善化せらるべきである。この意味に於て世を文明に導く事が即ち世を善化せしむることになる。

夫れ信仰なるものは理解外に立つものであつて、大部分は迷信である。若しそれが眞理であれば、毫も信仰する必要はないのである。社會に迷信のある間は所謂、宗教は依然として必要である。故に民族としては回々教徒の如く勇ましく戰闘せしむるの人間を養成することが、勝つて優勝することになる。人間性を没却したる隱遁的、無抵抗の宗教を遵奉する民族は、勝て亡びることになる。木を見ても枯れさうな木は早く枯れる。國に天變地異が起つた時に弱きものは強き者よりも早く死する。かくの如く、國家も亦非常なる秋に當りては、弱きもの程、早く滅亡する。如何に深遠の理想があらうが、如何に幽玄の哲理があらうが、いざ戰爭と云ふ場合に、これ等の所有者は國家に何等の利益を與へない。今回の關東の大地震は、殊にその然るを知らしめた。即ち知識あり、強健なるものがその困難に打ち勝ち得るのである。證録せる人間の口許りの行動には何等の意義がない。印度に於けるヨーガ宗の僧侶が如何なる神託を言ふか、それには何等の意義がない。一ヶ月も地中にあつて飲まず、食はず、而かも骨と皮となり居る彼等に、抑も何の權威があらうか。難行苦業によりて贏ち得たる宗教家の經驗や、思想や、觀察には多く錯覺が伴

ひ居るのである。蓋し彼等は吾々の平時、行はない苦業や難行によりてその肉體や心理状態に異状を來すことが多いからである。斯くの如き境遇にある大部の人間は多く自己催眠に罹り易く、而してその感想や暗示によりて萬事を處することになると、今回の天理教の不敬事件と同様に、大なる誤りに陥ることがある。大本教でもその他、文明人の宗教として誇り居る基督教でも、大にその傾きがある。實驗の伴はない思考や、迷想は、アインシュタインの言つた様に、徒勞なるのみならず、人間社會に何等の利益なく、それが反つて有害なる場合が多い。彼等は恰も神經衰弱の人間と同様に、先へくと空想に耽溺し、實社會を離るゝことが多いのである。その思考が假令、誤れるものでも彼等は、それを狂亂的に社會に傳播せんとする、今日、基督教の牧師や祖師が二千年前の教義を今も猶、その儘、現代の社會に宣傳せんとして居るのであるから、そこに不合理のあることは免がれない。無論、吾が憲法は宗教の自由を許して居るから、如何なる宗教を信じ、如何なる信仰を告白しようが、それは自由勝手である。然れど、現代の社會と没交渉は兎に角、人間性に違反する様な教義の宣傳は、吾が民族にとりては甚だ危険である。彼の博愛主義や、世界同胞主義は、露國のボレスヴ・キーと同様に、國家の基礎を危くするものである。故に敬耳注目、吾々はその宣傳に過まらされてはならない。如何に信仰ありと雖も、如何に神に近き人間でも、肉體を有する以上は、食物を攝らざるを得ない。食物は病人や子供の如く、人が護謨管や匙によりて供給し呉れるものと思へば大なる誤りである。人間は下等動物と異なりて、食物の外に、更に衣服や家屋を要するのである。吾人は、伊太利や西班牙の如き不生産的の僧侶の多き國の、既に滅亡に近づきつゝあることを忘れてはならない。露國は不生産の僧侶や大なる伽藍の多きが爲めに禍をなして亡びた。若し夫れ國利民福的の宗教であればそれこそ大に歓迎すべきである。而かも今日の宗教は不幸にして多く不生産的であり、グルースの所謂、病的であり又センチメンタルである。

吾々は科學に立脚し、眼に觀、耳に聞き、手に觸れて自ら實驗し、而してその實驗を確めるの必要がある。目的論より來る宗教の教義や主觀的思考より來る判斷は、大に注意せざるを得ない。宗教的の叙述には何等の實驗やデモンストレーションが伴はないのであるから大に注意を要する。信仰のみによりて去就し、それによりて行動し居る人間は、非常なる馬鹿を見ることがある。現に今回の世界の大戦争に當り、宗教的の教義に過まられ、百萬マーカーの大金を寄附して遂に乞食になつたものが獨逸にゐる。人生の五十年間は詐され勝ちであつて、詐されない様にするにはどうしても知識を養ひ、苦き經驗を積まざるを得ない。蓋し知識はトムソンの所謂征服であ

戀愛と年齢その他

り、オーグストの所謂、豫見であり、豫見は又力でもあるからである。

二、文明とその將來

文明とは何を意味するのであらうか。これは無論、説明する人により、各。其説明を異にして居る。又夫れは誰れであらうが簡単に説明の出来るものではない。ハベール、ロビンソンは人類の理想を社會に實現する事が文明であると説明して居る。過去の文明は今日の文明でなきが如く、今日の理想は又將來の理想ではない。吾々は現代の科學を研究すると共に、過去の科學の甚だ不完全にして幼稚なりしを見るのである。過去は信仰の時代であり、現代は實驗の時代である。信仰や、想像や、思考は、千年前も今も猶變りはないが、科學的の知識は時々刻々と進み行くのである。文明には常に二つの潮流があつて、一は傳統的の文明であり、他は科學的の文明である。前者にありては、祖先傳來の遺産や、思考に基礎を置き、其習慣や風俗に重きを置き、何物も新奇を嫌ひ、新説を誹謗するのである。その主張は所謂保守的であつて、寧ろ反動的に新事實を隱蔽し、これを抹殺せんとするの傾きがある。彼の天主教の僧侶がダーウキンの「人間の由來」に對して、大反對せるが如き、或は現代の道德觀を嘲笑せるが如きは、則ち夫れである。これに反して科學的の文明となると、常に實驗を伴ひ、其實驗に立脚せるの事實を踏臺となして、更に新しき階段を登り行くのである。これは既に希臘に其源を發し、ソクラテースの犠牲となり、プラトウのユートウピヤ觀となり、アリストートルの宗教觀となり、何れもが傳統的の社會觀を破壊

したものである。事實の獲得によりて、彼の贖罪説や、人間の運命説は、實質的に今や其影を沒したものである。此等の觀念は嘗て吾々人類の歡喜であり、福音であつた時代があつたに違ひない。昔日の文明は其義務を知り、夫れに服従せよであつたが、今日の文明は知識を獲得し、これに信賴せよである。古き文明は服従であり、謝罪であり、無抵抗であつた。所が、今日の夫れは平等であり、同權の主張である。此兩者が今も相、推し合つて同行して居るのである。今日の世界的の革命は科學の賜物であり、其組織的の發達によりて招致せられたるものである。古き文明は直ちに國家的主義を振り翳し、戰爭を懲懲するのであるが、新しき文明は知識の交換により、解放と、自由とを附與するものである。古き文明は今も猶流血の戰爭を招來せんとするの傾きがあり、新しき文明は戰爭を防止し、而かも夫れによつて起る破壊を成るべく少なくせんとするにある。昔時は戰爭や、疫病や、其他、不治の病氣の爲めに起る損失を補はんが爲めに、無限の人間が製造せられたのであるが、今日の文明は優生學の研究や、産兒制限によりて、粗製濫造を誠め、遺傳的の疾病や、不具者を追放し、所謂社會の幸福を増進する様な、強健優秀なる人間を製造する事である。新しき知識が獲得せらるればせらるゝ程、新しき酒を古き壺に注入するの愚たることを知るのである。新しき文明の從伴者は、戰爭の爲めに、其勢力を浪費せんとする古き文明

と、同行し得ないのである。新しき文明は戰旗を振り翳し、敵を罵倒するが如き行動を執らないのである。世界の平和の爲めに、總てが手に手を携へて、立たねばならぬ事を教へるのである。他人の權利を侵害し、他人の自由を剝奪し、女人を禁制するが如き古き思想や、習慣を葬つて、人間の總てに、自由と、満足とを附與せんとするのが、現代の文明である。所謂、今日の文明は各自の自己満足であらねばならぬ。總ての人間は現代の進歩せる教育を受けねばならない。これが爲めに、無限に生れ來り、教育を受け得ない様な、多數の子供を産する事も亦大に謹まざるを得ないのである。昔時の文明は、量の問題であつたが、今日の文明は、質の問題である。一度、悪性劣等の人種が根柢を張ると、雜草と同様に、其剝絶が中々困難になるのである。米國は嘗て漫然として世界各國より移住者を招致したのであるが、今日では夫れが非常の禍をなして居る。これが爲に、高等教育を受けたものでなければ今や移住を許可しないのである。

昔時の哲學は空想に立脚し、デカートの様に、神の存在を假定した哲學であつた。所が今日の哲學は大に其趣きを異にし、實驗を伴ふの夫れとなつた。哲學の研究は、アリストートルの時代から、二千數百年間、行はれ來つて今日に到つたのである。別に大した進歩をしたとは思はれないのである。これは蓋し達磨の九年の呪壁と同様に、思索や、空想に據つて眞理を掴まんとし

たからであらう。ベルグソンやペーコンの様に哲學の基礎を科學や實驗に立脚せしむる様になれば、夫れは幾分かは掴まへ所がある。古の倫理は人間を靈妙なる一種、特別なるものと思つてゐたのであるが、今日では人間は下等動物より進化し來つた事が知れたのである。而かも其倫理は、アイスタインの相對性の發見と共に、根柢に於て破壊せられたのである。即ち今日では絶對の善惡がなく、又絶對の道德がないのである。即ち善惡の問題は、時と所々によつて、大に異なるのである。アダム、エバの兩人がエデンの樂園に居つた時には、無論善惡の問題はなかつたのであるが、ケーンやアベルが出て來て、始めて爰に善惡の問題が現はれ來つたのである。アミールは生るや直ちに植物を食ひ、手や足を延ばして強盜的の生活を送つて居る。これより進化し來つた動物や、人間に、性の所謂、善なる筈がない。これ等下等動物の性質や、本能を征服するところが即ち文明であるから、人間の前途は洋々として實に有望なのである。

今日の文明は科學的に因果の法則を知る様になつて來た。暗雲は忽然として起り、天地晦冥に變轉すと雖も、吾人の背後にはこれを繰釣る何物もないのである。雨は降るべき理由を以て降り、風は吹くべき理由を以て吹くのである。太平洋の沿岸を洗ふ約二萬哩は、噴火山に富み、そこは又地震の搖籃地である。吾が相模灣には數哩の深海が二三個所もあるから、これが爲めに

地震の起るのも亦當然である。吾が農家の最も心配し居る二百十日や、二百二十日の大厄日は、支那海上に於ける強熱の爲めに生じたる低氣壓に起因して居る。其他、印度洋に於けるモンスーンの如き、サイクロン旋風の如き、地中海に於けるシロツコ風の如き、何れもが、一方に起る低氣壓に外ならないのである。

電光は暗雲を貫き、雷鳴は轟然として天地を動搖し、雨は沛然として降り、時に暴風は人畜を吹き飛ばさんとする。若し夫れ百年前の吾々であらしめたらんには、驚愕其置く所を知らず、ヴルテアの様にオー神よ吾れを助け給へと絶叫したかも知れない。然れど、今日の文明人は大なる宇宙の活劇を見て、寧ろ其雄大の光景を樂しむ様になつて來た。吾人は避雷針によりて科學的に其安全なる遁路を知り得たのである。若し夫れ吾々をして臺灣の生蕃ならしめば、吾々は今も猶夫等の天變を神佛の忿怒と心得へ、其冥福を祈つたに違ひない。若し夫れ幸にして死を免がれたものは、天候の恢復と共に、其幸運を神佛に感謝したに違ひない。吾々は翌朝、知人や友人の不幸を、手紙や使者の知らせに依りて、漸く知り得たのであらう。然れど、今日の文明は、瞬間的に、變事を知るの設備を有して居る。即ち、吾々は雷神ベルクーナスを捕へて、これを電信や、電話や、無線に使役し居るのである。風神を捕へ來つて風車を起し、水神を捉へ來つて電力を製

造しつゝあるのである。昔時、吾々は螢の光を利用して燈火となし、炬火を携へて暗夜を照らし冬の寒き長夜には、木片を燃して、暖氣を取つたのである。其當時、吾々の衣食は、狩獵や、漁獵や、不完全な農業によつて、得られたのである。然るに今日の文明は、一躍、大變化を來し、萬事が便利に、氣持ち好くなつて來た。陸には電車があり、自動車があり、又汽車があるのである。水上にはモーターボートがあり、汽船があり、又潜水艇がある。空中には飛行機があり、飛行船があり、更に地中には、地下鐵道が走つて居る。彼の電氣王エヂソンは、此世界戦争によりて今日の文明は、二百五十年一躍したと唱道してゐる。即ち最近の數年間に社會の形勢は一變したのである。現代の傾向は、總ゆる方面にスピードの高唱せられある事である。時の經濟と云ひ勞力の經濟と云ひ、滋養分の經濟と云ひ、何れもが迅速、第一と云ふ様になつて來た。昔時、東海道を旅行するに一ヶ月を費やしたものが、今や十二時間内に、否な、自動車や、飛行機に乗れば、僅、數時間にして其目的地に達する事が出来る。人は假令、高金を費しても最大急行車に乗らんとする。今日の自動車は、世界の狀態を一變したとも曰ひ得る。其大なる便利は何時でも停車し得しめて、意の欲する行動の取れる事である。新鮮なる空氣を吸ひ、景色を眺めつゝ、娛樂的の旅行の出来る事である。其快速力の爲めに起る時の經濟は定に大なるものがある。その自動

車には汽車の如く、一定の時刻なきが爲めに、晝夜の何れを問はず、自由自在の旅行が出来る。日本の如き今日の道路では、早くも一時間に三、四十哩の旅行しか出来ないが、米國の如きになると、八十哩以上の疾行も亦敢て困難でない。それが爲めに米國の國道は益々改善せられ、共に佐つて起るの摩擦は、益々減少し行くので、旅行者の快感は兎に角、其機械の耐久力も亦大なるに到つた。それが爲めに、世界は時間的にも、空間時にも、狭くなつたとも云へる。これが爲めに吾々人間の壽命も亦延長せられたと云へる。如何なる寒村僻地の人間も、文明の恩澤に浴し、都市の人間と相接觸する事が出来る。これが爲めに、流石の汽車も今や大に其光輝を失し、その收入に於て大打撃を被るに至つた。馬車や人力車は今や誰れにも顧慮せられなくなつた。更に飛行機に到りては、今や汽車同様に旅客を乗せて、遠く飛行する様になつた。これが爲めに起るの犠牲は、寧ろ今日の汽車や汽船の夫れよりも少ないと曰はれて居る。或は飛行船の如き、モーターボートの如き、其他、迅速なる交通機關の如き、日に月に發明せられんとしてゐる。吾々は一千九百年の巴里萬國博覽會に吾が人力車を出品して、物笑ひになつた事を知つてゐる。蓋し、其當時は既に人間が人間を乗せて引張る様な時代でなかつたのだ。これではマイナスとプラスであつて、結極人間は、ゼロの働をなして居る事になる。米國では今や田舎より馬車が來たれば、如何

にも珍しきものが来た様に、子供等が、好奇心に驅られて、集まり来るのを見るのである。人間の習慣や因襲は不思議なもので、日本人は人力車を見ても、別に何んとも思はないのである。これ恰も臺灣の住民が轎籠を見て別に何んとも思はないと同様であらう。然るに吾々が長く海外に居つて、歸朝でもすれば、夫れが直ちに氣に付く。人が人を乗せて引張り擔ぎ行くことには人格問題で、車夫や轎夫を吾が同胞に行らしむべきものでない。故に滿洲や朝鮮や臺灣では土人を乗せる日本人の人力車夫は皆無である。近頃、自動車のお蔭で人力車の大に減じた事は寔に賀すべき事である。今日のモダンガールは大部、斷髮する様になつて來た。其主張の第一は裝髮に時を費さない事、第二は輕快の活動の出来る事、第三は頭髪を清潔に保ち随つて、衛生的なる事等である。米國の若き婦人も、今や大概は斷髮してゐることである。裝髮の爲めに毎日二、三時を浪費する様な日本婦人はそれを何んと批評するであらうか。これと同様に、男性も亦五分刈や坊主頭にならんとするの傾きがある。それは、殊に、露國の共產黨に、其多きを見るのである。婦人の衣服も短かく、輕便にして、勞働し易き、歩行し易きものとなつて來た。日本の婦人が長き振り袖の衣服を着し、地に垂る様な帯を締めても、別に何ら笑しいとは思はれない。僧侶の被れる衣や、其穿てる木履の如きも亦然りである。時の觀念のなき人間や、衣食の爲めの勞力を要

しない人間には、人力車に乗る事も、長袖の衣を被る事も、別に何んとも思はれないのであらう。所が少しく文明の空氣に觸れ、稍々世界の大勢を知るものゝ目より見れば、實に不經濟であり、不便であり、然かも非文明である事に氣が付く。吾々は、露國の共產黨の様に、衣服は其背を隠せば足れり、勞働し易きものであれば良いと云ふ丈では、野蠻人の夫れと相違ぶ所がないと思ふのであるから、夫れには賛成が出来ない。今日、婦人の海水衣でも、運動服でも、何れもが輕便や能率が第一になつて來た。今では男性の夫れと殆んど其趣きを等しくする様になつて來た。數年前迄は海水浴で婦人は靴下を穿いたものであるが、今ではその足の大分は裸である。婦人の穿てる靴の如きも、高き細長の踏は廢れ、衣服と同様に便利、第一を目標とする様になつて來た。今や寸法を注文して靴や衣服を造るの時代は過ぎ去つて、何れもがレディメイドの棚晒しである。日本婦人が何れも洋裝して、活動する様になれば、何れ丈、時と勞力との經濟に差異を生ずるであらうか。紐育人の歩行振りは仲々早く、到底、日本人の追従を許さない。これ蓋し其服裝が大なるハンディキャップを與へ居るのであらう。現代人の住家は何れもが小形なるものとなり、大なるものには誰れもが住はなくなつた。厨房も水道や、電氣や、瓦斯の裝置があれば足りるのであつて、左右前後は、足を勞せずとも、手を伸ばせば届く様になつて來た。多くはアバートメン

トを借り受けて、それに一家族が住する様になつて来た。女中や下男を使備する時代は過ぎ去つて、全部が主婦の一手によりて繰繰せらるゝ様になつて来た。これが爲めに、食料品は多く罐詰を利用する様になり、これなれば、何時でも食膳に供する事が出来る。日本の如き米食國にありて、朝夕温かき飯を食はんと欲するの家庭には、どれ丈ハンディキャップであるか知れない。世界の大都市では、今やオートマチックの自動食堂が出来て居り、己れの欲する食物は、錢さへ挿入すれば自動的に現はれ来る様になつてゐる。獨逸では今日、馬鈴薯を寸断して乾燥せるものを食料に供してゐるが、それは殊に軍隊に大に頒用せられてゐる。これから米と同様の澱粉質が得らるゝとせば、どれ位、經濟的で、而かも便利であるか知れない。

暖爐の如きも昔時は甚だ不完全のもので、其當時は裸火であり、其生ずるの煙は、多く血膜炎を誘發せしめたのである。然るに今日は石炭のストーヴあり、更に進んで蒸氣ストーヴとなり、瓦斯ストーヴとなり、更に電氣ストーヴに進み来た。

吾々の家庭にありて第一必要なるものは電話である。電話は今や女中や下男の代りになり、更にそのスピードの點に到りては到底、比較にはならない。その他タイプライターの如き印刷界のクノタイプや、印刷機の如き今や非常の速力を以て新聞や書物を印刷してゐる。其使用する紙も

今日、急速力にて木材から製造せられてゐる。蜂が木の皮を嚼りて集めたバルブを寄せ集めて紙を造る様な時代は、吾々の子供の時代にはあつた。手製の器用を自慢するの時代は過ぎ去つて今や總てが機械化して来たのである。

吾々の家庭には理髮用にバリカンがあり、又安全髮剃がある。衣服を製造する爲めには、縫合のミシンがある。水を擧げるにも勞力を要しないモーターエンジンがある。農家には牧草や燕麥を刈るにモアアや、リーバーがある。その他播種トラクターの如き、茲に枚擧に遑がない。日本で泥龜的の米作農業を止め、大機械を使用し得る小麥や、馬鈴薯を栽培する様になれば、どれ丈時と勞力との經濟に差異を生ずるのであらうか。これによりて小作問題は容易に解決せられそれより生ずる今日の困難より大部の農家が解放せらるゝであらう。而して稻田に利用して居る水をして、電氣に轉移したならば、日本は、どれ丈、富源を得るであらうか。漁業に於ても今や快速力のモーターボートを使用する様になつたので、鯨も、その他、大なる海獣も、今や其住所がなくなつて来た。漁獵の收得の多少を速に報告する爲めに、今や傳書鳩が利用せられてゐる。其他、スピードに重きを置かないものは、商業上にも、工業上にも、苟も社會の現象に現はれ来る事々物々に、見出すことが出来ないのである。冠婚葬祭の儀式や、否、演藝や遊戯に至る迄今や

早きを貴ぶ世の中になつて来た。人を訪問するにも、大概是、電話で其要領を得る様になり、名刺を要するの時代は今や過ぎ去らんとしてゐる。書物の内容は、手取り早に、圖畫によりて説明せられ、嘗て十數時間を要せし芝居も、今や活動寫眞によりて、その時間にて倍長の内容を見る事が出来る。

今日の文明人の食物はビタミンを含有するものになつて来た。現代の食物は何んといつても牛乳や、バターや、肝油や、卵子や、肉類や、其他、果實や、蔬菜等でなければならぬ。精白米の如き澱粉質は麥にも、馬鈴薯にも、其他、根菜類の大部にもある。而して其澱粉は専らカロリーを生ずる丈で、夫れも人間の體温を攝氏三十七度以上に昇せるの必要がないのである。これが爲めに、假令、一升飯を食つても、體温を高める以外に、米には何等の營養がないのである。體温を保つには麥を食ふか、馬鈴薯を食ふか、そんな澱粉は何處にでもある。それに加へてスピード第一であるのであるから、米食が他の輕便なるものに置換せられた時に、日本人はどれ丈、利益を得るであらうか。今日の文明は單に生存する丈ではなく、活動がその本位になつて来た。而して活動能力のパロメーターは營養分を攝取したか否かの問題によりて上下するのである。下層の人間は多量の食物を食へば、健康を保ち居る様に思ふて居るが、夫れは寧ろ眠氣を催し、人間

に有害なのである。労働者の内には一升飯を食するものがあるが、これは徒食のみならず、國家の爲めにも亦大損害である。牛肉の營養價値はトマトや、甘藍で、南瓜や、其他の野菜の十倍であり、バターや、鹽豚や、脂肪の價値は、牛肉の三倍以上なる事が知れて来た。これと同時に、蛋白質物にも色々の種類があるが爲めに、單調ではなく、色々と變化せる食物が必要になつて来た。而して今日、下層の人に營養不良者の多き所以のものはバターや、果實や蔬菜の缺乏せる事が知れて来た。食物によりて起る病氣は脚氣や、癩病やペラグラや、壞血病や、糖尿病や、佝僂病や、其他、眼病等であるが、これ等は何れもビタミンの缺乏に依る事が知れて来た。而して食物の調節の如何により、これ等の病氣の何れもを恢復せしめ得るのである。

今や文明國の住家は昔時、王者の住み居つた宮殿よりも、遙に、愉快であり、衛生的であり又便利になつたのである。窓は硝子張りであるが爲めに、その室内は昔時の様な、暗きものではない。従來、寒國にありては、暖氣を取らんが爲めに、小形の窓を開け置くのであるから、光線の透過を遮り、黴菌や、室内害虫の發生に好期を與へたのである。其隔壁の如きも、多くは粘土塗りであつて、彼等に其隱所を與へたには違ひない。然るに今日は總てがペンキ塗りとなり、廉價の防水材や、保溫劑やが幾等も發明せられ、爲めに假令、貧乏人でも容易に夫れを使用し得るの

である。又製紙業の如きも非常の發達をなし、これが爲め紙が總ゆる地位を占め、今や粘土を塗抹する様なものがなくなつて來た。其他、家内の裝飾品であり、且つ必要品でもある鏡は廉價で製造せられ、時計の如きも亦然かりであります。其他、樂器にはオルガンがあり、ピアノがあり其他、蓄音器や、ラヂオ等がある。石油臭きランプは今や電燈に變じ、薪木は電氣や瓦斯に置き換へられ、木製の寢床は今や鋼鐵製の彈力あるものになつて來た。窓は金網やレースを張りて、蚊や蠅の侵入を遮斷し、従つて其傳播するチブスや、虎疫や、其他、色々の傳染病を防止し得る様になつて來た。或は火付け用のマッチの如き、火災時に於ける消火器の如き、熱暑の時の扇風器の如き、其他、或は安全椅子の如き、ソファの如き、人類の家に便利を與へ、好感を附與するものが、無限に發明せらるゝ様になつた。此等は何れもが最近に於ける科學の賜物であつて、如何なる保守的の人間も、新奇を嫌忌する頑冥の者も、其恩恵に浴しつゝあるのである。然れど彼等の内には其新しき思想や、斬新なる學說に出逢ひ、これを研究もしないで、所謂、食はず嫌で寧ろこれを隠蔽し、而かもこれを防遏せんとするものが多いのである。殊に二千年來の宗教の教義や、丁髷時代の思想に固着するものが多く、夫れが爲めに、世人の物笑ひとなるもの洋の東西を問はず少くはない。二千年前の習慣や、因襲に今も猶、捉はれ居る事は、何等の進歩なきを

意味するものである。精神一到、何事かならざらんで、何にくそでは、今日、何事も成功し得ないのである。運動競技にしても亦大に科學的研究を必要とする様になつて來た。今日、吾々がオリンピック競技のレコードに近接し得ないのも亦科學的研究が缺乏して居るからである。余は嘗て世界の米食人種は聽て滅亡すると發表した時に、或醫者は其愚論なるを以て余輩を罵倒した事がある。夫れは馬鹿や、懶巧を以て御する様な、小問題でないのである。彼れは我が國は瑞穂の國であると云ふ。吾々は斯くも文明を唱へ來り、今や五大強國の一ではないかと云ふて居る。保守頑冥の黨は何れもが然りであるが、彼等は何故に百尺竿頭更に一步を進めて、世界最大強國の一となる爲めに、新知識を求め、其研究を進めないのであらうか。吾々に、世界の人間を驚愕せしむる様な大發見や、大發明が何處にあるか。其體格と云ひ、其風彩と云ひ、其血色と云ひ、如何に慾目を以て見ても、悲い乎、彼等に優るとは云へないのである。之れは東洋人の特色であり、運命であるとせば、夫れ迄であるが、吾人の體格や、風采や、血色は、米食人種の特色であつて、ピテカントロプスより起り來つた人間の、優秀なる夫れではないのである。吾が民族に近き洪牙利人種は、今や中歐にありて白哲人と誇り居る人間と、稍々同様の體格や體色になつて居る。其智力に於ても、其體力に於ても、其血色に於ても、毫も彼等に比して遜色がないのであ

る。何が故に米國にはエチソンや、フォードや、フランクリンが現はれ、英國にニュートンや、フラデーや、マックスヴルが現はれ、其他、歐洲にラボジエーや、ヘルモホルツや、ガレリオを出し得たかを研究するの必要が吾々にないであらうか。昔時ソクラテースや、アリストートルや、プラトーの如き偉人を群出した希臘が、今日何等見るべきの人間を出し得ないのは、抑も何故であらうか。昔時の文明を誇る支那や、印度は何故に、今や退化せる文明人の模型となり居るであらうか。瓜哇は人類の搖籃地と曰はれて居るにも係はらず、何故に、文明の歩武より今や置き去りになり居るであらうか。東洋が抑も文明の發源地ではないか。而かも其面影は今や何處にあるかである。吾が大和民族も亦嘗ては英雄を出し、豪傑を出したではないか。佛教の到來と共に肉食を禁じた民族は、何れもが、退化し居るのを見るのではないか。其米食を主とする民族が著しく退化せる文明人のタイプだと米國人は云うて居るではないか。此問題は吾々東洋民族の將來を憂慮し、世界に活躍せんと欲するものは、他山の石とし拱手傍觀すべきものではあるまい。文明は波動の如く上下し又進退して居る。世には千載の文明なく、エジプトや、バビロンや、印度や支那の文明は、今や何處にかある。米英の今や文明の第一線に立ち居る所以のものは、抑も、何故であらうか。彼の有名なる科學大系の著者トムソンは、氣候は文明の最大要素であると喝破し

た。熱帯の氣候が人類の蒙昧時代や、野蠻時代に一大天恵であつたことは蓋し否定が出来ないのである。殊にその當時にありては被るに暖衣なく、住むに大家はなかつたのだ。野には果實が致る處に生熟し、山を駈ける獸も、空を飛ぶ鳥も、海に遊ぶ魚も、何れもが、豊富にあつたに違ひない。その當時は群鳥は歌ひ、艷花はその美を競ひ、正に武陵桃源の樂園であつた様にも思へる。今日、吾々は熱帯に住する人間の怠惰者であり、而かも退化者である様に聞かされてゐるが、それは抑も何故であらうか。彼のナイルや、ユーフラチーや、チグラトの熱帯地は、抑も人類文明の搖籃地であつたではないか。今日、蘭領印度や海峽殖民地や、布哇や、濠洲や、その他、熱帯の諸所に住する人間の健康状態は無論のこと、その活動的、敏捷的の能力に於ても亦温帯地方の人間に比して何等の差異はないのである。吾々温和なる地帯に住するものは、因襲的に、假へ怠惰者があつても、浮浪性のものがあつても、別に何んとも思はないのである。又その氣候の變化より招致せらるゝ疾病や、それより起る死に對しても亦別に何等の脅怖を持つてゐない。人が熱帯を想像する時に、上には赫々たる太陽が照り、下には足を焼く様な砂土があつて、そこには椰子や、棕櫚の木が點々生長して居る所であると思ふかも知れない。然れど、その熱帯の重なる植物は、決して、椰子や棕櫚ではなく、廣き葉のある温帯の植物とは大差ないが、唯だその變化が

極まりなく、その數も亦多いのである。或は高きあり、低きあり、或は奇景があり、サブライムがあつて、その種類の多き點に到りては、到底、溫帯産のそれに比すべくもない。熱帯には永遠の夏があり、永遠の春があり、又永遠の冬もある。彼の臺灣の新高山は夏も猶寒く、彼のヒマラヤの最高峰エヴェレストは萬年雪を冠して居る。そこには永遠の濕地も亦永遠の乾地もある。半年は毎日、雨が降り、又他の半年は毫も雨が降らない所もある。更に又己れの欲する乾濕當を得たる會心の地帯もある。彼の南米のブラジルやアルゼンチンの熱帯地にありては、その道路の完成しあるが爲めに、自動車を利用すれば、直ちに溫帯にも寒帯にも行くことが出来る。その他、一定地に厭けるものは、數時間にして、己れの欲する地帯に行くことも出来る。ボンヤリと路を歩く様な人間には、今日、自動車によりてこの世界が如何に變化したか判らないのであらう。人類がこの地球上に現はれ來つてから、少くも數萬年の星霜を經過してゐる。吾々の祖先は自然の天恵に浴して、その進化の道程を辿り、知育的にも、體育的にも、非常の變化を受け、今も猶その文明の施行を續けつゝある。吾々の蒙昧の時代や、野蠻の時代には獸を殺し、魚を捕へ、果實や、根球を集めて、それを食つたこともある。而してその體軀には獸類の如き體毛を有せざるが故に、今日の野蠻人の様に、寒帯は無論、溫帯にも住することが出来なかつたのである。無論

人類の慾望は溫和なる、麗なる氣候に住むことであらう。併しながら、地球上には四季の循環して居るが爲めに、稍々一定せる氣候で、人類の住へる所は、どうしても熱帯の外にはない。而して人類が身に衣服を纏ふ様になつてから、爰に始めて彼等が溫帯や、寒帯に分布する様になつたと思はれる。如何に人類が適應性を有つてゐても、暖衣なしには未だ寒帯に住まへないのである。吾々の人工的に製造する熱や、巧妙なる暖房によりて生ずる熱は、何れも石炭や、石油や、その他の燃料より獲得せられてゐる。然れど人口の増加すると共に、石炭や、石油や、その他の燃料の減じ行くことは、火を暗るよりも明である。而して彼の水力の如きも、吾々の利用し得る限りは、今や既に利用し終つた様な觀がある。所が永遠に盡きない燃料は何んと曰つても自然が製造して呉れる樹木である。否、食物も亦太陽のエネルギーの製造して呉れるものに外ならない。畢竟するに、吾々の將來の安定は、生物の供給し呉れる産物にある。換言すれば、自然が太陽の熱や光線によりて、無限に製造して呉れる植物、引いては動物の製産物にある。而してそれを最も早く、而かも最も安く製造して呉れる所は則ち熱帯にある。堅きものや、軟きもの、何れを問はず、樹木は熱帯に於て非常の速力を以て生長する。將來の食糧や、建築材や、燃料は熱帯を中夾として、南北に移送せらるゝのであらう。將來、有爲の民族は、熱帯に移動し、氣候の好き相

當の高原にその地帯を占めるであらう。然らば食物を料理したり、製造する外には、何等の燃料を要しないのである。然らば家畜の爲めに冬季の食糧を貯蔵するの必要もないのである。即ち出づれば食糧あり、又それを料理するの燃料も亦到る處に得らるゝのである。否、その食糧も、燃料もの總ての生物的の原料は、何時でも製造せられ、製作せられ、而してそれが太陽の壽命と共に、永遠に盡きないのである。薔薇や素馨は庭園に咲き亂れ、百合や黄楊やその他、香氣馥郁たる植物の花は、無限に咲き笑ふのであらう。或はランタナやジャスマインやアラマンダやカンナギウムの様な有名な熱帯の美花は、吾々の徒然を慰めるであらう。鳥は歌ひ、蝶は舞ふ自然の美は眼や耳を通じて、吾々の情緒を唆るのであらう。元來、熱帯の生活は、稍々野外生活と同様で、家の窓や廊下の戸は開放しに居るのである。バンガロー式の熱帯家屋が、若し道路に近接し居れば、砂土や塵芥の飛び來ることはあるが、更にそれを涼風の吹き來る山の脊にでも建設すれば、それこそ、申分がない。熱帯にありては、紫外線の強きが爲めに、その住民の健康を保持し、その勢力を蓄積することになる。今日、吾々が野蠻人の家の様なものを建設すれば、それは無論、不衛生であるだらう。所が、それでも、野蠻人はその紫外線の爲めに餘り病氣に罹らないのである。況んや吾々が現代科學の教へ呉れる建築術によりて、健康的の家屋を造り得たらんに

は、それこそ鬼に金棒の健康が得らるゝのである。然らば、冬季、窓を閉して冬籠りするの必要なく、又重苦しい衣服を被るの必要もない。ビタミンCに富む新しき果物は、庭に出れば何時でも食ふことが出来る。それも亦一種類や二種類のものではない。或は果實の王と稱せらるゝマンゴーがあり、或はマンゴスチンもある。熱帯に産する牛でも、鶏でも、何れもが、紫外線に富む強き光線に接觸し居るのであるから、その産する牛乳にも、その卵にも亦一層の營養價値があるのである。寒帯地方や、冬季に生産せらるゝの牛乳や、鶏卵には、ビタミンDが少ないのである。屋外に出てて常に運動する女性の母乳と、屋内に常に引き籠り居る女性の母乳とを比較すれば、前者には遙にビタミンD的の營養分が多いのである。人類の現代と將來の進化は、この熱帯の生活によりて、甚だしく影響を受けることは、無論である。更に、その視覚や聽覺を通して來る、美的の享樂になると、人類の進化に大關係がある。即ち、寒き冬の爲めに準備する様な消極的の勢力や、蓄積を轉稼して、これを人類の幸福を招來する文明の爲めに、利用したらんにはどれ丈、そこに徑庭があるであらうか。人類の理想は、自己満足にあつて、その理想を實現せんと欲せば、宜しく熱帯に住することが、その捷路でもある。而して將來の文明は熱帯に殖民地を有するか否かによりて定まるであらう。一國の富力は熱帯に活動する農民を有する

や否やによりて定まるであらう。今や吾が民族の多くが南米に移住し、そこに大農を經營せんとするに到つた。そのことは、お互に慶賀に堪へないのである。夫れ文明の趨勢を知り、その第一線に立つものこそ、誰れよりも早く旨き汁を吸ひ、旨き物を食ふことになる。今日の文明は民族と民族との競争であつて、新しき知識を得たるものが何れの方面にも成功することになる。何れの場合に於ても、知識が第一の武器であつて、知育は稍々萬能的のものである。彼のエヂソンの如き發明家の能力は、蓋し、無限に進み行くであらう。その發明や發見はニュートンの如き弱身者にも可能なるが故に、吾人はこの知育に重きを置かざるを得ないのである。體育は何んと言つても知育に劣るものであるが、それでも決して等閑に附してはならない。殊に、現代人は、神經衰弱に罹り易き社會に生存し居るのであるから、吾人はその豫防に對して大に策戦法を講ぜざるを得ないのである。世に幾等、文明の利器や機械が發明せられても、これを運轉するに人間の體力を要するのである。殊に將來の人類の競争場裡が、熱帯であるとすれば、猶更、その然るを覺ゆるのである。而して德育の如きは、社會の制裁の益々旺盛になるが爲めに、自發的、各人の修得するの機會が現はれ来るに違ひない。而して人間が社會に成功せんと欲するならば、その德育も亦缺くべからざるものである。人間でもその前途を達觀するものが成功するのであるから、社

會の前途や文明の趨勢を洞察するの民族が、世界に雄飛することになる。而して文明は時さへ與ふれば、無限に進歩するのである。即ち社會はベルグソンの所謂、進歩して、その止まる所を知らないのである。生物はローマネースの所謂、年限に進化して、その止まる所を知らないのである。文明はかくして人間の幸福と満足とを目的として前進するのである。將來の交通機關は便利とスピードとを目的として進むであらう。農産物や畜産物は積極的にはその多産性に品質とを目標として進むであらう。消極的には病害蟲を驅除豫防して、その足らざる所を補ふであらう。又、工業と云ひ、商業と云ひ、能率と圓滑とを同指して進むであらう。その他、人間の健康や生命の保證の爲めに、科學は年限に進歩して、その壽命を短縮する様に禍源を削除するであらう。然れど、一方より觀察すれば、人間は益々増加し、土地は狹隘を告げ、食物は缺乏を來し、就職難は深刻となり、人類の生活を威嚇するであらう。

又思想は益々惡化して、各人の生存權が大に主張せられ、隨つて、社會の富は今日の如く一方に偏在しなくなるであらう。要するに、人間の奮闘の對象は體的にも心的にも、自己満足にある。その理想を對象として吾人は出發しなければならぬ。物質的の満足は必ずしも精神的の満足と一致してゐない。然れど、文明の恩澤に浴せる吾々は、その兩者を兼ね得る爲めに、大に努力す

べきである。將來の文明は益々地球と人間とを對象として研究の歩武を進めるであらう。即ち目に見え、耳に聽え、而して手に觸れて感ずるもの、換言すれば、實驗やデモンストレーションの出来るものを以てその研究の對象とするであらう。二ヶ年前の主觀的空想や、形而學上の演繹法を弊履の如く捨つるであらう。既成宗教の影は益々薄らぎ、科學の進歩と共に、その存在の意義を失ふであらう。如何なる形式に於ける迷信も亦益々その跡を斷つであらう。神の觀念も、佛に對する思想も、否な、總ての主觀的の心的現象は何れもが客觀的の夫れに變じて行くであらう。而して今日迄、吾人人類の禍源をなして居つた恐怖や、争鬭や、復讐や、模倣や、怠惰やの本能は知識によりて征服せらるゝであらう。即ち惡は善化せられ、殘忍や、憎惡や、粗暴や、無慈悲や、冷酷や、不義や、不公平や、狹量や、嫉妬や、詐欺や、掠奪や、その他總ゆる犯罪的の行爲は漸次、征服せらるゝであらう。而して親切や、慈悲や、同情や、寛大や、宥恕や、憫憐や、博愛や、禮儀や、豁達や、謙遜や、忍耐や、勘忍や、正義や、公平や、其他、總ゆる公共的の徳性が進歩し來るであらう。その根本の爲めに、吾人は、大に奮闘せざるを得ないのである。吾人は文明の階段を登る毎に、而して先進國の優秀なる人間に、稍々その理想に近きものゝあるを見る時に、人間の前途も亦有望なるを思はざるを得ないのである。若し夫れ基督教の所謂、今日の

人間を退化したものとすれば、それこそ、人間の前途は悲觀的のものである。彼の有名なる心理學者ウリアム、ジエムスは「不思議なる宇宙の暗黒に取り圍まれ、彼等は生れ、死し、苦難を嘗め、争鬭を行つた。恐ろしき犯罪と苦難とに身を委かせ、最も不幸の無能に浸り、恐ろしい怪しい幻惑に弱めらるゝも、生存は如何なる形式に於ての死よりも良いと言ふ最高の信念に支配せられて、絶えず切迫し來る破滅の大顎を巧に逃れて生命の炬火を燃し來つた。その炬火は今や吾人の爲めに世界を照してゐる。吾人はこれが爲めに大に感謝すべきである」と言うてゐる。實に吾の祖先はジエムスの言つた様に、迷信に惱まされ、非常の困難と戦つて今日の文明を唱へ來つたのである。その過去の歴史を見て、吾人は益々その將來に進歩の光明を認むるものである。

宗教家には現代の社會を昔日のそれよりも更に退化したものとするものがある。併しながら進化は抑も宇宙の原則であつて、吾人の今日、見るものは一としてその進化の過程を辿らないものがない。時に世には退化の現象はあるが、それも亦尺憎の屈するが如く、その行動は鷹て伸びんが爲めの豫備行動である。蓋し退化も亦進化の一現象であるからである。故に生物でも、人間の社會でも、何れもが依然として進化しつゝあるのである。而して人間が有力なる一發見によりて文明の一階段を登れば、その開展は一層、廣まり、而してその階段を踏臺としては更に新しき階

段へと進み行くのである。故に文明の將來は正に春の如しである。吾々は爰に於て乎、現代の文明に生れ來つた生の歡喜を禮讚するものである。又子孫の爲めには、將來への文明を益々昇華せしむべき使命を痛感するものである。而して迷信を打破し、死の大顎を脱し來つた祖先の努力に對して大に感謝するものである。尙、將來の子孫に對しては、科學の示す羅針盤に依りて、人生の航路を過らざらんことを慫慂するものである。

三、教育の意義

彼の有名なるウエリントンが奈翁を破つて歸つた時、時の下院議員プロハム卿は、ウエリントンを擣して曰く、軍人の時代は、既に、過ぎ去つた、今や、他の有力なる人物が新舞臺に立つて居る、これは、即ち、小學校の校長であると。これは、既に、百年前の英國人の叫びであつた。英國の文明は、何んと云つても、教育に重きを置いて居るから、その基礎が如何にも、鞏固であり、その思想は、如何にも、堅實である。今回の世界大戰に會して、彼等は、非常なる打撃を受けたが、然れど、其の根底は、何等、動搖してゐない。英國人は、常に、ゼントルマンを以て終始してゐる。今回、英國に頻發せるストライキに對し、彼等は、非常なる恥辱を感じ、羞恥たる色が見える。余は數年前、倫敦滞在中、一英人に逢つた時、彼は、己れの國に、ストライキの如きものがあるとは、夢にも、思はなかつた、然るに、今、之れを眼前に見る様になつては、己れの國が最早、いやになつたと云うて居つた。これは、廣く、教育の普及せる英國民の叫びで、他國人の眞似の出來ない所である、倫敦には、乞食が居らないし、泥棒や拘摸は稀である。此の戰爭によりて、文明が、二百五十八年一躍したと云つても、國民に、左程の、不調和が見られない。夫れ丈け、余の今回の旅行中も、亦、氣持ちが良かった。若し、旅館で、金でもなくなれば、必ず、探偵が來て、充分に、調査して呉れる。而して若し、どうしても、解らない場合には

これ文調べても知れないのだから、お前も諦めるが良いと云つて、慰さめて呉れる。著者は、その國民の、實に、親切なるに一驚を喫した。所が、米國では、色々と教育なき世界の浮浪性の人間が集まり居る丈け、財産は、兎に角、時に生命の安危に關する困難に遭遇することが稀でない。余の一友人が、停車場で、切符を買はんが爲め、手提鞆をその一側に置き、事務員と交渉中、その鞆を何者かに拘られた。そこで、彼れは直ちにその最寄の警察署に訴へた所、お前が餘りルーズであるから取られたのだ、以後は、大いに注意するがよいと云ふ注意を食つた相だ。ボストンの伊太利人街や紐育の支那人街で、夜間にまご／＼して居れば、どんな酷い目に逢ふか知れない。紐育の如きは、今日、非常に悪化して、單獨旅行は、先づ、危険であるとさへ曰れて居る。紐育は、世界最大の都會丈け、夫れ丈け、所々より悪者が潜り込んでゐる。此處では、あらゆる恐ろしき、犯罪が行はれて居る。又國が廣い丈、夫れ丈、悪事が露見しないのである。此内には、支那人も居れば、伊太利人も居る。又、そこには我が同胞も少なくないのである。それが、教育あるものなれば、まだしもであるが、無教育なるものが多き爲め、更に、一層の險惡性を帯びて來る。米國の官權が、今日、移住民を八釜敷云ふ様になつたのも、これ等の事實が、大に、原因となつて居る。米國が、昔時、世界の各國より、漫然移住者を招致した事は、今では、非常なる禍

をなして居る。故に、今後、彼等は、大いに、注意を拂ふに違ひない。高等教育を受けたものにあらざれば今日、移住を許可しない理由は此處にある。一度、惡性劣等の人種が根底を張ると、雜草と同様に、仲々剿絶する事が困難である。骨相學や人相學の未だ充分に、發達せざる今日、之れによりて彼等の善惡を識別する事は、先づ、困難である。故にこの際、最も緊要なる政策は義務教育及び其延長にある。その普通教育を配しつゝある間に、惡性や低能や其他、精神的に缺陷のある兒童が判然して來る。將來、社會に害毒を流す様な低能兒や、常習犯者は、社會より隔離せざるを得ないのである。其教育によりて訓化し得るの望みあるものは、其意志の力を養成し其環境を改善する事によりて、幾分か、其目的を達する事が出来る。何れの國に於ても、二割位の低能兒や遺傳的惡性の兒童はる。之れは、どうしても、特別の取扱ひを要するのである。人の性は、善であるが、惡であるかは、今も猶、霧々せられて居る問題である。然れど、生物學上の性は、善であるが、惡であるかは、今も猶、霧々せられて居る問題である。然れど、生物學上より論ずれば、性は畢竟するに惡である。性の惡である積りで教育を配して行けば、先づ失望することはない。亂世の英雄も治世の奸雄となるのである。人類は、衣服を被り、食物を攝り、生殖して行く以上は、己れが先きである。困難なる際に、他人を扶助するが如きは共倒れだ。故に衣食足つて後、茲に、博愛や相互扶助の問題が現はれて來る。他人に迷惑を掛けても何んとも思

はないのが人間の常性である。而して、幾等、教育を配してもこの性質は、依然として變化することはない。唯だ、教育によりて、其幾分か抑壓せらるゝに過ぎない。夫れ文明は、自然を征服することによつて、益々濃厚となつて来る。人間も、その本能性を征服することによつて、向上發展する。教育に依りて悪性を矯め、意志を養成する事は、即ち、其個人の本能性を征服することに於て、德育も亦、大いに獎勵せざるを得ない。盲者蛇に怖れずで、無教育や迷信程、恐ろしいものはない。臺灣の生蕃は、迷信の爲めに、首狩りをする。彼等は、鳥の鳴き聲を聞いても亦、大亂を喚起する事がある。無教育の爲め、天災やその他傳染病に罹りて死するものが多い。露國の擾亂は無教育なる國民の多かつたからだと曰はれてゐる。支那の亡びんとするものも、亦、無教育者の多き爲めであらう。羅馬の亡びたのは、人なきにあらずして、優秀なる人間の缺乏であつたと云はれてゐる。著者は今回、旅行中に、車中で、理化學研究會の或る理事者に逢つた。其人の資問は恠うである。日本の今日の教育は机上の空論が多い。實施應用の方法を研究するものが、極めて少い。それが爲め、余輩は果してその應用を先きにするべきかそれとも、その學術の蘊奥を極むるに重きを置くべきかに迷つて居ると。本邦に於ける最高の有力者に斯くの如き考への行はれ居ることは寔に、遺憾である。深

遠なる學術の研究に従事することは、目下、我が國の最大急務である。總ての大発見や大發明は學術の蘊奥を研究しつゝある間に、偶然に、現はれ来るもので、初めより應用に重きを置けるもので、未だ、嘗て、有名なる発見や發明のあつた試しはない。深遠の學術に觸れざる知識の所有者には、何等、斬新の發明の出来る筈がない。無教育なる發明者のパテントは、今や、萬を以て數へ得るが、何等、社會を利することが出来ない。彼のワットは、藥罐の蒸氣を見て、今日の汽車を發明し、ニュートンは林檎の落つるを見て、引力の存在を發見した。メチニコフは白血球の細菌を食するの研究によりて、血清法を案出した。ゼネーが痘痘のワクチンを發見して以來、狂犬病や癩や其他、種々の疾病に對してワクチンが重用せらるゝ様になつた。名は逸したが、モスクワ大學の教授に、有名なるバビロン學者があつた。所が、當時、斯の如き無用の學者を高給を以て大學が養ひ居る事は、不都合であると言つて、依然その研究に従事せしめ、大に、庇護して居る世界的學者で、而も露國の誇りであると言つて、依然その研究に従事せしめ、大に、庇護して居つた。然るに、何ぞ知らん、嘗て、ヴスビウス噴火の爲めに、埋没したるポンペイが發見せらるるや、此學者によりて、種々の発見が逐行せられ、色々の祕事が闡明せられ、歴史的に、大なる光明を與へたのである。彼の英國のロスチャイルドは、世界の富豪として、誰れにも好く知られ

て居るが、此人の専門は蚤の研究である。彼のベスト病菌を媒介するものは鼠にあらずしてそれに寄生する蚤である。而して、其事實の知れた時には、如何なる蚤が鼠や人間に寄生するか、大部、知れて居つた。これが爲め、醫學界は、非常なる恩恵に浴したのである。彼の伊太利のグラツシーがマラリア熱病のアノフェレス蚊の媒介によつて傳播せらるゝことを發見した時には、既に、重なるアノフェレス蚊の種類はマイゲンやヴ・エドマン等によりて研究せられてゐた。余も、其當時、アノフェレス・シネンシスなる蚊の日本に在住するを知り、之れが、定めて、マラリア病を傳播するものならんと發表して置いた。今日では、それが、果して事實となつて現はれ來つたのである。

吾々、日本人は、多く、理科學に知識なきが爲め、今日では、泥坊を捕へて繩を縛ふ様な事をして居る。一昨々年、樺太で松姑蝨まつこじの爲めに、約九千萬石の材木が食盡せられた。それは正に大なる失態で、國家の爲め、大いに、寒心せざるを得ない。専門の知識なきものが假令、幾人集まりても、何等の智慧は出て來ない。其當時、一人の専門家の居らざりしは、寔に、遺憾であつた。一貫目の驅除は一夕の豫防にしかないのであるが、惜い事をした。今や、米國より三人の昆蟲學者が日本に來て、頻に、有益蟲の研究をなし、有益なるものは、どしどし、本國に送つて居る。

十數年前には、米國よりコキレットやマラットが來り、吾々の枕を高くして眠り居る間に、色々有益蟲を奪つて米國に持ち歸つた。彼の正宗の名刀に如何なるものが含有して居るかを研究したものは、獨逸學者である。之れが研究によりて、モルビデン元素が發見せられたのである。吾々は何にも知らない内に、正宗の刀を作つて居つた地方の尾張よりモルビデンを含有する粘土を携へ歸り、正宗の銳力と同様なる堅牢の鋼鐵を製作し、之れを軍艦や大砲等に利用したと云ふことを聞いた。レントゲンのX線やラヂウム線や紫外線や無線電信や電話や、その他、電流によりて百里外の人間の寫眞を撮影したり、或は遠距離の音楽や歌劇が聞けるラヂオや其の他、或は蓄音機と云ひ、自動車と云ひ、飛行機と云ひ、或は潜航艇と云ひ、何れもが科學の應用である。日本は今や、世界の一等國を以て誇つて居るが、世界共通の文明の爲めに、吾々は如何なる發見をなしたであらうか。これ、蓋し、深遠なる高等教育の缺乏せるが爲めではあるまいか。日本人は、必ずしも、腦力に於て歐米の學者に劣るものでない。唯だ、その研究の機關を缺き、その設備の不完全なるが爲め、充分なる研究が出来ないからである。米國にありて、完全なる設置の下に、研究し居る吾が同胞の如きは、歐米人に勝つた活動振りを見せて居る。腦力なきものゝ教育は、餘り意味を有つて居らないが、それでも、教育を施さざるものよりは、遙に、勝つて居る。文明の

歩武を等しくし得ずして、亡び行くのも、亦、止むを得ないのである。彼の米國のインジアンは滅亡するのも、吾がアイヌの年々歳々減少して行くのも、適者生存の原則の嚴存する爲めで、爰に如何ともする事が出来ない。之れを人道の問題より彼れ是れ云うて見た所で、腦力が劣等であれば、何等、教育の道がない。幸に、吾が民族は、腦力に於て決して歐米人の夫れに劣つて居らない。その事は、色々の點に於て今日、能く證明せられてゐる。今の歐米の人士は、今回の大戦争によりて、非常に困憊して居る。吾人は今日、その奮闘の如何によつて世界に勇飛する事が出来る。又、學術的に覇を唱へる事も出来るに違ひない。名を逸したが、米國ジョンスホップキン大學の一教授は恚う云ふ事を述べてゐる。今や石炭や石油や鐵や其他の鑛物は近き將來に完掘し終る時が来るに違ひない、然れど、農産物は、永遠に盡きることがない。故に吾々は、大に、農業教育を施さざるを得ないと。蓋し、植物は、太陽の光線によりて同化作用を起し、澱粉や砂糖や蛋白質や其他、吾人人類に必要な資材を供給して呉れる。人類が活動力を失はない以上は、先づ、食物の缺乏することはあるまい。人間の數が増加して、食物の生産額が不足を告ぐる場合に、科學的研究によりて多産性の植物や動物を人工的に産出することが出来る。家鶏の卵も、日本では、既に、年々三百内外を産出せしむる事が出来る。乳牛も、品種改良の如何によりては、

今よりも、遙に、多量の牛乳を得るの時期があるに違ひない。其他、米にしても、麥にしても、現時の收穫の倍額に達せしむることは必ずしも困難であるまい。これが科學の力であり、學術の應用である。即ち、教育の力によりて、これ等の知識を普及せしむることが出来る。而して、人類は、まだく、衣食住の恐怖に襲はるゝ様な時期に達して居らない。殊に、日本の如き、教育の普及してない地方にありては將來、農産物の收穫を益々、増大ならしむる望みは幾等もある。況んや、朝鮮や支那や南洋には、更に一層、その可能性あるを見るのである。

又、消極的には、農産物や畜産物の病蟲害を驅除し、從來、蒙り來つた二割餘の損失を除くことが出来る。或は、氣象學や物理學の力によりて、幾分か、氣候を左右することが出来るかも知れない。既に、歐米では、目下、飛行機を利用して、電流を雲層に通じて、雨を降らすことをして居る。又化學の力に依りて空氣中の窒素を分離、獲得して居る。或は、優生學的に、耐菌性の植物や抗害砒木を利用する様になつて來た。農作物の成長を阻害する地中のバクテリアが、硫黄華の合劑によりて、消滅せらるゝ様になつた。人糞を利用することによりて、蔬菜に蛆の寄生する事も知れて來た。之れが爲めに麥の鏽病が一層、増殖する事も知れて來た。石炭や、石油は地上より消滅しても、まだ、水力を利用することが出来る。太陽熱の利用は、今や、大に研究せら

れて居る。尙、その他、地熱の利用も大いに、有望視せられて居る。物極まれば通ずで、獨逸は今回、窮して色々の大発見をなして居る。人類は窮するにあらざれば、中々、眞劍にはならない。然れど、科學的知識の伴はない眞劍は、石に噛み付くと同様で、何等の意義はない。今や、人類の幸福の爲めに、あらゆる方面に科學的研究の鋭鋒が向けられて居る。今日の學問は、分業的となり、非常に、多岐に分れて來た。十年前の知識では、今日、到底、理解の出来ないものが無數にある。夫れ丈、教育期間の延長が必要となつて來た。古人は、三日、書を讀まざれば、言語に味なしと云ふて居るが、今や、三日、新聞を讀まざれば、正に時勢に遅るゝの氣持ちがする。戰鬥によりての爭奪は、今や、終止せんとし、而して、天下は智力の競争とならんとして居る。此智力の進歩し來つた世の中で、教育なきものは、先づ、生存競争場裡に立つ事が出来ない。況んや、劣等人種の運命は、今や、風前の燈火同様であるに於てをやである。獨逸に於て、今や軍籍を脱した數千の將校は、大部、大學に收容せられて、高等教育を受けた筈である。これが爲め、その當時吾が同胞の學生に對しては、一空席もないと云ふ有様であつた。これ等、獨逸の學生が、一度に大學を出でて、社會に現はれ來た場合には、世に如何なる波瀾を生ずるであらうか。兎に角、今より刮目、注意すべしであると著者一論文を草したことがある。數年前、獨逸ミュンヘン

大學のシュミット教授が、主宰となり、今回の大戰爭中に於ける「獨逸の科學」なる大著書を發表した。これには有名なる各専門家が執筆してゐる。之れによりて、如何に獨逸が、此戰爭に優秀の地位を占めて居つたか、知れる。殊に食物の生産には、多大の努力を盡して、眞劍になつた跡がある。何んと曰つても獨逸の強味はこの教育にある。假令、獨逸の國家は亡びても、其文化は決して消滅するものでない。科學の應用なる農學に於ても、醫學に於ても亦、工學に於ても、到底、他の國民の及ばざるものがある。英國は、今や、獨逸に習ひ一層、教育に重きを置く様になつた。蓋し、獨逸に於ける科學應用の產物たる潜航艇や飛行機や飛行船によりて、英國は非常に苦しめられたからである。數年前、獨逸から彼の有名なる物理學者アインシュタインを招聘して、英國王國學士會で、講演會を催したのである。牛津大學は氏に向つて名譽博士の稱號を捧呈して居る。英國は、嘗て、敵國として覇を争うたが、今では、虚心坦懐、大國民性を表して世界的の學者として彼れアインシュタインに敬意を表彰して居る。英國にニュートンやダーヴキンやハツクスレーやスペンサーの如き大學者を輩出せしも亦、故なきにあらずである。嘗て、英國の太陽は決して、没しないと曰はれて居つた。然るに、千九百年の巴里大博覽會の際は、南阿ブルの戰爭に困憊し、大英國の出品物は、定に、見るべきものがなかつた。それが爲めに、識者は英

國の太陽も、今や、没しかつたと曰つたことがある。今、又今回の世界戦争に疲勞して、更に太陽が没しかつたと云ふものかも知れないが、余輩を以て之れを言はしむれば、決してさうではない。學者を尊重し、而かも、敵國の學者を招聘して迄も教へを乞ふ英國の國民性を知るに及んで、著者は英國の壽命の、人類の生存する限り、洋々として永遠に存在するものであるを思ふ。人類の教育の目的は専らその自衛にある。之れによりて種々の危険より脱する事が出来るのである。人間學は智育のみに重きを置けとは曰はない。智育も、德育も、體育も亦、同歩調にて進めと云ふのである。體育に就ては今、爰には省略するが、德育に就て少しく述べて見る。

世には、宗教なくして德育が出来ないと云ふものがあるが、著者はこれと全く反對の意見を有つて居る。人類はどれ程、迷信によりて貴重なる時と、精力と、生命とを浪費したか知れない。數千年來、依然として狐狸や偶像に詣で、其冥福を祈るものを未だこの聖代に見ることが出来る。犬は狼の時代に野にありて落葉を敷き横臥したと見え、今でも、横臥する前に、敷物なくとも一、二回は廻旋して横臥する。之れは祖先の獲得した習性であつて、今も猶ほ、其因襲が残り居るのだとガルトンは曰うて居る。因襲や痼疾は仲々容易に除却する事が出来ない。春時、草間に普通なる走蜘蛛は己れの卵子を絹絲様の袋に容れて孵化する迄、大事に抱いて居る。朝、太陽が出づ

れば、高く後脚にて翳し、温かき光線に當てゝ居る。敵動物が彼れに近接すれば直ちに之れを腹に抱へて逃遁する。所が、此蜘蛛を急激に驚かすと、其袋に入れある卵子を放棄する事がある。若し此際、其卵子を奪ひ其代りに白紙の小片を投げやれば彼れは、直ちに、之れを携へて逃げる。その卵子なれば間もなく孵化して子供となるがその紙片であるが爲めにこれは永遠に孵化する事が無い。不幸にも蜘蛛は一生、此の重荷を抱き、終に、死んで仕舞ふのである。斯くの如きネゲチープの努力は、人類に、幾等もある。若し、人類が、斯くの如き徒勞の努力を節約し、之れを教育や知識の開發に轉用したならば、世界の文明は更に數世紀も先きに進み居つたかも知れない。迷信を打破するものは此教育である。地獄極樂の假説は二千年前の釋迦や基督の時代に起つて居つた迷信であつたが、其迷信は今日、一部の階級に残り居るのを見ても、如何に、其因襲や惰性の強烈なるか、知れる。吾が憲法は、幸にも、宗教の自由を許してゐる。人が迷路や、袋路に入りたる場合に、親切に其過りを示す事が出来る。若し過れる電車に乗り居れば、適當の電車に乗り換へさす事も出来る。されど、宗教は信仰であるから、其迷信であるや否やは己れの知識の判斷によりて取捨する外はない。故に色眼鏡を掛けない様に、知識を羅針盤となし、非常なる注意を拂はなければならぬ。山登りの行路には必ず本道の外、近道もあれば又迂回路もある。然れど

も、迷路や袋路に入りては到底、山頂に達することは出来ない。吾々は、教育の力によりて、迷路に踏込まない様に注意せねばならぬ。吾々は、徒勞の行動によりて、貴重なる精力を浪費してはならない。支那人の間には商業道徳が大に發達してゐる。彼等は一度、約束すればそれを破棄することが容易にない。蓋し、その信用は、其財産であり、又、自衛でもあるからだ。不渡手形を拂ひ出す人間のその社會より放逐せらるゝと同様に、約束の不履行は、其人の致命傷である。今回、世界のバニツクで、米國の商人は、多く、其負債を踏み倒さんとした。或は、足元を見て、色々の難題を持ち掛けたのである。時には、短銃を擬して、此際、借金は到底拂へぬ、若し強ひてその借金を拂へと云へば、己れはお前を殺して、後に、自殺する外はないと云ふ様な、脅し文句を並べたものもあつた。爰に到ると、ゼントルマンを以て始終し、常にそれを誇り居る英國商人は、必ず其債務を履行するのである。英國人に踏み倒されたことはないと或る物産會社の一英國駐在員が云うて居つた。西歐の諺に知識は愛を生ずると云ふ事があるが、人間はお互に相知り、相理解する事が、社會を組織する上に、大なる利益がある。之れが、社會道徳の、起源となるのである。前科者は、無垢なる家庭に出入する事が出来ない。其交際する人間や、家庭によりて其人物の如何が知れる。人間は社會より放擲せらるゝ程、苦しい事はない。之れが社會の制裁であ

り、拍車である。之れによりて社會の道徳の保全せらるゝことは、獨逸倫理學の主張である。唯だ、先天的の低能兒や先天的、常習犯の人間は、社會より隔離せらるべきは、既に、前述の通りである。之れが爲めに、吾人は、教育を受け廣く知識を求められざるを得ない。之れによりて、無智の犯罪や破廉恥や其他、百般の悖徳性より逃れねばならぬ。今や、社會の一面は、餘程、悪化して來た。之れを救助し得るの方法は、教育の他に道がないのである。今や、義務教育の期間が延長せられんとして居る。吾人は、雙手を擧げて、それを歓迎せざるを得ない。吾々、日本人は、東洋の英國を以て任じて居る一民族である。然れど、其文化やその能力に於ては、多大の逕庭のあることを忘れてはならない。更に、一倍の大奮闘、大努力をなすにあらざれば、其スタートに漕ぎ付き得ないのである。

四、娛樂の考察

何物にせよ、圓滿なる發達は人間の理想である。人間の圓滿なる發達の遂行には、種々の方面より、色々の材料と、糧とを集むるの必要がある。

總て天才と云ふものは偏狹の傾きがある。人間の力には限りがあるから、一方に優れると、他方の何にか缺陷を生ずるのは自明の理である。

こゝに於て乎、精力の經濟や頭の經濟や時の經濟と云ふ様な利用法が必要になつて来る。圓滿の發達を遂げることゝ、また、一方に精力を集中して、一部の局面を發達せしめることゝ、何れが、果して、社會に有益であるかと云ふことは、一の問題である。

天才にはいろいろの缺陷があるから、彼等の多くは社會より充分の待遇を受けてゐない。併しながら、天才のあるが爲めに、社會が啓發せられ、部分的ではあるが、遙かに進んだ知識を人間の社會に附與し得るのである。これが、抑も、社會に天才の必要ある所以である。

故に、社會は、この天才を保護して、その特異の才能を發揮せしめる様に助力しなければならぬ。

一方、天才はこの意味に於て片輪とも云ひ得るのである。反面から考へると、缺陷だらけの間であつてこそ始めて天才たり得るのである。故に天才は人として果して幸福であるや否やは問

題であつて、天才は一步踏み越へれば則ち、狂人と云ふことになる。天才は餘程、稀であつて、若し夫れが多くなればなる程、社會の負擔となるのである。

人が若し右の手を發達せしめんと欲せば、宜しくその左手を拘束すればよい。人が若し右の足を發達せしめんと欲すれば宜しくその左足を縛すればその目的が達し得られるのである。それと同様に、眼を發達せしめんと欲せば耳なり、鼻なりの機關を破壊すればよい。

臺灣の生蕃はその眼が非常に發達してゐるが、其頭は餘り働かない。文明人の、頭は能く發達してゐるが、その齒や、耳や、其他、體的の機能は遙、野蠻人に劣つてゐる。印度に於て一箇月も人を地中に埋めて總ての運動機關を制止せしめ置くと、その人の頭が異常に發達して、哲學的の名論を吐く様になると云はれてゐる。而して印度哲學は斯くして生れ來たものだと言く人もある。これには稍々、首肯すべき所もある。

クリストの苦行も、或は釋迦の難業も、何れもがその肉體慾を解脱して始めて靈的の活動が出來たのであらうと思はれる。故に精神的に活動せんと欲するものに取つては、肉體的の健康は排斥すべく、飽く迄、肉體を磨ける爲めに、斷食や苦行の必要があると云ふ人もゐる。淺草の鑑相家松浦某の透視は仲々當るが、彼れの顔を見ると如何にも青ざめて、一見、病人の様である。

濱口雄嶽が近頃、透視が出來なくなつたのは美食を攝つたが爲めであると謂ふので、彼は斷食苦行によつて更にその透視を研究しようと思つてゐる。其他、透視家には飽食暖衣は禁物であると曰はれてゐる。故に千里眼で有名なる故三船千鶴子や長尾夫人の如きも亦、肉體的には決して恵まれてゐなかつた。彼等は極度のヒステリーで、その異常なるヒステリカルな感覺が透視を可能ならしむる原動力となつた様でもある。以上述べ來つた人々は何れも、一種の天才と云ひ得るのであつて、普通の人間の成し得ざることをやつてゐる。併しながら、總ての人間が斯かる常軌を逸した天才ばかりであつたならば、社會の秩序は無論、保たれないのである。これ等は、今日の社會にありては、一種の病的現象とも言へる。

頭ばかり働いても、身體の働かざるものは、先づ現今の社會に何等貢獻するところがない。故に人間は以上の如き偏頗なるものが理想でなくして、精神的にも肉體的にも、圓滿の發達をなすことが究極の理想とならねばならぬ。この意味に於て娛樂と云ふものゝ必要が生じて來る。心的の娛樂と體的の娛樂との均衡を得ることによつて、人間は始めて、その圓滿の發達を遂げ得るのである。

人が筋肉労働で疲れたときに、コーヒーや、茶や、酒を飲み、或は煙草を喫してその疲れを醫す

様に、精神的の活動をなし、頭が疲れて来た時に、其頭を使ふ仕事と反對の方向に自分の身を舉動することが大に必要である。所謂、心氣一轉が人間には必要なのである。讀書家が難解の書を讀んでゐる時、平易な新聞の記事を見ても慰安を感じ得るのである。然れども寧ろ頭を使はない方面にその自體を働かすことが更に一層の有利である。身體の疲れた場合には全くそれが正反對である。併しながら、娛樂が如何に立派なものであつても、其人に興味のなきものは毫も娛樂にならない。従つて趣味性の程度の如何によつて、その人の娛樂の範圍が定まると云つてもよい。

人が浪花節を聞いて愉快を感じる幼稚の時代より、進んで長唄なり、義太夫なり、其他、高級の音楽を聞いて樂む様になつて来たことは、確に趣味の向上である。

趣味は理解によつて生ずるが、理解のないものに趣味の生ずる筈もなく、隨つて理解がなければそれも、娛樂でなくなる。故に娛樂は文明人や、野蠻人や、男女や、大人や、子供によりて區別されるのが當然である。

従來、大人は子供の娛樂を見て子供らしいと言つて一笑に附したのである。その子供らしい娛樂は、その人を若返らしめる上に於て、非常な効果がある。故に何時までも若き心持ちを失ふまいとすれば、努めて若々しい娛樂をとることも必要である。

人が頭を休めるときは、出来るだけ、色々と工夫するが良い。時には一時、馬鹿の様になる必要もある。人が馬鹿になると、其時にはその人の頭は休まり、エネルギーが蓄積せらるゝの時にあり、又潜勢力の養はれる時でもある。

張りつめた弓と同じ様に、のべつに緊張してゐる時は、その矢を放つことが出来ない。たるんでゐる故に、緊張して放つべき時が来るのである。この意味に於て人間は、總ての娛樂をとつて頭腦や、身體を休養せしむることが必要である。若し煙草が其人の娛樂であるならば、それを喫するがよい。酒が好きならば大いに飲むべしである。然れど人間は、他人の迷惑にならない範圍に於て、娛樂をとるべきであつて、今までの宗教家の曰つた様に、飲酒や、喫煙を以て一種の罪惡の様に思つた時は遠き昔に過ぎ去つた。生物學者の唱ふる所によると、人生の目的は蓋し享樂にあり、自己満足である。この享樂や自己満足を得るが爲めに、人間は活動し、奮闘し、また忍耐克己を敢行するのである。而してこの享樂の目的を達せんが爲めに、人には娛樂の考察が必要になつて来る。娛樂を大別すると、一は、目より受くる娛樂、二は、耳より受くる娛樂、三は、口より受くるの娛樂、四は、鼻より受くるの娛樂、五は、接觸によつて受くるの娛樂、六は運動や遊戯や道樂やによりて受くる娛樂等である。今、娛樂によつて享くる室外遊戯や、その他の道

樂を簡單に述べて見よう。

一、釣魚—これは著者の最も嗜好する道樂で、その内、殊に鱒釣りが最も面白い。日本で鱒釣りは未だ餘り發達して居らないが、これ位、技巧を要するの釣魚法は恐くは他にあるまい。餌は人工的の蠅か若くは匙である。匙にも銀製と金製とがあるが、銀製の方が遙に良い様である。鱒釣りは近來、日光の大谷川や湯の川で仲々流行して居る。鱒の子供、即ちヤマメを釣るには第一、其胃袋を開き、其食せる昆蟲の種類に似せてた蚊釣を使用するが良い。魚絲は支那産のものが良いが、最も世界で名高きものは英國製のヘルキユルスである。これ位、細くして且つ強きものは何れの國にもない。これは西班牙の原産と聞いて居る。近來、蚊釣に一種バラフキンの如き油を塗抹する様になつて來た。海釣りでも今は護謨製の人工鉤が色々製造せられてゐる。何れの魚でも、東風の吹く寒き日には餘り釣れないが、南風の吹く暖き日には最も能く釣れる。他人を出し抜いて澤山に釣らんと欲せば、何れの場合に於ても、宜しく餌や漁具の研究を要するのである。

二、狩獵—これには色々な種類がある。銃を以て捕へる場合、鷹を利用して鳥を捕ふる場合、犬を利用して兎や狐を捕へる場合、これ等は何れも一種の狩獵である。其他、獵用に供せらるゝの動物は鳥類では鷹や梟がある。前者は昔より利用し來つたもので、後者は歐洲にては専ら鳥獵に

利用せられてゐた。即ち梟を紐にて結び、棲木にとまらせ置けば、鳥は四方より集まり來るが故に、その時を見計らひ、適宜にそれを捕獲するのである。尙、鳥を囿となし同種の鳥を捕獲する方が幾等もある。即ち鳶を捕獲せんと欲せば、蜻蛉を釣るが如く、それを繩に縛り、これを遠方より竹の先きに付けて振り廻せば、彼等は必ずそこに集まり來る。此時、夫れを適宜に銃殺するのである。兎に角、食肉性の動物を馴らし、これを以て鳥獸を捕獲する事は、最も進歩せる狩獵法である。鵝を放つて魚を捕ふるの術を放鵝術と云ひ、鷹を放つて鳥獸を捕ふるの術を放鷹術と云ひ猫を放ちて他動物を捕ふるの術を放猫術と云つて居る。放猫術は昔より印度や波斯に行はれ來つたものであるが、それは一種の約を利用して、兎や、鹿や其他の小獸を捕獲するのである。その他、獵銃を以て鳥獸を捕ふるが如き、或は網や罟を設けて鳥や小獸を捕ふるが如き、これ等は何れも一種の娛樂には違ひないが、少しく惻隱の心あるものにはそれは必ずしも娛樂とはならない。魚は釣に掛り潑刺として水上に引き上げらるゝも、何等、同情を惹くの涙なく。又悲鳴の聲なきを以て、人の憐憫心を煽ふる事はない。所が鳥や獸になると、血を吐き涙を流してシヤイネストツクの状態となり、氣色、奄々たるの狀を呈する事がある。これでは寧ろ、惻隱の心に驅られて、娛樂でなくなつて仕舞ふ。支那や、南洋では、小判戴と稱する魚を利用して、海中の

大龜を捕獲して居る。これは其頭上に小判形の吸着器を具へ、これは龜に吸着するの性あるを以て、豫め其魚尾に紐を結び付け、その魚に己れの欲する獲物を附着せしめ、後それを引き上げるのである。狐でも、貂でも、狸でも、其孳尾期に當り、雌の生殖器の液汁を尻に塗抹し置けば、幾等でも捕れる。又、雉子や鴨の笛を造り、これを吹けば、幾等も同類を呼び集める事が出来る。蓋し、狩獵は娛樂ではあるが、血や涙のあるものを捕へることは、今日の文明人には、餘り面白き娛樂でない。

三、潮干狩—海岸に行けば潮干狩と稱して愉快の遊びがある。即ち潮の引き去つた跡には或は小魚が居る、或は蝦や蟹が居る。最も普通なるものには淺利貝や蛤貝やがある。又、川に行けば川狩と稱して、色々と雜魚を捕ふる事があるが、それも亦、面白き遊びである。

四、茸狩—秋季、野山に遊び一家團樂して茸狩する事は、日本の家庭では、何よりの娛樂である。余は其當時の幼時を追想して今も猶、愉快を釣り居るのである。これは食用茸を採集すると云ふ事よりも、寧ろ一種の娛樂であつて、而もこれが健康を助長するには最も應はしい運動である。

五、山遊び—春時、山櫻や躑躅を尋ねて山遊びする事は仲々面白い。又、食草として採集するものにはワラビやゼンマイがある。木の芽には令法や槐木や五架木等がある。夏日、山間の谷川に

逍遙し、或は綠蔭に憩ふことも亦、一種の娛樂である。秋になれば茸の外、色々の木の實がある。その他、野葡萄や藤衣蔓や栗や胡桃や木苺や通草や胡子類やコクワや五味子や其他、色々の果實がある。假令、果實がなくとも、家族や友人と相共に、杖を携へて山野を跋涉する事は仲々、樂しき遊びである。殊に秋季に於ける紅葉狩の如き、我が日本では、昔より有名の遊びである。此處で家族のものが相共に辨當を開き、天蓋の下に飲食する事でもあれば、それこそ、一層の愉快が湧いて来る。

六、野遊び—これは、山遊びと同様で、西洋ではピクニックと稱して居る。春の野に出づれば、空には高く雲雀が啼々と啼いて居る。下には紫雲英が紅錦の敷物を敷いてゐる。小溝には眼高が愉快らしく踊つて居る。畦畔や叢間には袴を穿つた様な土筆が簇生して居る。嫁菜や蒲公英や其他、土草を摘む事は仲々、趣味多き娛樂である。或は水邊に芹がある或は池には蓴菜が棒狀の新芽を出して居る。其他、欸冬と云ひ野蒜と云ひ何れもが食料となるのである。親が子供を連れ、兄弟が弟や妹を伴ひ野邊に遊ぶことは一生、記憶に残るもので、其當時を追想する事は如何にも愉快なものである。故に長者は常に年少者を伴ひ野遊びをするの習慣を付けるが良い。これは寔に健康を増進するの娛樂法でもある。

此他、室外の遊びに馬乗りがあり、游泳があり、登山があり、自然物採集があり、寫眞があり、旅行がある。旅行にも亦、名所廻りや温泉廻り等がある。團體運動としては庭球やホツケや、ゴルフや、野球や、蹴球等がある。尙、室内の娯樂には撞球や、卓球や、歌カ骨牌トや、音樂や、舞踏や、謠曲や、圍碁や、將棋等がある。

人間は總て偏しては宜しくない。圓滿の發達を遂げ、ホモジノスに身體や、精神を鍛へねばならぬ。腕の發達せるものは兎角、その脚が發達して居らない。腕力の發達して居つても、その拇指の發達して居らざるものが幾等もある。これ等の何れもが一種の不具者である。彼の芝居や寄席や小説等は何等運動にならないがそれでも、一種の娯樂たるや疑ひがない。これ等も亦、人間を造る上に、所謂人間學の立場から論ずれば、大に必要である。唯だこれに耽溺するかこれを利用するかによつて人生の成功、不成功が定まるのである。露國政府は今や宗教を破壊し、嘗てこれによりて得たるエクシタシーを阿片の如きものと看做し、活動寫眞やラヂオによりてその娯樂や慰安を置換せんとして居る。同時に野外運動を奨励し、國民の健康を保持せしめんとして居る。無論、それは最も策の得たるものであらう。彼等は革命後、非常に貧乏し、入費の掛るテニスやゴルフやベースボールの如き運動は行ひ得ないが、フットボールやランニングの如き金の掛らな

い運動競技は盛に行つて居る。神に祈りても神は何ものも與へないが、ソヴェット政府に祈れば神は何物でも與へると云ふ様な實物教育を配して居る。神に祈つても神は健康を與へて呉れないが、運動は其人に健康を與へて呉れると云ふ風に、實際問題によりて、傳統的宗教の香を去らんとして居る。

今日、米國で日曜日に教會に行くものが少なくなつたので、牧師は會議を開き、日曜日には、娯樂的の運動を禁ぜんとするの建議案を國會に出した。即ち彼等は日曜日にベースボールも、テニスも、フットボールをも禁ぜんとするのである。八百萬の人口を有する紐育の住民、空氣と陽光との缺乏や、其他の刺戟の爲めに衰弱せるの市民、彼等は今や日曜日の休日だけでは足りないので、土曜日迄も休日にせんと運動して居る。されば教會にはその市民を誘引し得ずして、終に今日、牧師のストライキとなつたのも亦、無理はない。教會の牧師は往々、文明病なる神經衰弱者を益々助長する様な事を教へるので、今日の社會に大害ありと曰はるゝ様になつて來た。今や宗教的の難業や苦業が人間を早く死地に導く事が知れて來た。これと反對に、人類の娯樂や道樂やが神經衰弱を醫し、益々、長命せしむる事が知れて來た。吾々は若きものゝ活潑なる運動を見ても若返りするの感じがする。人間に娯樂運動を禁ずる様な宗教の教義は、現今の社會に禁物で

ある。圓滿の發達は身體を圓滿に舉動する事によりて始めて得らるゝのである。ラスキンは「若し知識を得んと欲せば夫れに向つて奮闘せよ、美味を食はんと欲せば夫れに向つて奮闘せよ、快樂を得んと欲せば夫れに向つて奮闘せよ、奮闘は自然の法則である」と曰つた様に、吾人は快樂を得んと欲せば、宜しく夫れに向つて奮闘せざるを得ない。カーライルの曰つた様に、奮闘せざるものは眞の英雄ではない。人間は一種、高等の動物であつて、植物ではない。植物的の生活を送らんとするの人間は世の中に幾等もあるが、吾々人類は奮闘努力的の最高の動物たるを忘れてはならない。人間は大に遊ぶが良い、娛樂を取るが良い。それが聽て活動するの潜勢力を養ふことになる。尺蠖の屈するのはその伸びんが爲めであり、休眠は更に大なる力を得て活動せんが爲めの豫備行動である。娛樂、慰安、休憩、これは人類になくなくてはならぬ一種の糧である。

五、科學と宗教

科學は事實の叙述であり、哲學は議論であり、而して宗教は信仰である。即ち科學に於ては議論なく、また信仰がないのである。彼のデカルトは基督教を説明せんが爲めに、その獨特の哲學を創設し、「余は考ふるが故に余は在り」と言ふ概念を根據として、演繹的の哲學を唱道した。而して彼れは「疑ふと言ふことのみは疑はうとしても疑ひ得ないのである」と主張した。ペーコンは歸納的、論理に重大の價値を與へ、「古來の哲學は、人をして議論に長ぜしむるも、人生には何等の實用がない」と喝破した。從來、佛教でも基督教でも、その教義を説明せんが爲めに、哲學的の論理を用ひ來つたのである。故に、牧師の内に、今も猶ほ、哲學を知らざれば宗教を論ずるに足らずと言ふものもある。又、佛教は印度哲學に立脚して、佛教は哲學そのものの様に思ひ居るものもある。余は嘗て海外にあるの時、獨逸の一牧師と議論を戦はしたことがあつたが、その時、彼れは宗教は哲學であると主張してゐた。

宗教の定義はバイブルにある様に、「見ずして信ずるものは幸なり」であつて、議論ではなく、信仰である。即ち從來の既成宗教は神佛を信することであつたのである。併しながら、人は唯だ神や佛を信ぜよと言つた丈では、それを信じ得らるるものでない。然れど、從來は、神佛を説明せんが爲めに、哲學的の議論に立脚して居つたものが多い。現に前述、デカルトがセルボーンに

與へた書中に、「余は思ふ、神の存在と靈魂の性質とは、これを神學上より取扱はないで、寧ろ、哲學上より證明すべきである。素より吾々には、神の存在や、靈魂の不滅は、これを信仰するのみにて足れりであるが、信仰のみだけでは、不信者を説服することが出来ない。これを以て吾々は自然の道理に據つて、先づ彼等に説明せざるを得ない」と説明してゐる。而してデカルトの哲學は、基督教の神と靈とを説明せんが爲めの哲學であつたのである。彼れの目的は、眞理を批判價值せんが爲めの哲學にあらずして、専ら神を説明せんが爲めの哲學であつたのである。故に、その赴く所は、常に舊來の宗教の奴隷となり、舊式の信仰に束縛せられてゐたのである。畢竟するに、その哲學は、何に爲めにせんが爲めの哲學であつたから、今日彼れは一種、曲學の徒と見られてゐる。彼れの説明する筆法は、「凡そ明瞭に知れたることは、また外部の實在に於ても眞である。吾々は心内に神の念を有し、また神は完全なりとの念を有つてゐる。故に神が在り、而して彼れは完全である」と云ふ様な、議論をなしたのである。その當時、こんなオントロギー的の議論が行はれても、人は別に、何んとも思つてゐなかつた様である。從來の哲學者には、演繹法を用ひて、その究極に達せんとしたものが多かつたから、その議論には徒勞の想像や認識や直觀が少なくなかつた。而して夫れが何れもが往々、架空の水掛議論に終つたのも亦、止むを得な

かつたのである。デカルト派の哲學者は第一、神の存在を假定し、これを對象としての演繹法であつたから、吾々に満足を與へなかつたのも亦、故なきにあらずである。即ち、神の存在を假定することは、それが信仰であり、而してそれが又宗教でもあつたのだ。この宗教を根據としての哲學であるから、既にその根柢に於て誤りがある。併しながら、今日の實驗哲學となると、何れもが事實に立脚せるの議論であるから、幾分かは擱へ所がある。然れど哲學の本領は、ニーチェの云つた様に、一種、藝術的のものであつて、それが爲めに、幾らでも想像し、認識し、直觀し、批判し、價值し、而して議論もし得るのである。

科學は眼に見、耳に聴き、手に觸れて、萬人が萬人とも同様に、同様に聴き、同様に感ずるの事實を叙述するものである。故にその事實を在りの儘に見、在りの儘に聴き、在りの儘に感じないものは、病的であるか、それとも不具者である。人が熱病や腎臟病に罹ると、無いものが見えたり、在るものが見えなかつたりする。一種の瓦斯を嗅いでも、藥を内服しても、その神経系統を侵害せしむれば、一種の幻影を生ぜしむることが出来る。又、疾病や機械的の過程を経ずして、一種の催眠術に掛けても亦、幻影を生ぜしむることが出来る。その事實を在りの儘に見ることとは困難であつて、それには知識を要し、教育を要しまた熟練を要する。彼の顯微鏡を見ても、

知識なきものには、氣胞であるや、脂肪であるや、それとも生物であるやの區別の出来ない場合が幾等もある。昆蟲の脚に生ずる毛にも異状のものがあつて、微菌であるか、それとも塵芥であるかの區別の出来ないものが幾らもある。斯くの如く、太陽の光線で見ると、電光で見ると、曇天の日や夕刻に見る場合とによりて、色々の錯覺がある。故にペーコンは、「事物をそのあるが儘に眺め、何等の迷信と、欺瞞とに包まれないで、何等の錯誤や混亂に捉はれないで、そのあるがまゝに眺め入ることは、夫れ自身、疑ひもなく、あらゆる發見の全收穫に立ち優る高貴なることである」と喝破してゐる。知識に欺瞞や迷信の分子が包まれて居つては、夫れこそ科學を毒するものである。吾々は事實を以て思索を訂正すべきであるが、思索を以て事實を訂正してはならない。遮莫、宗教と科學との間に如何なる交渉があるであらうか。余は既成宗教は科學と沒交渉のものであつて、爰に何等の關係のなきものと思ふものである。彼の科學大系の著者トムソンは、「科學の叙述と宗教的の解釋とは、二つの全く異なりたる宇宙である。宗教の言葉は科學の言葉でない。夫れ故に、この二者は同時に用ふることは出来ない」と言つてゐる。今日、世人は科學と調和しない様な宗教は毫も權威ある宗教でないと云ふ。併しながら、實質的に、科學と相調和する様な宗教の存在する理由は何處にもないのである。何んとなれば、科學は事實に立脚

せるの夫れであり、宗教は、「見ずして信ずるものは幸なり」と云ふ信仰を目標として居るからである。換言すれば、宗教は科學に禁物である信仰に根據し、これに反して、科學は信仰を禁ずる事實に基礎を置き居るからである。科學的の知識は確實であつて、假へばハレー慧星が、何年何月何日に現はれ来ることを豫言しても、夫れは決して誤らないのである。所が、宗教になると、或一部の基督教信者が、キリストの再降誕を信じ居る様に、或は猶太教の信者が今も猶、メシアの降誕を信じ居る様に、未來や將來への信仰である。科學は因果の關係に立脚し、何物も偶然に突發するものなきを證明する。故に雨は降るべきの理由を以て降り、風は吹くべきの理由を以て吹き、雷は鳴るべきの理由を以て鳴ると説明する。數年前の關東の大地震は、基督教の或牧師に言はしむれば、ソドムやゴモラの人間が悪化した爲めに、神が故意に噴火によつて彼等を滅亡せしめたと同様に、關東の地震も亦、神の怒りに觸れて起つたのだと言つてゐる。所が、太平洋の沿岸を洗ひ居る二萬哩の地域は、何れも地震帯であつて、殊に吾が相模灘には五哩以上の深淵が二、三箇所もある。而してその地帯に、彼の大地震の起るのも亦、當然であると米國の地震學者は説明してゐる。

夫れ宗教の食物は神祕であり、驚異である。然れど、今日の神祕や驚異は、昔日のそれと、大

に異なつてゐる。即ち、今日の科學は、昔日の神祕や驚異の大部を闡明し、その前には開かれな
い扇なく、また蔽らない鍵もない様になつて來た。併しながら、生物の生命の起源になると、今
も猶、依然として神祕であり又、驚異である。而して、これが解決せられない以上は、迷信的の
宗教は、依然として存在するであらう。吾々、科學者は何故に地球があり、何故に生物があるか
を知るの必要はない。而して、それは人類の地球上に生存して居る間に、果して闡明せらるゝや
否やは疑問である。彼の獨逸の有名なる生理學者ジュボアレーモンの如きは、科學者には結局制
限があつて、或程度以上の現象を解決することは不可能であると主張してゐる。彼等は、現在を
知らず、何ぞ未來を知らんやとして「物」と「心」との大問題を永遠に放棄した、神祕論者の一
人である。

從來の哲學は懷手式であつたが爲めに、總てを思索によつて解決せんとした弊は、爰にも現は
れて、終にその大事の問題を放棄したのである。併しながら、吾々の今日の文明はこの大戦争
によりて一躍、二百五十年飛んだと電氣王のエチソンの言ひ居る様に、正に驚くべきの進歩をし
たのである。故にその文明に吾々が幾千萬年のなだらかな時を與へさへすれば、それこそ文明
は驚くべきの階段に進み行くに違ひない。吾々が何か一大發見をなして、文明の一階段を登る時

に、その視野が、更に一層、展開せられるが如く、何時かは文明の頂點に達し得るの時があるに
違ひない。知識は無限であり、科學は無限に進み行く。その前進は寔に洋々として春の如しであ
る。然らば嘗て宗教的に肯定せられてゐた諸問題も、科學の陽光に觸れて、その地金を現はすで
あらう。彼の地獄極樂説の如きも、吾々の子供の時代には、勸善懲惡の爲めに相當の意義があつ
た様に思はれる。所が、今日となりては、如何なる人間も、それを信するものがなくなつた。彼
の狐や狸が人を瞞ますと云ふ様なことは、今日、誰れもが信じなくなつた。或人間は念寫の出來
るものだと思ひ居るが、それも亦、今日の處、詐欺行爲の外には出來ないのである。今日、海坊
主や人魂や靈火や河童や大入道やその他、怪物の存在する様に思ひ居るものもある。而してこれ
等は、人類の野蠻時代に使用し來つた言葉であつて、今日、既に廢退性となり、而して今や通用
しないのである。恰も人間の尾や耳や鼻を動かす筋肉の無用なる如く、それ等の言葉も亦今や無
用になり居るのである。吾々の下等動物の時代に重要なりし筋肉の痕跡を見て、吾々はその進化
の道程を知るが如く、その野蠻時代の言葉を見て吾々はその幼稚なりし時代を追想することが出
來る。吾々の祖先が二、三千年前に製造した神や佛や靈魂の様な言葉を聞くと共に、吾々は海坊
主や大入道や幽霊や地獄極樂の様な言葉を聞くと同じ感じがする。而して今日の神佛の意味と二

三千年前の神佛の意味とは大に異なつてゐるに違ひない。昔時の鬘斗まはひは何れも鮑あはひを伸したものであつたが、今では多く稜状の紙片となり、甚しきは「のし」と假名にて記する様になつてゐる。昔時、帽子に紐を付して風に飛ばされない様にしたものが、今日では一種の飾帯になつてゐる。吾々の洋服の袖襟や背の下方に付けある鈕は、嘗て袖や裾を摺かける爲めに利用せられたものであるが、今では同じく一種の飾りになつてゐる。世に恐らくは千年の本質を保つ物體は何處にもあるまい。それ宇宙は廣しと雖も、絶對に變化なきの現象は何處にもない。吾々の今日、見るの一日は、明日の一日よりも短かいのである。かの變化なしと思はるゝ太陽も、ヘルクレス星座の方向に、非常なる速力を以て進みつゝある。吾人は古生物學を研究する時に、力の強きものも、繁殖力の旺盛なるものも、總てが容捨なく滅亡し、今や化石して残り居るのを發見する。生物は死滅し、殿堂は破壊せられても、その名稱のみは依然として残り居るを見るのである。斯くの如く主觀的の言葉も亦、そのもの夫れ自身の存在の有無に拘はらず、人類の生存する限り、子々孫々へと傳はり行くであらう。而して、その言葉の今も猶ほ社會に累をなし居るものが少なくないのである。

宗教の大なる問題は靈魂の存在、即ち永遠の生命である。然らば科學はこの問題に如何なる説

明を與へるであらうか。人間に靈魂のがあると云ふことは、今日の科學の取扱ふべきものでない。何んとなれば、科學の取扱ふべき範圍は、前述の如く、眼に見え、耳に聽え、手に觸れるものであらねばならぬ。換言すれば、實驗の伴ひ、デモンストレーションの出来るものであらねばならぬ。若し靈魂が果して人間に存在するものとすれば、人猿猴にも亦存在するに違ひない。否、進化の道程を溯れば、何れの動物にも判然せる區別がないのである。更に、その究極に溯れば、吾はアミーバと稱する單細胞の最下等動物に到達する。而してそのアミーバにも亦、靈魂があると曰ひ得るのである。何んとなれば、人間は、このアミーバより幾百萬年の星霜を経て進化や淘汰の道程を辿り、現はれ來つたものであるからだ。人間を構成する物質は、何れもが分業的に活動せる數百億の單細胞の集團であつて、その單細胞は、實質的に、何等アミーバと異ならないのである。若し果してアミーバに靈魂があるとすれば、人間の體軀を構成する數百億のアミーバ的の靈魂があるとも言へる。一個の卵子が二個になつた時に、その靈魂も亦、二分するであらうか。虎と獅子との混生兒は如何なる靈魂を有するであらうか。若し假りに人間に靈魂がありとした所で、その靈魂は如何なる性質のものであらうか。俗に人が死んだ時には一種の精氣が立ち上り、その時、寫眞を撮れば、何にかほんやりと雪の様なものが寫ると云ひ居るものがある。若し果し

て、それを見たとき云ふものがあれば、恐くは夫れは眼の錯覚であらう。それとも靈魂はエーテルや電氣やマグネチズムのものであらうか。若しそれが叙上のものであるとすれば、今日の科學で測定が出来るのである。併しながら、その測定の出来ないものは、今日科學的にその存在が否定せられる。科學者は、假へ、その存在が可能と思考しても、その存在の實證の發見せらるゝ迄は、そのデモンストレーションの出来る迄は、それを無きものと假定する。

若し夫れ靈魂なるものが、上は人間より、下は劣等の動物に至る迄、存在するものとしても、その種類は果して如何と云ふ、第二の難問に到着する。人間と猿との靈は同一のものなりや、またその混生兒は如何、或は虎と獅子との混生兒の如き、狼と犬との混生兒の如き、それ等の問題は到底、靈魂の存在を説明し得ないのである。生物は統一してゐて、同じ祖先より出發してゐるから、若し動物に靈魂があれば又、植物にもあると云へる。何んとなれば、今日、動物と植物との間に劃然たる限界がないからである。その筆法で行けば、攝氏七十度の熱度を加ふれば死滅するてふ酵素にも亦、靈魂があると云へる。否、太陽の光線を受けて活動する原素セリウムやウラニウムやマグネシウムにもあらう。而してトムソンの所謂、地殻の中に横たはる細砂や岩片が、咆哮悲鳴を據けて居るのを聞くかも知れない。斯く論じれば、靈の存在の何れの點よりも不合

理たるを知るのである。アイスタインの所謂、常識的に實驗の伴はないものは、蓋し無意味である。然らば則ち、吾々は精神と肉體との關係を如何に見るか云ふ問題に到着する。肉體と精神との關係は楯の両面の様なもので、肉體ありて精神あり、肉體なくして精神はないのである。今日の唯物論者は、「世界の本體を以て物質となし、エネルギー乃至精神を以てその屬性と看做し、物質を離れてエネルギーなく、肉體を離れて精神なく、物力身心の兩者は相互、不二密接の關係を有す」と言ふのである。即ち物質は一次性にして、精神は二次性である。換言すれば、物質は世界の本體であつて、エネルギーや精神はその屬性である。而して精神は一種のエネルギーであつて、その言葉は人間にのみ限りて使用せられるのである。

數年前、倫敦の外科醫學大會で、クライブ博士が發表した様に、精神は一つの電流であつて、それは人體を構成する幾百億の細胞から製造せられてゐるのである。即ち人間は電氣仕掛であつて、その電流力の強きもの程、精神が強いのである。而して人體の電流を製造するものは、食物なるが故に、吾々は極力營養分に富める食物を攝取せざるを得ないと云ふことになる。病人や弱者の精神の旺盛にならざるも亦、それが爲めである。

人は能く精神一到何事か成らざらんと云ふが、精神にも亦、色々の種類があつて、強き精神を

涵養するにあらざれば、何事も成就する理に行かない。或はナボレオンの精神があり、或はビスマークの精神がある。而も、その精神は、時と所によつて、大に異つてゐるのである。吾々の祖先は、嘗て、人間の精神を靈魂と誤認してゐたものらしく、それが今日、廢退性となり、惰性的に、吾々の頭に残り居る様にも思へる。その精神的のエネルギーはラボシエーの所謂、不滅のものなるが故に、その意味の靈魂不滅論は稍々肯定が出来るのである。

吾々の祖先は、嘗て葉上に蠢動する毛蟲の窈窕たる胡蝶に化するのを見て、死後、彼等も亦、甦生して天國に行き得るのだと思つたこともあつたに違ひない。この昔時の思想が、今も猶ほ惰性的に、教育なき人間や、無知の徒に残り居るのも無理はない。

彼のメーテリンクは「花の智慧」なる書物の内に、「花は蝶や蜂の媒介を得て實を結ぶ、而して枯れてしまふ。されどその實は地に落ち、根を生じ、莖を抜き、更に花を開く。それが花の永遠の生命である」と云うてゐる。人間も亦、花と同じく子々孫々へとその種を残し行くが爲めに、永遠の生命がある。と云へる。これが即ち未來の存在を意味するものとすれば、蓋し科學的であると云へる。今日の科學は、進化論に立脚してゐて、アミーバより進化し來つたその人間のみに、靈魂の存在や永遠の生命を認める理には行かない。而して、その靈魂の不滅や永遠の生命の思想

は、人間の自己満足より誘發せられた迷想に歸するものであつて、畢竟、死別時の慰安であつた様に思へる。洋の東西を問はず、死人を呼び起す様な、靈媒や巫女の行爲は、何れもが詐欺行爲とせられてゐる。その何れもが金儲けの爲めであつて、敵本的の行爲たるや疑ひがない。

人間が兩三日死して後蘇生し來つたものが幾等もあるが、彼等はその死後の存在に對しては、何等の暗示を得てゐない。一本の注射や數滴のコロホームによりて昏睡状態に陥る人間が、その時、開腹せられても、脚を切断せられても、何等の自覺を有つてゐない。その人間の靈魂は、その時、悲鳴を擧げて居るだらうか。重罪犯の内には腦の故障によりてその罪惡の誘發せらるゝものが幾等もある。婦人の月經時にありても色々の犯罪が醸されてゐる。その時の靈魂も亦、これと没交渉のものであらうか。而して、基督教では、罪人の靈魂は死蔭の谷に落され、限りなき火に投げ入れられると説明してゐる。如何に痛覺ある人間も、神經を癱痺せしむれば、その痛は止まり、如何に煩悶せる人間も、エーテルで睡眠する。ペーコンの言つた様に、人は生るゝが如く、その死を知らないのである。人の死する前に、その神經が癱痺するのであつて、その時には毫も痛覺がないのである。人間の痛覺は、蓋し、神經あつて後、始めて現はれ來るもので、神經なくして痛覺や煩悶の起る理由はない。而して人間の最も苦痛と思はるゝものが、身心何れの所

に現はれても、何等、靈魂に交渉なきものである。而して靈魂が亡靈となつて現はれ來つた場合に、色々と苦痛を訴へ、怨言を述べたりする様な矛盾が多いのである。吾々の人生凡五十年間は、常に瞞され勝ちであつて、それが何れも主觀的のものに限つてゐる。殊に宗教的になると一種、催眠的の行爲の多きが爲めに、餘程、注意せざれば欺され易い。蓋し、彼の六、七世紀の頃に、中歐に起つた模倣病の様に、或はリバイバルの様に、一種の自己催眠に罹ることが少なくないからである。要するに、吾々科學者はデモンストレーションや實驗によりて、始めて何事も肯定することが出来る。人間の舉丸組織より離れた精蟲の一匹が、卵巢組織より離れた一卵子と相合して獨立の一細胞となり、分裂して多數の細胞となり、各種の器官を構造し、遂には小なる人間の形が出来る。十ヶ月は子宮内に留まり、胎盤に養はれ、月が満ちて赤子となり、世に現はれ來る。然らば食物に養はれ、成長し行く内に、生殖器が成熟し、何時かは男女相求め、幾人かの子供を生み、泣いたり、笑つたりして居る内に、嚚碌して死んでしまふ。これが人間の一生である。これ丈は誰れにも見え、誰れにも經驗し得るの事實である。これから先はどうなるか、誰にも知れないパラドックスである。その知れない所に宗教が起り、迷信が伴ふのである。これから先きは宗教家が如何に説明しようが、科學者の關知する所ではない。唯だ吾々は花は實を残すが如く、

人はその子孫を残し行くことを知つてゐる。人がその名を残し行くが如く、花も亦、その香を残し行くのを見るのである。

六、人間とその食物

今回の世界の大战争後に、その大に疲弊して居る國民を如何に救済すべきかの問題は、目下、到る處に研究せられてゐる。我國に於ても、亦、今や人口問題や食糧問題が當局者によりて具體的に研究せられんとして居る。この時に當り、余は、爰に人間とその食物との問題に就き、聊か、卑見を述べて見よう。

米國政府の當局者は、過般、大學の教授やその他、智囊者を招集し、その混亂せる米國の社會を如何に改造すべきか、又、如何なる方針を以て國是となすべきかの意見を聴取した。これによりて、政府の方針は、先づ第一に、強健なる國民を養成することになつた。換言すれば、今も、將來も、米國を雙肩に擔ひ得る強健の青年を得ることである。

戦争後の疲弊せる今日、世界の競走場裡に立ちて、幾多の改造すべきものがあるが、何を差し措いても、強健なる人間を造ることが、目下の最大急務である。而して、これが又、世界先進國の輿論でもある。米國では今日、強健なる人間を造るには、第一、榮養に富める食物が必要であることを認めた。これが爲めに、初めに生れ來つたものは、食料省フードビュローである。即ち食料省大臣フーパーの下に、色々の研究機關が創設せられたのである。其劈頭に研究の材料になつたものは、從來、知れ居つた種々の食物の榮養價値であつた。而して、其次ぎに研究せられた

ものは、如何なる美食を攝るも、人間の健康に必要なビタミンの缺乏せる場合には、決して健康の得られないことである。即ち、如何に巨萬の富を有して旨きものを食するも、如何に山海の珍味を攝取するも、其食物にビタミンを含有せざる場合に、栄養不良に陥り、良いては不幸の短命に終るのである。而して、これ等のビタミンは、生物界に極めて少量に含有してゐることが知れた。尙、これ等は人工的の食物内には、毫も、含有せられてゐないのである。抑も、このビタミンの本質は、如何なるものと云ふことになるか、それは未だ充分に知れてゐない。今日、普通に知られある重なるビタミンは(A)、(B)、(C)の三種である。其内の(A)は、牛酪や牛乳や肝油や卵黄等に含蓄せられてゐて、水には溶解しないが、脂肪に溶解するので、一名、脂肪溶性ビタミンと稱してゐる。これは、普通の食物の内には可なり包含せられてゐる。又、焦煮しても、餘り、其分量を減ずることなきを以て、先づ、其缺乏を來すことはない。彼の夜盲症の如きも、ビタミン(A)の缺乏に歸するもので、昔より鰻の肝を攝食すれば、直ちに治ると曰はれてゐたのがそれである。それは、吾々の祖先がビタミンの含有を知つてゐた理ではなく、偶然の符合であつたのである。ビタミン(B)は、糠や其他の食物中に含有せられあるもので、水に溶解するの性質を備へ居るので、一名、水溶性ビタミンと稱してゐる。米や大麥や小麥を白粉に

した場合には、ビタミン(B)は、多くは、糠となりて除却せらるゝのである。ビタミン(C)は新鮮なる野菜や果實中に包含せられてゐて、それは熱に破壊せられ易く、貯藏されたものゝ内には、多く缺乏してゐる。殊に、乾物とか罐詰とかになれば、全くこれを缺如してゐるので、何等、栄養の價値がないのである。今回の大戦争に當り、獨逸では野菜や果實の缺乏の爲め、旺に壞血病が起つたのである。恰も、昔時、長途の航海に人が新鮮なる野菜を得難く、それが爲めに壞血病を起したのと同様の結果を生じたのである。これが爲め、今回、獨逸の或る化學者が、蜜柑の皮より一種の油を搾取し、これによりて獨逸人の壞血病を免がらしめた。故に、これを一名、抗壞血病性ビタミンと稱して居る。更に、最近になつて、ビタミン(D)や、ビタミン(E)等が見せらるゝ様になつた。

却説、然らば吾々日本人の常食とせる白米には、如何なる栄養價値があるかの問題である。米國のワシントンに於ける食料研究所の研究結果に依ると、今日の精白せる米には、何等、ビタミンを含有せざることである。故に、米を多量に食するの人間は、栄養不良に陥り、活動の能力を剝奪せらるゝことになる。これはジョンズ、ホップキンス大學教授マツコルム博士の最近の著書に詳述せられてゐる。

米國に於ける今日の食物は、十年前とは、全く、其趣きを異にする様になつた。それは、一に食物研究所に於ける研究の結果に外ならないのである。今日、廣く栽培せらるゝ穀物は、其品質も改良せられ、其多産性に進化せる點に於ては、到底、昔日の比ではない。然れど、今日、其食膳に供せらるゝ迄の過程は、昔日と全く、其趣きを異にし、これが爲めに、榮養としての大なる價值がなくなつた理である。穀物は、吾々の祖先の、重要な常食であり、而も夫れが、今日迄最も榮養に富める唯一の食物でもある様に思はれてゐた。殊に、我國にありては、建國三千年來、豐葦原瑞穂の國として、専ら米食をなし、生活し來つたのである。寧ろ、我々の祖先は、今日、吾々が米を食するよりも、更に、多量の米を食したものであらう。其當時の玄米は、大に、榮養分に富み、ヅキタミンを含み居つたが爲めに、頗る優秀なる強健體を造り上げる爲めに好適せる食料であつた。然るに、今日にありては、その精白せらるゝの結果、何等のヅキタミンを含有せざる様になつて來た。即ち、今日の精白米には、健康に必要な蛋白質や脂肪や礦物を含有してゐないのである。

この昔日と全く製造法の異なる精白米を、漫然、食し居るが爲めに、吾人は、益々、榮養不良の危険に陥るのである。吾々の祖先は、色々と犠牲を拂ひながら、有毒と無毒との食物を區別

しながら、今日迄、其生活を續け、文明を唱へ來つた。彼等は、捕へ得る動物、假へば獸や鳥や魚や貝や蟲やの動物の肉を食ひ來つた。植物界よりは、疑ひもなく、果實や根瘤や新芽や種子を食つたに違ひない。而して、種子の内の重なるものに、稻や麥や稗や其他、穀類があつたに違ひない。果實の如きものにもなると、容易に得られたのであるが、殊に、禾木科植物の種子となると、其收穫が仲々困難であつて、昔時は、多く、鳥や反芻動物の食料に過ぎなかつたのである。實際、大規模の農業はハッチンソン氏の謂ふ様に、人間が家畜を使用する様になつた時に、始めて行はれたのであらう。原野に點々、散在する穀草より、其種子を拾ひ集むるが如きは、容易の事ではない。然るに、吾々の祖先が、始めて、水中に生長する稻を發見した時に、彼等は、定めて、非常に、歡喜したに違ひない。何となれば、その水中にあるが爲めに、鳥の外の他動物に、荒されない唯一の穀草であつたからである。稻は、少なくとも、紀元前、三千年の昔より亞細亞に知られてあつたが、不思議にも、その野生のものは、未だ、嘗て、何處にも發見せられたことはない。然れど、色々の事實を綜合すると、稻の原産地は、先づ、南印度より交趾支那に跨る熱帯地に繁茂してゐたものらしい。而して有史前、既に、支那や朝鮮や日本に傳播したやうである。支那には、既に、紀元前、二千八百年の昔に、其稻の栽培せられた記載がある。所が、奇怪にも

サンスクリットやバイブルには稲の記載が毫も載せられてゐない。アレキサンデル大王の時代（紀元四百年前）には、其領土北方印度には、稲の栽培せられあつたことが、歐洲の旅行家によりて知れてゐる。

抑も、人類の發現地は、印度のベンガルや瓜哇の如き熱帯地であつたのだから、其地に、野生する米が、最も、古き、食物であつたことが肯定出来る。これは、有歴前、既に、北米にも栽培せられてゐたのであるが、不思議にもそれはアメリカ印度人の常食とはならずして、唯だ、秋や冬の初めに副食として食膳に供せられたに過ぎない。殊に、稲の收穫時季になると、雀の如き鳥類が多く集り來り、これを嗜食するのであるから、其收穫を急ぐ外には、別に、大した、不便はなかつたのである。斯くの如く、米は廣く、東洋人の常食であつて、我が大和民族の専有する食物ではなかつたのである。昔時の人間は、今日の人猿猴の様に、香氣ある植物の新芽を探索して食つた時代があつたに違ひない。所が、人間が、次第に、文明に進むに従ひ、火を發見して煮ると云ふ料理法を覺えた爲めに、固き植葉をも食する様になつて來た。遂には、蔬菜を栽培して、その葉を平時の常食とする様に進み來つた。而して、これは、殊に、日本人や支那人に於て最も、頌用せられてゐるのを見るのである。現代、人口の増加と共に、世界の食料問題は轟々せられ、

これが爲めに、農具の發見となり、品質の改良となり、作物に於ても、家畜に於ても、多産性のものが幾らも、現はれ來つた。其製造法に於ても、精選法に於ても、貯藏法に於ても、何れもが昔日と全く其趣きを異にする様になつた。而して、合衆國農務省の出版物の如きは、數多あるが、最近迄は、精白せる麥粉や其他の穀物、或は植物性の脂肪等が、蛋白質や其他の營養物を含有するを以て、何にを儉約しても、これ等を購買せよと家の各主婦に勸告したのである。又、米國の農家には、大規模の經營によりて、これ等を栽培することを懲憚したのである。而して、其大規模の耕作は、疑ひもなく、現代の農業機械の發明に起因してゐて、其土地を耕耘するに於ても、その作物を收穫するに於ても、精選するに於ても、人間の勞力を最少限度に用ふる様になつたのである。加ふるに、其土地より奪ひ去らるゝ有機物の如きは、ツラックターの如き文明の利器の出來たが爲めに、何時でも、都市より肥料として還元が出来る様になつた。斯くの如くして、有史前の人間と同様に、今日も、穀物は最も優秀なる、人類に好適せる營養の根源であると思はれてゐた。所が、最近になりて、全く夫れが裏切られて、その大に誤れることが知れて來た。

從來、精白せる米や麥粉を主食とせる人間の脚氣に罹ることが、色々の試験によりて、知れてゐた。彼の和蘭のアイクマンは、今より大凡三十年前、既に鳩や鶏に精白米を常食せしめ、二週

間乃至四週間で人間の脚氣と同様の癱痺病を起さしめてゐる。彼等は、その精白せる米が、その病氣に關係のある所より、其精白後の殘糠に、其病氣に對抗する一種の抗素のあることを暗示した。その後、ポーランドのフンクが現はれ來り、其抗素とは、ヅキタミンと稱すべきもので、動物の榮養には、缺くべからざるものであると主張した。榮養不良の爲めに、突發する病氣は、幾多もあるが、其内でも、脚氣や夜盲や壞血病や伊國癩ペリウラや佝僂病リクケット等が重要なものである。彼の壞血病の如きは、ヅキタミン(C)の缺乏に歸するもので、新鮮なる蔬菜類を攝取することによりて、その全治することが知れて來た。精白米の給與により、今や、死に瀕せるの鳩にさへ、適當なる少量の食物を攝取せしむれば、平時の健康體に恢復することが知れた。故に、精白せる米のみを攝取するの動物は、何れも、榮養不良に陥り、一種、脚氣の様な病氣を起して死することが確になつた。兎に角、一種の一定せる食物を攝取することは、人間の榮養には先づ禁物である。

水夫が、ビスケットや鹽肉のみの攝取によりて壞血病に罹ることは、既に、十八世紀の初葉より知れてゐた。嘗て、伊國や佛國の貧乏の農夫が、ペラグラ病に罹ることも、其榮養の不良なる食物の單食によることが暗示せられてゐた。このペラグラ病は、一千九百年に、始めて、米國に現はれ、殊に、南方の合衆國にありては、甚だしく、其病者を發生したのである。

從來、若き鼠に澱粉やラードやカゼインや無機鹽を與へても、充分に生長しないことが知れてゐた。所が、其後、更に、これに、バタと卵黃とを供給した所、完全の生長をなすことが知れた。併しながら、バタや卵黃の代りにオリブ油やラードを混加しても何等、成長に効果なきことも知れたのである。即ち、此試験によりて、動物の成長には、何か、或る脂肪の必要なることが知れたのである。

精白せる米の單食の健康を保ち得ないが如く、精白せる麥粉の單食も亦、人物の健康を保ち得ないのである。前者の脚氣を生ずるが如く、後者にも亦、同病を生ずるのである。元來、精白せざる米には、色々の蛋白質や澱粉や脂肪や無機鹽類のあることは、其分量は兎に角、其性質に於ては、麥の夫れと大差はないのである。所が、麥に純正の蛋白質(カゼイン)や乳糖やバタや無機鹽を適當に混合した場合に、若き鼠の成長試験は成功したのであるが、驚いた事には、麥の代りに米を用ひ、これにカゼインやバタや無機鹽類を加へたものゝ、全然、失敗に終つたのである。嘗だに、彼等は成長しないのみならず、二、三週間の内に、癱痺症に罹り、死亡したのである。而して、麥を用ひて成功した場合と、米を用ひて不成功に終つた場合とを比較すると、二割の乳糖の有無が其結果を左右してゐることが知れた。即ち、澱粉の代りに、乳糖を混和したものが、

其成功の秘訣なることが知れた。而して、今、此乳糖を食物中より除却したる場合に、若き鼠の成長の中止することが知れた。又、其後、乳糖を精選して結晶せしめたものを、前述の食料に混合しても、鼠の成長は不結果に終るのである。尙、その結晶も、混合食物の内にある乳汁より蒸發せしめて出來た結晶でなければ、その無効なることが知れた。これによりて動物の成長には、吾々の平常の食物の外に、第二の何か必要物のあることが知れたのである。夫れは、甚だ、少量であつて、若き動物の成長にも、成人せる動物の保健にも必要なるものである。

米は世界人類の大半數、殊に亞細亞や其他、太平洋に散在する島民の重要な食物であつて、恐くは人種として絶対に米を食はないものは何處にもあるまい。唯だ米國の如きは、最も少量の米を消費するの國で、今も、それが、餘り多くの人によりて攝取せられてゐない。野蠻人は、精白しない所謂、赤米を食用に供してゐるが、これは、白で搗ぐが爲めに、最も榮養分に富める芽胞や皮膜の大半を消失せしめてゐる。其副産物たる糠に、人類の榮養に必要な礦物性鹽類や脂肪や蛋白質があるのである。今日、世界の市場に登り居る米は野蠻人の攝取し居る米よりも、更に一層、精白せられあつて、前述の榮養に必要な部分が大部、除却せられてゐる。故に今日の精白せる米は炭水化物、即ち澱粉質の外には何等價值あるものでない。米の芽胞は、小麥や玉蜀黍

の夫れと同様に、原形質活動の中心であつて、その他の大部は、澱粉質であるに過ぎない。穀物の脂肪と稱するものは則ち、此芽胞の内に備蓄せられてゐて、これが昆蟲や其他、高等の動物にも、重要な場面を演ずるのである。玄米は、其含有する脂肪の爲めに、長時暖地に貯藏せられた場合に、其固有の香氣を失ひ、一種の臭氣を喚起し來る。故に今日、米を安全に貯藏せんと欲せば、宜しく、この芽胞が除却せられねばならない。然らば、害蟲の如きも、其脂肪のなきが爲めに、餘り蕃殖しないのである。

即ち、精白法によりて米の表皮を除却することは、商業上の一政策であつて、これが爲めに、結果する白色は、萬人の視覺的の價値を高め、其脂肪の變化より招致するの臭氣を防ぎ、而かも米、固有の香氣を發揮するのである。總て、麥でも玉蜀黍でも、其穀物を機械的に白色に精選すると云ふことは、美色を選ぶと云ふ人間本能の失敗であつて、其結果は、遂に、今日の如く、生物の榮養に、無價値の産物となつた理である。商家が米の品質を鑑定する時に、精白の程度が、その善悪のバロメーターであるが爲めに、遂には、滑石やマイカの粉末をも加へて、更に、一層、その白色の度を顯著ならしめんとする。これが爲めに、吾々は、白米を水に洗淨する場合に、夥しく白汁の生ずるを見るのである。假令、米は精白せられても、前述の白粉を以て化粧せられざ

るものは、少しは褐色を帯びてゐる。

人間の栄養になくてならぬものは、則ち、蛋白質、炭水化物(澱粉)、脂肪及び無機物(灰)の四要素であるがために、前述せる精白米をして完全なる食物たらしめんと欲せば、宜しく他に色々なる栄養素を混加せざるを得ないのである。精白米の有する蛋白質の如きは、生物學的に甚だ貧弱なる價値を有するを以て、他に類似せる蛋白質の混加が必要になつて来る。又、米の全く欠缺せる、而して、動物に最も必要なる礦物性の物質は、他より招致せねばならないのである。これは脂肪に溶解するヅキタミン(A)にも、水に溶解するヅキタミン(B)をも含有しないのである。又、鼠の如き小動物を使用せる試験によると、米に抗壞血病的のヅキタミン(C)の存在も、亦、非定せらるゝのである。

従來、脚氣の病原は、精白米の攝食にあることが知れてゐた。然れど、果して、其内の如何なる物質の缺乏が、斯病を招致するか否か、知れてゐない。或は、精白米に於ける蛋白質の缺乏と云ひ、或は、その内にある脂肪の缺乏と云ひ、或は、その磷酸鹽を含有する有機物の缺乏と云ひ、或は、米の不完全なる貯藏法より來る毒素に歸すると唱道せられてゐた。氣候や砒素中毒や其他、特殊の病菌も亦、斯病の素因として唱道せられてゐた。無論、これ等の病原の發見は實際、動物

試験による外はなかつたのである。而して、これ等の試験により今日、不明なる化學的物質の其食物内に缺乏せること又は、確になつて來た。而も其必要なる分量は、頗る、少量であつて、それが抗神經物質であるとか、抗脚氣ヅキタミンであるとか、水溶性(B)であるとか、其他、色々の名によりて發表せられた。兎に角、此脚氣の特殊食物の缺乏によりて、發生すると云ふことは食物營養學に大なる革命時代を劃したのである。我が海軍でも、四、五十年前、一千名の水兵の内、三百二十四名の脚氣病者を出したことがある。その病源の食物の缺陷にあることを注意し始めたものは、その時の軍醫總監、高木兼寛博士であつた。彼等は、九ヶ月の遠洋航海に於ける水兵に對する脚氣の病原を試験せんが爲めに、一日に九十一瓦の蛋白質を含有する食物を給與したのである。所が、水兵の二百七十六人の内、百六十九人迄が、何れも、脚氣に罹り、同時に營養に富める食物を攝取したる士官連が、毫も、斯病に罹らなかつた事を確めた。彼等は、次ぎの航海で、更に、水兵に百五十五瓦の蛋白質を含有する食物を給與した。所が、前航のものに比して、遙に、其罹病者の數を減じたことを認めた。即ち、二百七十六人の水兵に對して僅、十四人が斯病に罹つたのである。斯くの如き事實の下に、今日の海軍兵の食物は、大に、改良せられ爲めに、脚氣病が、今や、全く、消滅したのである。即ち、従來の不完全なりし食物内に、多量の

肉類や蔬菜類を増加して、米の分量を減少し、その代りに、小麦や大麦の若干量を混加したのである。更に、その上、一日に牛乳五合に當るコンデンス、ミルクが水兵に供給せられたのである。英國の如きは、既に、一千八百五十六年頃より、コンデンス、ミルクが製造せられ、それが至る所の市場に販賣せられてゐたので、脚氣の如きは、毫も、見ることが出来なかつた。即ち、脚氣は、主として、牛乳の缺乏による病氣なることが知れたのである。牛乳を攝取する様になつてからは、人は胃腸病や呼吸器病に罹ることが激減したのである。これが爲めに、殊に、眼病者の如きは、昔日の半にも達しなくなつた。日本海軍の軍醫連は、食物内に於ける肉類の増加が、脚氣の豫防に大關係があると主張してゐる。然れど、多量の肉類の攝食が、必ずしも、脚氣病の發生を防止し得ないのである。而して、これを證明するの事實が、^{ノルウエー}ノルウエーの水兵間に發見せられた。即ち、那威の水兵は、千八百九十四年、不意に脚氣に罹つたことがある。それ以前には、同國には毫も、脚氣病は見られなかつたのである。而して、其當時、水兵の食物はライ麦より出來た麵麩や豆類や鹽豚の肉等であつた。所が、その後になりて、精白せる小麦パンや豆類や鹽豚の肉が、一週間に一二回づつ給與せられた。又、謙詰の肉や魚肉は、一週間に三四回、干魚は一週間に一回、供給せられた。此場合には、獸肉や魚肉の供給は、充分であつて、蛋白質物には、毫も、缺

乏してゐなかつたのである。然るに、豈に計らんや、彼等の社會には、脚氣が忽然として突發したのである。而して、それは、未だ、嘗て、歐洲の北方では、發生したことのなき病疾であつたのだ。其當時、或る士官は、精白せる小麦の麵麩を嫌忌して、從然の通り、ライ麦の麵麩を攝取したが爲めに、幸にも、其流行の脚氣に罹らなかつたことが報告せられてゐる。これによつて見ても、獸肉やパンや其他、豆類は完全なる人類の食物でないことが明瞭になつて來た。即ち、精白せる小麦粉より製造せるパンを常食として、而も、それを多量に攝取するものは、精白米を主食とせる人間と同様に、何れもが脚氣病に罹るの可能性あることが知れて來た。而して、獸類の筋肉や魚肉の如きは、脚氣に反抗する何等の要素を含有してゐないのである。

前述、和蘭のアイクマン氏は、瓜哇に於ける牢獄の醫官であつて、その地に、脚氣病は、到處に流行し居るのである。彼れは、その病院の掃溜に養はれてゐる鶏が、病院の脚氣病者と同様の徴候を現はして死せるのを見た。彼れは、また、その死せる鶏を解剖して見た時に、表走神經の甚だしく侵害せられ居るのを發見した。これに暗示を受けたる彼れは、若き鶏や鳩によりて、組織的の試験を進め、(A)の試験では粗皮を被れる米を、(B)の試験では粗皮を除却したものを、更に(C)の試験では完全に精白せる米を供給したのである。米を白にて搗く時に、皮膜や表部の澱粉

層や胞芽やが除却せらることは、前述の通りである。アイクマンの得たる結果は、精白せる米、即ち、皮膜を除却せるものは、其神経系に、一種の退化を招致せる事を確めた。而して、それは恐くは、人間の脚氣と同一のものであらうと説明した。然れど、彼れは、脚氣病原の精白米にあることも、更に、これを玄米によりて豫防し得ることも、正確に説明し得なかつたのである。其後、色々の學者によりて脚氣を豫防し得るの物質は、米の芽胞に集中し居ることが證明せられた。而して、それ等の物質は、米を精白する時に、容易に、除却せらるゝものである。吾々が、精白米を手に取りて見る時に、其一端に小陥を發見するのである。而して、それが、抑も、芽胞の存在してゐた所なのである。彼のシャウマン氏の如きは、この脚氣病は、特種の食物を攝取するより生ずる中毒症であるや否やを確めんが爲めに、色々とその病氣に罹れる動物を試験し、更に進んで、解剖したのであるが、それによりて、遂に、何物をも見出すことが出来なかつた。更に、彼れは、病者の尿水を検査して見たが、それにも、亦、何等の毒素を認め得なかつたのである。遂に、彼れは、脚氣病原は、精白せんが爲めに穀粒より除却せらるゝ有機燐の化合物の缺乏が、その重因であることを説明した。更に、シャウマン氏は、食物中の脚氣病を豫防し得るの抗素は、有機燐の化合物であることを確めた。而して、彼れは、これに對してアクチヴェターの名稱を與

へたのである。鈴木梅太郎博士はこれをオリザニンと命名して、今や廣く坊間に發賣してゐる。又、フンク氏はこれにヅキタミンの名稱を冠せしめたのである。コールブルユツケ氏の如きは、斯病の發作は、澱粉過剰の結果に外ならないと主張した。而して、これ等の食物は、腸内の醱酵性バクテリアの生長を助長し、其生ずる酸類が自家中毒を起し、他の體內に於ける普通のバクテリア相をも殲滅するものと考へた。故に、彼れは、脚氣病に向つて、醱酵病の名稱を與へたのである。此醱酵性バクテリアは、米や其他の澱粉中にありて、酢酸の如き酸類を製造するバクテリアの如きものであるまいかと想像せられてゐる。其他、遊離酢酸を含有する食物も、亦、斯病を發生せしむるものなることが假定せられてゐる。これと同時に、ホルスト氏やフレイリヒ氏の如きは、穀物を給與したる豚鼠に壞血病を生ずるが、これに反して、甘藍や胡蘿蔔や蒲公英を含有せる食物を給與したるものが、斯病に罹らないことを認めてゐる。尤も、これが爲めに、その三割の體量を減じたことも知れてゐる。但し、これ等の蔬菜類は、壞血病に罹れる動物に、攝取せしむれば、容易に、其病氣が治るのである。蔬菜類は、新鮮なるものを要し、煮熟したり、乾燥したるものは、斯病に對して、何等の効果が無いのである。蓋し、その料理中、若くは乾燥中に、その重要な成分が、破壊せらるゝものと見える。印度人の水腫病や脚氣に罹るのは、多く、饑

饑饉時や戦争の荒恐の時である。千八百七十六七年、印度の饑饉時に當り、その地の、八ヶ所に渡りての、調査によりて見れば、死者の十分の九は、何れも、水腫病や赤痢や下痢や其他の衰弱病に罹つてゐる。その當時、當局者は、その人間の體量に比例して、その要する熱の單位、即ちカロリー(一キログラムの水を攝氏の零度より一度迄、温むるに要する熱量)によりて、病人に食物を供給したのである。所が、それが、全く失敗に終つたのは、畢竟するに、彼等の多くが、水腫病に罹り、實際、肥満してゐたからである。支那の饑饉時には、雜草の種子や其他、總ゆる野生植物の綠色なる部分を食するが爲めに生ずるの水腫病を、バターソン氏は綠水腫病と稱してゐる。千九百十七年、メキシコの軍隊で、水腫病が発生した。これ、蓋し、食物の缺乏を來し、甜菜ハロレンヤクや苜蓿ハロレンヤクを常食となしたからである。獨逸が、今回の大戦争に當り、其食糧を封鎖せられた時にも、亦、同様の病氣が到る處に発生した。獨逸の哺乳兒が、加工せる牛乳や穀汁を混ぜる牛乳を飲まされし時にも、亦、同様の病氣に罹つたと、ワグナー氏は報告してゐる。ポッター氏は、大麥の汁液を飲せた子供にも、亦、同様の病氣の発生した事を説明してゐる。チエルニー氏やケラー氏は、先年、穀粉多量の爲めに、發生するの營養不良を、「穀粉營養害」と稱して發表した。同時に、多量に米食するの人間も、亦、同様の病氣に罹ることを暗示したのである。即ち、現時

のこれ等の穀類には、人類の營養に重要な礦物性の物質を缺乏、ヅキタミン(A)、(B)、(C)の三種が、缺乏し居るのである。水腫病は、殊に、戦時や饑饉時に起るのであるが、同時に、食物の不完全なる牢獄内の囚人や貧乏人の家族や其他、乞食の社會に於て、其發生を見るのである。ホルスト氏の記載する處によりて見るに、クリミア戦争に際し、流行せる水腫病は、一種の壞血病であつたのである。これは、年々歳々、ニュファウンドランドの沿岸に漁獵する佛國の漁夫にも、亦、發生して居る。これは、又、十九世紀の前半に、英米の囚人間にも、甚だしく、發生したのである。所が、彼等が、人間らしい待遇を受ける様になつてからは、その病氣は、頓に減滅したのである。これ、蓋し、不完全なる食物に歸するものであつて、即ち、營養を缺如せる爲めの水腫病に外ならないのである。ブヂンスキーやチエルコウスキ氏の如きは、ポーランド戦争の際、其饑饉の爲めに、水腫病に罹れる百以上の擧例を記載して居るが、それ等の何れもが、食物の缺乏に歸因してゐる。而して、食物の缺乏より起る水腫病の何れも、脚氣の夫れに酷似し居る。又、水腫病には、脚氣や壞血病やが併發する場合が多いので、何れも食物の缺乏、殊に貧弱なる蛋白質が、其重因をなせることが知れた。然れど、又、蛋白質の少なき水分の多き食物も、同時に、水腫病を助長することが認められてゐる。マーヴァ氏は、製糖所で勞働する牛や馬が、甘蔗の殘物

を食ひ、水腫病に罹つた事實を記載してゐる。製糖時の甜菜糖や酒精蒸溜の殘物を多量に食せしめた牛も、亦、水腫病に罹ることが記載せられてある。デントンやコーマン氏は、鼠に水分多き蛋白質の少なき食物を與へて、水腫病を發生せしめてゐる。同時に、若き鼠に、胡蘿蔔を主食として供給したる場合にも、亦、斯病の發生を認めてゐる。コーマン氏は、更に、胡蘿蔔の外に、色々と、純化せる食物を與へて、試験した結果、何れの場合に於ても、蛋白質の不完全にして、水分の多き食物の場合に於てのみ、水腫病の發生することを認めてゐる。それは、人間の戦時や饑饉時に起る水腫病と同様の條件の下に、發生することが知れたのである。乾濕、其當を得ないが爲めに起る饑饉時にありては、食物の缺乏の爲めに、先づ第一に動物は、その食を失ひて撲殺せられ、綠なす植物は絶対に其影を見せないが爲めに、人は穀物や其他の種子のみによりて、その生命を支へ行かんとする。元來、穀實は吾々の食物の内でも、最も貯藏の出来るもので、二十數年間は大丈夫、その生活力を失はないでゐる。殊に、米が主要なる食物となると、その蛋白質の貧弱なる爲めに、水腫病の發生することは、既に前述の通りであつて、その支那や印度に最も流行し居ることによりても知れる。戦争によりて饑饉を誘發したる場合には、麥や其他の種子は、専ら麵麩に製造せられ、肉の如きは缺乏を告げ、其價格も昇騰する。これ、蓋し、多くの農家が

兵役に召集せられ、その農土を去るが爲めである。而して、都市の住民は、蛋白質の少なき馬鈴薯や水分の多き根菜類や其他、少量の穀類に満足せざるを得ないのである。この時、肉類や牛乳の如きは、先づ得らるゝの望がない。爰に於て乎、前述の如く、水腫病の流行するのも當然の歸着である。

以上、述べ來つたこれ等の事實は、吾々、大和民族の主食として精白せる米の、如何に、貧弱なるかを一層、明瞭にならしめんが爲めに述べたのである。

昔時、大に文明を唱へ來つた印度が、今日の如く退化し居るのは、専ら、その精白せる米食に基くもので、此國民が、最も、文明人の退化せる標本模型であると稱せられてゐる。佛教の教義は、肉食を禁じて居るので、ヅキタミンの缺乏は、無論のことであるが、それによりて腦の發達を増進する何物かを缺いてゐるらしい。歴史を緝けば、支那も、嘗ては、文明の先驅者であつた。然るに、今や、文明の第一線より置き去りになつてゐる。而して、その國民も亦、米食を以て主食としてゐる。瓜哇の人間も、米食の爲めに退化した模型の一人種とせられてゐる。彼等は年々歳々、生産する千數百萬石の米も、今や、不足を告げ、爲めに、外國より少なからざる米を輸入してゐる。米を主食とせる南洋や東洋の民族は、何れも、歐米の人種と、其の文明の歩武を

等しくし能はざるを看破した米國の學者は、米食人種は將來、恐るゝに足らないと云ふやうになつて來た。元來、精白せる米は、前述の如く、單に澱粉性の炭水化物を供給するのみなるが故に、専ら、カロリーを生じ、體温を保つに過ぎない。而して、人間の體温は、攝氏三十七度以下で、それ以上の體温は全く不必要なのである。故に、幾等、多くの白米を食つても、其カロリーを生ずる以上に、何等の榮食とはならない。否な、一升飯を平時、食する様な人間の頭は、餘り働かないで、寧ろ、睡氣に襲はるゝのである。人は、生きてゐる丈なれば、精白米の如き澱粉許りでも差支はない。然れど、人は活動すべき使命を有してゐる最高の動物である。人は何時、病氣に罹るか知れないから、これに對して常に抵抗力を養ひ置くの必要がある。而して、此抵抗力の重なるものは、體内に蓄積せらるゝ脂肪であつて、而も、その重なる根原は、植物性ではなく動物性の脂肪にある。殊に肝油や牛乳や牛酪に含有する脂肪が、その最も優秀なるものと見られる。

中央アフリカに、ケニアと稱する一蠻族が住してゐるが、彼等は、素裸で、前をも隠さない劣等の一人種である。而して、彼等の主たる常食は、バナナである。此人種は、今や、英國の保護の下にあつて、珈琲や綿やバナナを栽培してゐる。所が、近來、英國の惡童が、彼等の社會に、

梅毒を感染せしめた。このバナナのみを食するケニア人種は、梅毒に對しては、不思議な程、無抵抗力で、今や續々、それが爲めに、死滅しつゝある。これが爲めに、英國の當局者は、大に驚き、目下、其救濟策を講じつゝある。平時、粗食せる人間の疾病に罹りたる場合に、その抵抗力のなきことは、周知の事實である。而して、吾々は、更に、その好例をこのケニアの蠻人に於て見るのである。

一昨々年、米國に於ける乳牛の共進會に於て、一等の金牌を贏ち得たるものは、ミネアポリスの一畜産家であつた。その人の説明する所によれば、自分は英國よりゲロンジ種の一乳牛を輸入し、その後、三年間は絶えず、その牛の飼養に従事し、或はそれに最も榮養分に當めるインシレツチや其他の食物を與へ、それに適當なる運動を取らしめ、牛舎は清潔に保ち、毎日、其重量を計りて、遂に今日の成績を挙げ得たのである。而して、その英國産の夫れよりも更に優秀なる乳牛を生産せしめ得たのは、一に、その食物の如何にあると高唱した。多く輸入せられたる家畜は、その本國にありての當時よりも、更に、退化するのが原則である。如何に、改良せられたる家畜も、一度、他人の手に渡れば、間もなく、多くは、退化する。これ、蓋し、その食糧の如何によるものであると、彼れは云ふてゐる。

十數年前、米國加奈太のプリンス、エドワード島より、我が樺太に、銀狐を輸入したが、今や彼等の子孫は、大に退化してゐる。或は、綿羊の如き、牛馬豚の如き、或はその他家禽の如き、何れも、その退化の現象を示し居る。これ、蓋し、その食物の貧弱なるが爲めであらう。

世界人間の起原は、瓜哇の猿人ピテカントロプスに發してゐて、その一原説が、今や優勢になつてゐる。即ち、今日の人間の白色や黄色や銅色や黒色の諸色は、如何にして變化し、而して今日、吾々が見る様な雑多の形態を現はし來つたのであらうか。從來、その色の如きは、専ら、氣候の如何に依るものとせられてゐた。所が、白色人種が、亞弗利加の熱帶國にありて、如何に黒色に變色しても、一度、歐米の郷土に歸れば、又復舊の白色に還元する。歐米に長時、住居せる東洋人は、白人に近き體色に變化するが、その郷土の東洋に還れば、又復、元の黄色となる。これに反して、歐米人が、日本や支那にあつて、長時、米食でもして居れば、何れも、黄色を帯びて來る。彼の歐米の氣候の如きは、我が國の夫れと、何等、大差はない。然らば、その食物が大に、その體色を左右し居ることが疑ひない。甚だ尾籠ではあるが、米食する東洋人は、黄色の、多量の、糞便を排泄するが、洋食するものは、大に、その色を異にし、多くは、褐色であつて、その分量も、亦、少ないのである。秋季、黄色の南瓜のみを食するの農家は、更に、一層、皮膚

に黄色を帯びて來る。人が病氣に罹ると、何れも、黄色を帯び來るが、殊に黄疽病に侵害せられた場合に、文字通りの黄色となる。これは、啻に、白色人種に於て黄色を帯び來るのみならず、銅色人種にも亦、然りである。黄色人種はその黄色なる皮膚を有する事は、その本來の體色にあらずして、それが専ら、食物より招致し居ることが近來になつて知れて來た。而して、吾々は、今日、その榮養の良好なる東洋人の、決して西洋人に劣らざるの體色を有して居るのを面の當り見るのである。即ち、東洋人の黄色は、前述の水腫病や壞血病や脚氣病の様に、蛋白質の貧弱なる精白米を主食とせるの結果、誘發せられたる慢性の中毒症であるまいかと見らるゝのである。抑も、皮膚の黄色は、黄疽病者の夫れと同様に、病人の固有色であり、榮養不良に陥り居るか否かを知るのバロメーターである。貧弱なる食物の攝取により、特別なる病氣を發生せしめ得る今日の動物實驗の結果は、誰れも能く、否定し得ないのである。多量の榮養分を攝取するの日本人が、紅顔の健康色を呈し、蛋白質物に乏しき精白米を單食せる下層人間の黄色なるを見て、吾々は、今日、大和民族の黄色人種でなき事を知るのである。否な、地球上に、先天的の黄色人種のある筈がないのである。而も、吾々は自ら東洋人種と呼び、黄色人種と稱してゐる。抑も、先天的の東洋人種は何處にあるか。吾々の祖先は、三千年前、我が大和島根に移住し來つた一民族で

ないか。その黄色は、先天的にもあらず、また運命の緒繩にも縛られてゐない。その黄色の皮膚が精白米の中毒症なるを知るに及んで、吾々は、所謂黄色人種の運命を脱したことを衷心より喜ぶものである。

歐米人種の血色の良き、その巨大の體格を見る時に、吾々は、東洋人や南洋人の、如何にも、貧弱なるを知るのである。否、吾々はその家畜の如きに於ても、亦、其然るを見るのである。

今や、我が國では、食糧問題や人口問題が調査せられんとして居る。然らば、百尺竿頭、更に、一步を進めて、この米の營養問題やその他、民族に好適せる食物の價值問題を根本的に研究しては如何である。若し、夫れ、精白米を主とする食物が、人類の健康に不利であり、人間の腦力を發達せしむるに不適當でありとすれば、吾々は、他に、何食を主とすべきかを、大に、研究せねばならない。歐米人の腦力の優越せる事は、既に、その發明品やその他、研究者の能力に因つて知ることが出来る。歐米の舶來品は、何れも、優良にして、到底、我が東洋人の品物に比すべくもない。吾が民族は、今や、世界の一強國なりと云ふ。然れど、その容貌にしても、その體軀にしても、その能力にしても、如何に慾目を以て見ても、歐米人のそれ等に勝るとは云へまい。

今より約、三千年以前に、ベルシヤ灣近邊に住してゐた彼の洪牙利人種は、その頃、中歐に移

住したが爲めに、今や、西歐人種と同様に、何れも、白色になつてゐる。彼等は、吾々と同様に、所謂、黄色人種と呼ばれあるツラネン系のモンゴルである。彼等は、五世紀頃には、ハンス若くはマジヤルと呼ばれ、一時、歐洲を風靡した有名の歴史を有つてゐる。吾が祖先も、嘗ては偉大の體軀を備へ、優秀の頭腦を有つて居つたものらしい。所が、支那や印度と同様に、肉食の習慣が廢れ、同時に、主として精白米やその他の菜食を攝食する様になつたので、その體軀に於ても、その頭腦に於ても、祖先より退化したものらしい。現に、支那や印度には、その祖先に優秀なる人間の居つたことが歴史的に知れてゐる。今日、日本人の支那人や印度人よりも稍々、優秀なる腦力を有し居る所以のものは、四面が海であつて、専ら、魚介より蛋白質を攝取するの機會が多かつたからであらう。随つて、その營養に必要な、而も、ヅキタミンを含有する幾多の食物が得られたからであらう。然れど、今日、魚類や介類を混加したる米食では、到底完全なる食物が得られないのである。歐米人は、餘程、昔より畜産食物に重きを置き、殊に牛乳やバターやその他、畜産的の食物を多く攝取し來つたのである。その健康は、兎に角、これ等の食物によりて、彼等の頭腦も、亦、優秀なる領域に達し得たものらしい。燃料の如何によりて汽車や汽船の速力に大差あるが如く、人類の生命の燃料たる食物の如何によりて、その能率に差異あるは無論

である。これは、動物に於てのみならず、植物に於ても、亦、然りである。彼の天南星の植物は、沃地に生長すれば女性となり、瘠地に移植すれば、男性に變化する。彼の蜜蜂の生れたての子供に、滋養分に富める樹脂や、その他、濃厚なる食物を給すれば、生殖器の發達せる女王が出来るが、花蜜や花粉を單食せしめた子供は、假令、成長して働蜂となつても、その生殖器は退化して、能く、將來の女王や働蜂卵を産み得ないのである。生物の體質を變化せしむべき要素は、幾等もあるが、而も、その食物が、最も、重要な場面を占めてゐる。生物を變化せしむべき條件は、何れも、何んかのショックである。而して食物は、そのショックの内で、最も、重要なものであるらしい。彼の狐は、山野にありては、八年位しか壽命を有つてゐないが、滋養分に富める食物を攝取する養狐は、十數年も生きてゐる。今日、家畜の壽命も、その食物の如何によりて、大に延長し得る様になつた。蚕藝に利用せらるゝ蚕は、その食物の如何によりて、二ケ年間も生きてゐる。人間も、貧すれば鈍するで、貧弱なる食物を攝取し居るものや寄生蟲に侵害せられあるものは、その能力は、兎に角、何れも短命である。故に長命を保ち、健康を贏ち得んと欲せば、宜しく、榮養に富める食物を攝取せざるを得ない。殊に、平時、滋養分に富める食物を攝取し居るものは、その能力に於て、偉大の差がある。而して、神経系の退化を誘發する様な、精白米の

主食は、民族としても、今日、大に、研究せらるべきである。

一方、經濟的にこの米食問題を考察するときは、民族としても大に、研究すべきものがある。今日の文明は、總てがスピードである。恐くは、何事によらず、今日、スピードを標榜せざる文明は、何處にもない。これが爲めに、食糧は、多く罐詰を利用する用になつて來た。これなれば、何時でも、直ちに、食膳に供することが出来る。日本の如き米食國にありては、殊に、朝夕、温かき飯を食はんと欲する人の家庭にありては、夫れこそ、時の經濟に於て、非常なるハンディキヤップがある。

料理の爲めに、下婢や下男を雇備する様な時代は過ぎ去つて、今日、家庭の主婦が、他人の手を借りないで、電氣や瓦斯や水道やを活用して、單獨に、何物をも料理する様な世の中となつた。今日の文明は、單に生存する文ではなく、更に、活動が本位となり、それが愉快であり、道樂でもある様になつて來た。これが爲めに、二食主義が行はれ、料理や食事に長時間を費す様な食物は、餘り歓迎せられなくなつた。今日、洋食の流行する所以のものは、則ち、これが爲めである。支那や日本にはまだあるが、夜半迄、飲み食ひする様な宴會は、今や世界の先進國の何處にもない。殊に朝より夕に到る迄、活動するの人間は、パン食や罐詰によりて、時を最も經濟的に利用

せんとする。著者も、亦、二食主義の一人であるが、これが爲めに一年三百六十五日、時の經濟に多大の利益がある。更に吾々が今日、飯食よりもパン食をなす所以のものは、これに附隨する最も重要な營養分、即ちバタを攝食するの機會があるからである。著者は嘗て世界の米食を主とする人種は、斃て、滅亡すると云ふ米國人の言を紹介した時に、或る醫者は、それを以て愚論となし、著者を大に罵倒したことがある。それは、馬鹿や懶巧を以て仰する様な簡單の問題でない。百尺竿頭更に一步を進めて、世界最大國の一とならんが爲めに、吾々は、新知識を集め、更に、その研究の歩武を進めねばならないのである。吾々には何故に世界の人間を驚愕せしむるやうな大發見や、大發明が現はれ来らないのであらうか。米國には、何故に、巨萬の富が出來、吾々には、何故に、その富が、出來ないのであらうか。吾々は、その智力に於ても、其體力に於ても、亦、遜色なしと曰へないではないか。米國には、エヂソンやフォードやフランクリンが現はれ、英國には、ニュートンやフアラデイやマックスヴェルの様な、大發明家が現はれてゐる。西歐には、更に、ラボジエーやヘルムホルツの如き大化學者が現はれてゐる。昔時、ソクラテースや、アリストートルや、プラトローを輩出せしめた希臘が、今日、何故に、見るべきの人間を出し得ないのであらうか。昔時の文明を誇る支那や印度が、今日、何故に、退化せる文明人の模型と

なり居るのであらうか。瓜哇は、人類の搖籃地であると曰はれるにも拘はらず、何故に、文明の歩武より、今や、置き去りになり居るのであらうか。東洋のメソポタミアやチギリスやユーフラチスが、抑も、文明の發源地ではないか。而も、その面影は、今や、何處にあるかである。吾が大和民族も亦、嘗ては、英雄を生じ、豪傑を出したではないか。佛教の到來と共に、肉食を禁じた民族は、今や、何れも、退化し居るのを見るのである。その米食を主とする民族が、等しく、退化せる文明人のタイプだと、米國の一部の學者は云うてゐる。此問題は、東洋民族の、漫然として、看過すべき、所謂、某醫の愚論として看過すべきの小問題ではないのである。蓋し、吾が大和民族の將來を憂慮し、世界に活躍せんと欲するものは、他山の石として、それを拱手傍觀すべきものではあるまい。文明は波動の如く上下し、また、進退してゐる。世には千載の文明なく、エヂプトやバビロンや羅馬の文明は、今や、何處にあるかである。英米の兩大國は、今や、文明の第一線に立ち、天下を睥睨してゐるが、彼等も、亦、必ずしも永遠の勝利者ではあるまい。萬物は、總て、流轉してその止まる所を知らない。如何に、精緻なる巧妙さで建設せられた殿堂でも、やがて、その輪奐の至美宏壯の境に達すれば、則ち、崩壊し始めるのである。吾々、大和民族の平和の夢を貪りつゝある間に、歐米の先進國は、既に、競争場裡にスタートを切り、先發し

たのである。吾人は、今や、ヘヅキーを掛け、これに追及せんと努力奮闘しつゝあるのである。同等の体力や同等の智力では、到底、彼等に追及し得ないことは、三尺の兒童にも、能く知れてゐる。然らば、如何なる方法によりて彼等に追及し、而も猶、一躍して彼等を追ひ越し得るかの問題になると、それは、我が同胞と共に、大に研究せんと欲するものである。それが爲めに、吾人は、今や、眞剣を要する時期に際會してゐるのである。これが爲めに、我が同胞に冀望するものは、幾等もあるが、何を差し措いても、生命の燃料、即ち能力や活動の原動力、換言すれば、食物の研究が第一たるを知るのである。米國は、前述の如く、既に此問題では先發してゐる。米食は、我が同胞には、急に廢止し得られないであらうが、時間的にも、經濟的にも、否、能率的にも、米食の不利なることが知れた以上は、吾人はこれを弊履の如く捨つるに敢て吝ならざるものである。遮莫、吾々の農民がこれによりて泥鰌的の勞働より解放せらるゝのである。而して、その米作の爲めに、従來、用ひ來つた水は、世界無比の動力に轉化することが出来るのである。若し夫れ、大規模の農業機械を應用し、大規模に農作物が栽培せらるゝ様になれば、それこそ我が民族の總ゆる經濟に於て、どれ丈の逕庭があるか知れない。これが爲めに、多年、争闘を續け來つた小作問題も亦容易に解決し得らるゝであらう。知識は征服であり豫見であり、豫見はまた力でもある。

七、生存競争と相互扶助

序論—體内の生存競争—同種間の生存競争—異種間の生存競争—

團體間の生存競争—相互扶助

序 論

生存競争と相互扶助と同格のものである様に思ひ居るものがあるが、夫れは大なる誤りである。生物には二つの缺くべからざるものがある。即ち一は食物を得ること、他は子孫を繁殖することである。

食物は空氣や水の様は無償にて吾々の口には入つて來ない。假令、武陵桃源の甘露の滴る昔時にありても、其獲得に對して、相當の競争の起つたことは疑はれない。又、生物の性慾は強發の本能であつて、其壓迫に對しては、誰れも能く勝ち得ないのである。故に、世には、戀愛は死よりも強しと云ふ様な諺がある。己れの會心の妻を嫁らんと欲せば、必ずや、そこに相當の競争を要する。

此二つの緊急缺くべからざるの條件のある爲めに、生物には常に競争が起るのである。即ち、生物の生存には、此二つのものが、總體の要件である。而して、其食物を得る爲めに、個體が同盟する事がある。此場合、相互扶助が、其目的を達するに最も有力なる手段である。會心の妻を嫁るにも、友の扶を得れば、更に一層、其目的を達し易い。其食物を奪はるゝ時にも、其妻を掠

めらるゝ際にも、多数のものが、同盟して得れば、容易に侵害せらるゝことがない。故に、相互扶助は、生存競争の手段であつて、蓋し、攻守同盟に外ならないのである。而して生存競争は、有意識にも、無意識にも行はれてゐる。

一、体内の生存競争。

生物の体内には、赤血球と白血球の二種が存在してゐて、前者は、専ら、滋養分を運搬し、體の總ての機關に配布し、また其有する酸素によりて酸化作用を起し、老廢物を取り除いて呉れる。而して、其體温は、専ら、その酸化作用によりて起るものである。然るに、後者の白血球となると、單細胞の集合であつて、体内の巡警を司り、戦闘士と云つた様な、防禦的の役目を勤めて呉れる。即ち、体内に、病原たるバクテリアや原形動物が侵入し來れば、白血球は、直ちに、其局部に到り、それ等食つて仕舞ふ。若し、バクテリアや原形動物の繁殖が強く、白血球がこれと戦つて倒れた場合には、夫れを宿せる生物の死が起る。體の一部に、此戦闘の行はれる時、そこに熱が生ずる。その熱は、白血球の急を聞いて其戦場に蟻集するが爲めに起るのそれである。若し、敵軍が優勢の場合には、白血球の死骸が累々として横はり、そこに、化膿の現象が起る。併しながら、一度、バクテリアを食つた白血球は、更に、一層の力を養ひ來るが故に、其後、強力

のバクテリアや原形動物やが侵入し來つても、容易に、それを捕食する。免疫性とは、則ち、此事實を云ふのである。吾々の体内には、絶えず、色々のバクテリアや原形動物が、口や鼻を通して侵入し來る。これを防禦、攻撃するの役目は、専ら、白血球が遂行して呉れる。然れど、吾々は、毫も、夫れを自覺してないのである。例へば、牛の瘡瘡を人に移植すると、人間の白血球はその弱い病原體を食つて、益々、強くなる。次ぎに強性の瘡瘡の病原體が侵入し來つても、其白血球に食ひ殺され、毫も、其病氣に罹らないのである。血精療法は、この理由に基き、應用せられたものである。バクテリアや其他の病原を食つた經驗のある強き白血球を病人の血液内に注射し、治療することがある。これは、恰も、援軍の力によりて勝利を得るのと、同じ理由である。元來、白血球は、同種屬の赤血球に對しては沈澱を生ぜぬが、異種屬の赤血球に對しては一種の沈澱を生ずる。子供の病氣を救ふ爲めに、親の血液を取つて、遠心分法によつて、白血球を分離し、これを注射すれば、重患者も亦、全治する事がある。尤も親の血でも、同種屬のものでないものがあるから、注意を要する。

斯くの如く、生物の体内では、白血球が戦闘士となりて、常に、侵入し來る病原體を防禦し、これと争闘し、敗れたものが死滅する。此戦争は無意識のものであつて、生物は病原體と、戦は

ざれば倒されるのである。人が銃剣を以て狼や虎と戦ふ様に、病原體に對して白血球の戦はざる場合には、生物は殺されて仕舞ふ。人が衰弱して、無抵抗になれば、猛獸に殺されるが如く、白血球も亦、衰弱すれば、病原體を食ひ得ないで、其餌食となつて仕舞ふ。こんな無意識の生存競争は、人類の社會にも亦、多々あるのである。

眼前の敵を倒す丈が、生存への競争ではない。クエーカ宗や印度教の様に、無抵抗の教義を有するものもあるが、これは、蹋踏せる範圍に於ける夫れであつて、蚊や蚤に向つても、無抵抗と云ふのではあるまい。

二、同種間の生存競争。

生物は、同種間の競争によつて進歩し、異種間の競争によりて、其興廢が定まる。今、同種類動物が、一定の場所で、同様の生殖をなし、同様の住居をなし、同様の食物を求めらば、必ず、そこに、争鬭の起る事は、當然のことである。鼠一匹の住へる場所に、十匹もの鼠が住すれば、無論、九匹のものが死に絶えて、一匹の強きもののみが生き残る事になる。其内で、少したりとも、優秀の機關を具へ、好適せる環境に生れたものがあれば、他を壓して優勝者の地位に立つことになる。下等動物にありては、先づ本能生活であるから、左程の経験や教育を要しない

が、人間になると、多く、腦力の競争であるから、経験を積み、教育を受け、奮闘せざれば、直ちに、落伍者となるのである。これも亦一種の生存への競争である。今日の社會は、個人の安寧を法律的に保障して呉れる。故に、下等動物にある様な、他人の食物を掠めたり、其相手の交配を奪ふ様な事は、無論、犯罪である。腦力的の暴行は、野蠻時代の産物であつて、これを行ふのは、今や、法律や社會の制裁を受ける事になる。低能者や病者や其他、何か缺陷のある人間は、到底、競争場裡に立つ事が出来ない。下等動物にありては、「力は正義」であり、強者は弱者を食ひ、弱者は強者に食はるゝことになる。此場合、權利も義務もあつたものではない。畢竟するに殺された者が、殺され損だ。故に動物は、食はない様に、殺されない様に、常に注意し、苦しき経験を積まざるを得ない。人間社會にありては、今日、そんな恐怖は、薄らいで來たが、祖先の蒙昧時代には、其競争は、恰も下等動物に於て、見る様なものがあつたに違ひない。彼等は、其生命を保全する爲めに、非常なる注意を拂つたのであらう。これが爲めに、其體力は、極度に鍛へられ、その腕力は、大に練磨せられたのである。此體力や腕力の萬能なる封建時代には、腕力的の豪傑が輩出した。今日の聖代に、斯くの如き、豪傑の現はれないのは、蓋し、一は、社會が其必要を認めざるが故であらう。今日の社會は、假令、體力を犠牲にしても猶、その腦力を發

達せしめんとする傾きがある。これが、爲めに、過度の勉強により、神経衰弱に陥る者が少なくない。これが爲めに今日、體育にも重きを置く様になつて來た。即ち、如何に、頭腦明晰のものでも、人間は動物の一であるが爲めに、動物性の體格の必要なる事が知れて來た。今日の文明は、机上の空論では駄目だ。これを應用して、始めて、價値があるのである。吾人は、これを實行する爲めに、強健の體格を要する。今日の労働者も亦、その腦力に正比例をなして、其能率を擧げる様になつて來た。即ち、現今の労働は、大に、分業化し、機械を使用する様になつたが爲めに、馬車馬の夫れでは、何等、重要な活動が出来ないのである。今日の文明は、スピードの夫れである。即ち、陸には自動車があり、海にはモーターボートがあり、空には飛行機がある。これ等は何れも腦力の發露である。然れど、又、これを運轉するものには、體力を要する。而も、體力と腦力とが相待つて、今日の文明を築き上げたのである。

ネグリーの自進説の如く、大凡生物は各自、完全に到達せんが爲めに努力するの性能を有してゐる。然れど、生存競争あるが爲めに、それ文、此社會は進歩したのである。これが、生物を駆つて、益々、進歩發達せしむる拍車となり、刺戟となるのである。此生存競争を嫌忌し、無抵抗の社會に隱遁せんと欲するものは則ち、落伍者である。人類は、アミーバの時代より、今日迄、

連綿として、此生存競争を繼續し來り、現代の文明を招致したのである。若し、生存競争を嫌忌するものがあれば、更に、アミーバの昔に立ち歸り、其進化をやり直す外はない。而して、刺戟なき、競争なき社會の生物は、條蟲や蠅の如く、眼も鼻も脚もなき動物に退化することを忘れてはならない。

吾人は、今日、社會を其有りの儘に繼續するには、男女二人の子供にて充分である。然るに、人は、其實、數人以上の子供を産むの能力を有してゐる。條蟲は、約一億の卵子を産下するが、夫れも唯だ一匹の子供があれば今日の均衡が保てる。菌類の内でも、狐の茶袋は、數億の胞子を産するが、夫れでも、其一胞子があれば、其均衡が保たれて行く。然るに、何故に、斯く、必要以上の胞子や卵子が産出せらるゝのであらうか。若し、此等のものが、完全に成育して行けば、夫れこそ、地球上は直ちに立錐の餘地がなくなつて仕舞ふ。所が、生物界には、如上の事實や痕跡が、毫も認められない。寧ろ、今日の社會は、生物の減少を示して居るのである。文明の大都會に近き山野には、何れの動物も荒涼寂寞を告げんとして居る。河海の魚介は、大に、其數を減じて來た。今日にありては、寧ろ、親同數の子供でさへ成長し能はぬ世智辛き世の仲となつた。子供二人は、先づ、別として、殘餘の子供等は、多く死滅する様である。若し、生れた子供が、

寸分變はらぬ形態と能力とを有してゐれば、其生れる子供の成長は、先づ、偶然であらねばならぬ。其生れて來たものに、少したりとも、強弱の差異があれば、それこそ、強者は、他の同胞の弱者を出し抜いて成長し、随つて優秀の地位を占むることになる。吾々は、犬の子供に於て見るが如く、他の同胞を押し除けて親の乳房に吸ひ付く子供が、益々、肥滿して成長し、親の乳房に吸ひ付けないものが、益々、衰弱し、遂に、死滅するのを眼の當り見るのである。吾々は、運動競技に於て見るが如く、時に優秀者の、偶然にも、滑つて轉んだり、負傷したりする場合のある様に、自然界にも、亦、強健なるものゝ倒れたり、負傷したりするものゝあるを見るのである。早く飛び出した小鳥が鷹に掴まれ、翼脚の負傷して飛べなかつた同類のものが、其襲撃を免れたと云ふ様な例外もある。然れど、生物界では、強者は、稍々、絶對の能力を發揮してゐる。走るに拙なる兎は、狐の爲めに捕はれ、飛ぶに拙なる蟲は、雀の爲めに食はれて仕舞ふ。斯くの如く、同類間にありても、個體に同一なるものなきが爲めに、弱きものが死滅し、其内強きものが生き残る。畢竟、其處に生存競争の面白き意義がある。これは、敵に食はれない爲めの競争に於ても、敵を食ふ爲めの競争に於ても同一である。生物は、總て變化性のあるが爲めに、益々優秀なるものにと變化して行く。これが、即ち、ダーウキンの自然淘汰の現象であつて、これを説明するものが、即ち、生存競争である。

同種間の競争に於て、最も重要なものは、其環境である。古人は、英雄の起る所、地形よしと曰ふてゐるが、これも亦、此意味に於てである。如何に、優秀なる體力や腦力を有して居つても、北極の寒國にあつては、充分に、その實力を發揮する事が出来ない。如何に文明が發達して居つても、如何に人類が進歩して居つても、常に天災を被る様な地域では、到底、充分なる驥足を伸す事が出来ない。古來、雄大なる自然の風光を背景とする秀地に、人物が現はれて居る。然れど又、時運に際合せざれば、如何に英雄も豪傑も其偉業をなし得ないのである。刺戟なき武陵桃源の樂園や甘露の滴たるエデンの園に生れたものには、毫も、刺戟がないのである。過度の寒暑は人類の行動を阻害するが、さりとて、南方の、伊太利や地中海の沿岸に住する人間には、大なる刺戟がないのである。蓋し、人類の進化には、四季の變化が必要であるからである。南洋の如き年百、年中夏期なれば、到底、優秀の人間を造り得ない。今日の最も進歩せる文明人は、何れも、朝風凛烈たる冬季を有する國に住居してゐる。此自然と惡戰苦闘する所に、此自然を征服する所に、進歩と發達とがある。一二月の冬季を経過すれば、南風駘蕩の春を迎へ、花笑ひ、鳥歌ふの天地に、なるが、そこに人類の向上發展がある。クロボトキンの云ふ様な、五月頃に雪の降るツ

ランスバイカルの、平野には進化の餘地がないのである。春夏秋冬の四季を有する國土の人種こそ、自然の寵愛兒である。彼等は、獨り文明の先驅者となり、又指導者ともなり得るのである。最も競争の劇甚なる所に、最も大なる進歩や發達がある。鳥なき里の蝙蝠には、餘り、進歩や發達がないのである。これが生物の、今日迄、進歩し來つた唯一の過程でありとすれば、吾々は、此競争を忌避してはならない。此競争に直面することによりて、吾々は、益々、進化發達する。これを避くる者は、落伍者であり、此競争場裡に立つ能はざるものが、無能者である。此意味に於て、人類の成功者は、競争場裡の成功者であり、而して、寄生的の生活者が多く現はれれば來る程、民族の滅亡となるのである。

同種間に相互扶助の行はるゝ場合は、利益の交換の行はるゝ場合で、これは、多く、一夫一婦の動物間に於て行はれてゐる。然れど、其相互扶助は、依然として、生存競争の爲めの夫れであつて、決して生存競争の現象と同格のものではない。濠洲に、フィアと稱して、椋鳥に似た一種の鳥がある。其雄の嘴は、短かく尖つてゐて、九官鳥の夫れに能く似てゐる。所が、雌の方の嘴は其倍長もあつて、細く弓狀に彎曲して居る。元來、何れの動物も、雌雄の性質が異なりて、恰も、齒車の如く、互に食ひ合つて滑車の如く運轉するのである。所が、此鳥にありては、其性質

のみならず、嘴迄も相助け相扶けられる様になつてゐるから、其共同生活の必要なることは、爰にいふ迄もない。何れの場合に於ても、相互扶助は、その能力の交換を意味するもので、理論的には、其同等を前提とする。弱きものや無能なるものには、純然たる相互扶助はないのである。

富豪より、何れの形式に於ての、慈善を受くることは、一種の寄生行爲である。故なくして他人より物を貰ふの觀念は、ホツテントットの様な野蠻人には存在してゐない、物を交換する事は、金にせよ、物品にせよ、利益の交換であるが爲め、夫れは、相互扶助の行動である。故なくして他人より物を貰ふ事は、乞食の他人より物を貰ふのと何等、異なる所がない。

二個體が相扶け合つて利益を受くる場合に、第三者は損をして居る。蓋し、相互扶助の對象は、何れも二人間の利益や幸福であつて、第三者はこれが爲めに不利益を被る理になる。

人間には、他人はどうでも良い、自分さへ良ければ良いと云ふ本能を有つてゐる。他人に迷惑を掛けても、何とも思はないのが人間性である。蓋し、生物はその子孫を永遠に存続せんとするの本能を有してゐるからである。それが爲めに、第一、自身に生くるの必要がある。而して、其生きる爲めには、必ず、その食物を要する。而して、此食物は、今日にありては、競争によらざれば、決して得られないのである。自己の暖衣飽食は、他人の寒に泣き、饑に叫ぶことになる。自

己の蓄財は、他人の貧乏することになる。自己の享樂は、他人の困憊する事になる。自己の名譽や出世は、他人の嫉妬になり、自己の利益は、他人の損害となるのが人間の社會である。一定の富を有する社會に、自己にも好く、他人にも好いと云ふ理由のある筈はない。一方に、大厦高樓が出来れば、又、一方に、弊屋が現はれて来る。富者が益々、富を得れば、貧者は益々、其貧の度を増して行く。これを要するに、相互扶助は、お互に利益のある場合に起るものであつて、利益なる場合に、起るの理由はない。若し、夫れ、夫婦間の相互扶助となれば、それは、純然たる相互扶助ではなく、寧ろ、消極と積極とが一體となれる共通の夫れである。所謂、エレンケイの一個人が、二個人となりたるの感じを抱かしむるものが、夫婦のそれである。

三、異種間の生存競争。

異種にも、類似のものと、非常の差異を有するものがある。而して、近似の種類でなければ、同地にありても餘り競争は行はれない。これに反して、類似のものになると、同種間の夫れの様子に、其競争は中々烈しく、遂には強者が弱者を壓倒する事になる。彼の貧乏草が、農作物の種子に混じて、一度、吾が國に輸入せらるゝや、數年ならずして、大繁殖をなし、今では、如何なる僻村、僻地でも、それを、見ざる所はない。即ち、此雜草の繁殖力の強きが爲めに、他の雜草の

生存が出来なくなつたのである。嘗て、米國より苜蓿が我が國に輸入せらるゝや、日本在來の紫雲英の面影が、大に、薄くなつた。彼の樺は、日蔭で成長しない植物であるが、これに反して、樺は日蔭でも、日向でも能く成長する。故に同地にある樺を凌駕して、益々、其枝葉を繁茂せしめる。これが爲めに、樺は益々、日光を得んが爲めに、上へ上へと高くなり、遂に枯死するに到る。密林に於て、樹木の上に細く延び行くのは、畢竟、日光を得んが爲めの競争に外ならない。河畔の雜草の多き所に柳を植えれば、時ならずして、柳は廣く其枝葉を繁茂せしむるが爲めに獨り、日光を受け、下の雜草に日光を與へない。又、地中には廣く根を張りて、其養分を吸収するが爲めに、雜草の生活が困難になり、遂には、枯れて仕舞ふ。此柳と雜草とは、餘程、縁の遠き植物であり、其間に、何等、生存競争の起りさうにも見えないが、夫れは、蓋し、其生態が偶々一致せるが爲めに外ならない。

吾々は、酸素を得んが爲めに、常にバクテリアと競争してゐる。更に吾々は空氣中の酸素を吸収する爲めに、互に、競争せざるを得なくなつて來た。文明が進むに隨ひ、都市の擴大するに伴ひ、益々其競争の度が高まり行くのである。紐育の如き、今や、八百萬の人口を有する大都會になると、吾々は、日光を得んが爲めに、更に、大なる競争をなさざるを得ないのである。否な、

家屋も、これを建設する土地も、これに要する材料も、何れもが競争にあらざれば得られないのである。吾々の食物は、他人種や他動物の要する蛋白質や澱粉質や脂肪質と同様であるから、そこに、益々、競争の起るのは理の當然である。故に、異種間の競争によりて各種族の榮枯盛衰が分れて来る。畢竟、食物の豊饒なるものが何等の不安なしに生活し、其豊饒ならざるものが困憊して餓死することになる。民族と民族と相對峙する時に、どうしても肉弾的の頭數が必要である。夫れに食物が充實すれば、それこそ、優勝することになる。勝つたものが榮へ、敗けたものが衰へることは理の當然である。加ふるに、最も好適せる氣候や耕作に適せる農土や、其他、交通に便ある地形を具備するに於ては、蓋し、鬼に金棒である。斯くなれば、人は、常に、文明の頂點に立ちて、富國強兵の實を擧ぐる事が出来る。若し、夫れ、敗者の地位に立てば、不利なる環境に沈淪せざるを得ない。彼の臺灣に住する生蕃は、生存競争の敗者であるが爲めに、今や、山間僻地にたて籠り、總ゆる方面に消極的の生活をなしてゐる。生存競争の激烈でない北極に行けば、そこには、劣等人種のエスキモーが居住してゐる。彼等は、他民族と競争し得ざるが爲めに止むなく、居住してゐる。然しながら、山間僻地や北極や南極にありては、人生の意義ある活動は出来ない。而して、其天地は、蓋し劣敗者の天地でもある。

生物の住所には、山もあれば川もある。森もあれば、野原もある。砂地もあれば、又、泥炭地もある。其他、日蔭もあれば、日向もある。或は沃土と云ひ、硬地と云ひ、或は水中と云ひ、空中と云ひ、其生物の住所は、決して、狭くはない。優勝者が、假令、山に勝つても、必ずしも海で勝つとは限らない。河童も陸上に上げれば無能なるが如く、猿も水中にありては、何等、優秀の技能を現はし得ない。これが、抑も、動物分布の異なり居る所以で、而かも、それが、自然の面白き配劑である。彼の生蕃は、臺東の山間にありてこそ恐るべき獐猛の人種であるが、平地にありては何等、恐るべきものでない。生物界に生存競争の起る所以のものは、蓋し食物や其他、需要品の同一なるが爲めであるから、其食物を異にせる植物と動物との間に競争の起る理由はないのである。植物は、太陽の光線によりて、澱粉や蛋白質や砂糖や脂肪や其他の炭水化物を造つて呉れる。これに反して、動物は、其製造物を食つて成長し、死しては植物の肥料となり、又復、其輪環の過程を繰り返してゐる。畢竟、動植物は、相利の共棲をなし居るものであつて、生物界に於ける大なる意味の相互扶助である。鳩は、穀物を食ひ、郭公は蛄蜥を食ふが爲めに、競争を起し得ない。斯く、動物には、性質上、食草性と食肉性との別があるから、互に相犯することなく、長時、一ヶ所に棲息することが出来る。馬と兎との間に生存競争のなきが如く、鶴と目白と

の間に其地位を争ふの喧嘩のなきが如く、大小餘り差異のあるものにおいて、全く、相撲にならないと見えて、假令、其食物が同一であつても、其間に、直接の競争が起らないのである。故に、幾ら、雀が居つても、鳥の存在には何等の不便はない。如何に鹿が居つても、鼠の存在には、左程の不便がない。況んや、求食上、異なつた生物を混じて置けば、一定の区域内に、多数の生物が居られることになる。これ、恰も、一升の榊の中に芋を一杯容れても、豆なれば、まだ、幾らも、容れるの餘地のあるが如く、更に、其中に、粟粒なれば、一層、多くの數を容れ得るのと同じ理である。

近來、歐洲より伊太利種の蜜蜂が我が日本に輸入せられた。其蜜蜂は、多くの蜜を花間より採集するの性能を有し、其繁殖力も、亦一層、強きが爲めに、今日では、日本在來の蜜蜂を壓倒し、大に、其數を減少せしめた。これ、恰も、濠洲にて歐洲産の蜜蜂を輸入せしめた爲めに、在來種の年々歳々減じ行くのと同様である。著者の子供の時代に、褐色の大なる蜂ハチが仲々多かつた。處が、今日では、小形のチャバネゴキブリが歐洲より移動し來り、大繁殖をなして、大形のゴキブリを追放したと見え、後者は、甚だ稀となつた。昔時、歐洲に居つた鼠は、全部、黒鼠であつたが、今では、亞細亞産の鳶色鼠が移動し來り、遂に、其黒鼠は甚だ稀になつた。此鳶色鼠は、

餘程、強きものと見え、今では、何れの地方にも、繁殖してゐる。彼のニュージールランドの如きは、それが爲めに、在來種の鼠を全く驅逐して仕舞つたと曰はれて居る。又、明治十四、五年の頃、吾が日本犬の全部が耳の尖つた、今日のアイヌ犬と同様のものであつた。所が、外國より輸入せられた犬の爲めに、今では、在來の日本犬が、何處にも見られなくなつた。これは雜混の結果、優性な混血犬となり、遂に其地位を奪つたものと見える。今日、吾が國に純粹の日本犬の見られないのは、恰も、メキシコの住人が全部、混血兒であつて、純粹の土人のタイプの見られないのと同様である。

異種間の相互扶助になると、仲々、面白きものがある。相互扶助は、異種の動物が共同して普通の食物を得るの場合と、敵の近接を警戒する場合とに起るの現象であつて、これも亦、生存競争の手段に過ぎないのである。狼と狐とは平時、食物の競争をなしてゐるが、夫れでも、獲物を狩する時に、相合同することがある。即ち、兎や其他の小動物の平時、通行する道に狐が待ち伏せてゐて、狼が其獲物を追ひ込んで來る。平時等昵まない仲の悪しき人でも、利益の爲めに、共同して、他人を陥れ、其財産を掠奪せんが爲めに、共謀することがある。狐は、狼の爲めに、徒勞の働をなす様な馬鹿なものではないし、狼も亦、然りである。而して、其共同的の行動の起

るのは、必ず相互に利益のある場合に限られてゐる。他人に利益なき場合の行動に向つては、相互扶助の言語は當て嵌らないのである。故に、狼と狐と相共同して其獲物を狩する時に於てのみその異種間の相互扶助が行はるゝものと見て良い。

彼の四十雀の群中に、柄長や山雀等の小鳥を混じて居る。これは食物や習性の一致するより起つた偶然の共同生活であるが、これは、相方の求食に大なる便利があるに違ひない。彼の印度に産する朝鮮鶯に近きオリオールは、尾鳥の群に混じてゐる。これは相似たる羽色を有し、前者は後者を模倣してゐるが爲めに、同棲し居る方が有利であるに違ひない。これが爲めに、前者の方には有利であるが、後者の方には何等の利益がないのである。これなれば、無論、片利の共棲であつて、相互扶助の現象にはならない。濠洲には有名の三眼の蜥蜴が居つて、其巢穴に海燕やカイツブリの様な鳥を同棲せしめてゐる。此蜥蜴が穴を掘りて、其内部を擴げる場合に、宿主は、常に、その右方の室に居を占め、同居者を左の室に住まはしてゐる。不思議なことには、其鳥、自身と其子供等は、己れの巢に同棲せしむるが、他の同族の鳥が來れば、直ちに追ひ拂ふて仕舞ふ。時に己れの大頭を以て其穴を閉塞し、毫も、他動物の侵入を許さないのである。

北米にブレリドック(モルモットの一種)と稱する穴居の動物があるが、これは、一種、穴居

性の巢を同居せしめて居る。此穴には、時に、ガラ／＼蛇を同居さすこともある。又、時には、色々の鼠の宿をなすこともある。南米のブレリドックになると、狢猴や大形の蜥蜴を同棲せしめて居る。ガラ／＼蛇は、宿主に對して、平和の客であるが、それでも、時には、其子供を食ふので有害なる場合がある。彼等の生活は、利益を交換し居る相互扶助の關係にあるかも知れないが、それは、未だ、能く、知れてゐない。併しながら、ガラ／＼蛇の宿主の子供を食することは、確に、寄生であり、又、殺兒罪でもある。

北米にバンテオンと稱する一種の海鷲が居つて、其巢の内に色々の雀科の鳥に巢を造らしてゐる。時には、鷲にも、亦、其巢を造らすことがある。又、食蛇鷹の一種で、色々の小鳥に巢を造らしてやるものもある。これ等の小鳥は、鷲や鷹に保護せられて、親船に乗つた積りで、同棲し居るとは、又面白いではないか。鷲でも鷹でも、食肉性の鳥である、然るに、これ等の小鳥を捕食しないで、反つて、それ等を保護して居るの本能は、實に不可解である。鳥でも鷲や鷹の様な強大なるものになると、弱きを助ける様な性能があるのであるまいか。所謂、窮鳥懐に入れば獵夫もこれを捕へないと云ふ様な、義侠的本能がありやしないか。これは片利共棲であるや或は相互扶助の關係にあるやは、未だ判然してゐない。それとも、鷲や鷹は、これ等の小鳥を餌とな

し、これを漁らんが爲めに來る他鳥を捕食するのであるまいか。これは蟻が其巢中に蟋蟀蟋蟀の一種を養ひ居る様に、或は吾々が玩弄的に小猫や小犬を飼ひ居る様に、一種、娛樂的の共同生活であるかも知れない。

鳥と獸との相互扶助になると、更に面白きものがある。兎の居る所には多く鳧カウ(千鳥の一種)が居つて、其襲撃せんと潜み來る狐の存在を知らしてやる。彼れは、狐の到る處に追ひ行き、ビービーの高聲を發して、其存在を裏切る。狐に如何なる隠術があつても、如何なる智囊があつても、夜間、交代に、寝ずの番をしてゐる鳧に對しては、何等の術を配すことが出來ない。兎は、常に鳧と共に棲して居れば、狐の恐ろしき爪牙より脱する事が出来る。樺太では海馬が多數にゐて、これには必ずロッベン鳥が隨伴してゐる。蓋し、ロッベン鳥は、常に海馬に保護せられ、ロッベン鳥も亦海馬に危険を警告してやる。これも亦、相互扶助の關係にある。臺灣には多數の水牛が放牧してあつて、これには、多くの鵠カウが伴うて居る。即ち、鵠は、これ等水牛の背の上に棲止して、吸血性の蛇や蠅を捕食して呉れる。これが爲めに、鵠が其背の上に棲まり居りても、彼れは平氣なものである。本邦でも、鳥や鵠が牛の背の上に棲り、蠅を食うてゐるのを見るが、それも牛には益友である。鳥は元來、鋭敏の性能を持つてゐるもので、其五官の内でも、殊に、その眼の如き

は、他動物に冠たるものである。臺灣の生蕃が、鳥の鳴聲によりて、其去就を決して居るのも、亦、大に曰くがある。鳥には、暴風や其他の天變地異を前知するの本能があると曰はれてゐる。獸類が、此鋭敏なる小鳥と共に棲し居ることは、其危険の切迫せる際に、大に利益がある。これなれば蓋し相互扶助であり、相利の共棲である。それもお互を保護する爲めの外敵に對する共同の行動であつて、畢竟、生存競争の一段たるに過ぎない。これと同様に、阿弗利加では、犀鳥アフリカ(椋鳥の一種)は犀の背の上に棲止して、これに寄生する蟻アリや其他の害蟲を捕食してゐる。所が、近來になつて、此鳥はその家畜の傷口より吸血する様になつて來たと曰はれてゐる。此鳥は、象の背の上に棲り、其蠅を捕食する事もある。尙、東阿にメロツプスと稱する喰蜂鳥がゐるが、これは、一種の野雁ノと共に棲してゐる。此鳥は、澄し込んで、野雁の背後に乗りて、そこに飛び來る蠅を捕食してゐる。これは、時に、羊や山羊や其他、羴鹿カウの背の上に棲つて、そこに來る蠅を捕食してゐる。

埃及に産する一種の鳧が、鰐の開きある口の所に行き、其齒の間に挟まりある食物の殘物や蛭の様な害蟲を探つて呉れる。鰐は其大なる口を開いて其鳥を入れてやり、又、時には、其儘、これを閉塞することがある。而して、彼れは、恰も、己れの子供を取り扱ふ様に、その小鳥を愛撫

する様に見える。小鳥は、餌の口を掃除する都度、其食物を得てゐる。其餌に利益のある掃除に對して、彼れも亦、その小鳥を愛し、それを保護し、爰に相利的の共棲が行はるゝのである。これも亦相互扶助の行爲たるに違ひない。

如上の事實は、動物界に、敢て、稀ではない。而して、其相互扶助の行動は、何れも利益の交換であつて漫然、宿を貸したり、食物を供給すべきものでない。人間でも、漫然と、慈善行爲を配し、無償にてその宿を貸す様なものがあれば、それこそ、共倒れだ。一人の無能者を養ふには、一人の有能者を犠牲にすることになる。否な、慈善行爲は、徒に浮浪の人間を助長するのみならず、奮闘努力の精神をも消耗することになる。伊太利の如き浮浪の人間の多きは、蓋し、其宗教が然らしめたのである。印度の今も、猶、獨立し得ざるは、其民族の無抵抗的なる宗教が禍をなしてゐる。相互扶助は、生存競争の手段たるそれではなければならない。乞食的、慈善的の行動には、毫も相互扶助の表現がない。

四、團體間の生存競争と相互扶助。

生物は、本質的に、自己本意である。然れど、蜜蜂の社會や白蟻の社會になると、其團體が本位であるから、夫れが、個體と同様に、生存競争をなすのである。總て、團體内にある蟻や蜂は、

夫れ々々、分業的に、活動して居るが、若し一匹の怠惰者や不具者があれば、他の健全なる一匹の蟻や蜂の労働を犠牲にすることになる。故に、共産的の社會に於て、最も、重要な前提は、労働者の能力の均等し居ることである。少したりとも、能力に不等がありては、則ち、共産的制度が成立しない。彼等の内には分業的に、或は、遠く野外に出でて食物を搜索するものがある。或は、女王の子供の爲めに、巢房を造るものがある。或は、これに食物を與へ、寒冷の候には、地下に深く携へ行き、溫暖の候には、日光の照る上層に運び行く等、夫れ々々の活動をなしてゐる。其活動は、何れも、合理的ではあるが、稍々、嚴格なる本能の軌道に縛り付けられてゐる。故に、此社會には、怠業的のサボタージユを見ることはない。蜂の巢でも、蟻の巢でも、女王の一匹に對して數百の雄が生れる。元來、雄は怠惰者と呼ばれるもので、毫も、食物を搜索したり、造巢の任務に當つたり、媒母の役目を遂行したりしない。然れど、他の同類が採集し來れる蜜液を、無償で、食食するのである。彼等には、巢房を造るの働能なく、巢を保護するの毒刺がない。故に、性交後は、此團體に、何等の利益がない。それも、一女王に對して、唯一匹の雄があれば足りるのである。故に、彼等は、性交後、働蜂や職蜂によりて條件なしに、巢外に放逐せらるゝのである。彼等は、其社會に無益なるのみならず、徒に、食物を食食するが爲めに、有

害である。これは、共同生活の能力なきもので、畢竟、寄生的のものである。恰も、吾々の體軀に於て、手や脚や眼が、夫れなく、分業的に、働かないで、其機能を失するものは、體それ自身に有害であるが如く、勞働せざる、而も、毒刺を有せざる雄蜂や雄蟻の増加は、其社會を亡ぼすものである。數百億の細胞より構成せらるゝ人體に於ても、數萬の黨員を有する蜜蜂の社會に於ても、協力一致の行動の行はれざる時に、其社會の破滅となり、又、體夫れ自身の死滅となる。彼の有名なるクロボトキンは、動物界の相互扶助は、動物の進化に大なる關係があるが如く、人間社會の夫れも亦、文明の進歩に大關係があると云うてゐる。然れど、相互扶助の動物間に行はるゝの範圍は、甚だ狭く、夫れも亦、自身の屬する團體生活や民族生活の内に限られてゐて、其黨員が多くなればなる程、今日の道德の如く、益々、頽廢し行くに違ひない。利益を交換せざる他の民族に對しては、夫れは到底、行はるべき性質のものでない。最高の動物、最高文明の第一線に立てる人間でも、他人を愛し、同情の涙に咽ぶと云ふものがあれば、夫れは自らの屬する民族か、それとも、自らの屬する團體の人か、若くはその親族者の何れかであらねばならぬ。それとて、物質的の援助にあらずして、同情や憐憫の念に止まるだけで、其物質的の同情も亦、恒産ある場合のことである。彼の孔子の教へた様な、身を殺して仁をなすの道德は、今や舊式となつた。

今回の關東に於ける大地震の如きは、則ち、其然るを知らしめた。彼等は、同じく日本人であり、同胞である。而かも身を殺して仁をなすの行動は、到底、見ることが出来なかつたのである。人は安全、第一である。他人の爲めに、自己を犠牲にすることは、國家としても亦、大なる損失である。然れど、人を扶けて、自ら愉快を釣るの觀念は、假令、その本質は、利己主義であつても、夫れは、進化したる利己主義であつて、其行動は、大に獎勵すべきものである。然れど、現代の社會に、色々の民族の相對峙しある時に、而して、爰に民族と民族との戦端を開き、干戈に訴へる時に、自國民の協力一致、相互扶助は、大なる一種の武器である。此場合、若し他國民を扶助する者がありとすれば、夫れこそ、裏切者で、所謂、國賊である。此場合、世界同胞主義や博愛主義を宣傳して居れば、遂には、協力一致せる民族に滅されて仕舞ふ。人體の胃なり肺なり其他、心臟の諸器官が、夫れなく、聯絡せるの行動を取らず、謀叛を企つる様では、直ちに死滅となるが如く、一民族の間に、不具者や白痴や浮浪者や其他、不利なる寄生的のものがあればある程、其民族は滅亡に瀕して居るといへる。何れの場合にも、協力一致せる國民が、分業的に活動すれば、必ず優勝することになる。

國家の爲めに協力一致して、分業的に、夫れ々、活動する所に、舉國皆兵の意味がある。其覺悟さへあれば、民族は、實に、強いものである。然るに、クエーカ宗の如く、何れも、無抵抗になれば、其屬する民族は亡んで仕舞ふ。汝は戦闘士たれ、吾れこれを嫌忌すと云ふ様な人間が多く、現はれ來り、甲が右せんと欲する時に、乙が、左する様では、夫れこそ、國家の滅亡である。

彼の相互扶助間に我利々々の狼も、牛や馬を攻撃する時に、數十匹のものが相同盟して一團となり、遂に、その大なる牛馬を倒して仕舞ふ。人間も、強敵が現はれ來れば、平時、仲の悪き團體も相和して、共同の強敵に當る。今回の歐洲戦争に際して、獨逸の強敵に對抗する爲めに、平時、餘り親まざる世界各國の民族が、互に、相同盟して、遂に、獨逸を倒したのである。狼が、共同して、牛馬を倒した場合に、元の喧嘩好きの我利々々に還へるが如く、世界の強國も亦、獨逸を倒せば、其同盟を解散し、自國本位の我利々々に還元したのである。

彼のダーウキンと同時に、進化論を唱導せるウォレスも、クロボトキンと同様に、相互扶助を力説してゐる。彼れは人間の社會に、相互扶助の必要あることは無論であるが、夫れは、共産的でなくてはならぬと云ふてゐる。彼れは、熱心なる天主教の信者であつて、其死去する前の老

年の論説は、何れも、舊式な宗教的の觀念に捉はれてゐた。宗教家には、往々、斯くの如き考へを抱いて居るものがある。これは、蓋し、人類同胞主義とか、博愛主義とかの信條を遵奉する宗教上の觀念より誘發せられたものであらう。而して、夫れは、國家を形成する民族にとつて、大なる危険思想である。吾々、苟も教育あるものは、宜しく、そこに大なる注意を拂ひ、その思想に對峙せざるを得ない。種々様々なる單位より成立する個體、連生體、群體、家族、種族、若くは國家、民族に於て、其これを構成する單位が、何れも、權利義務、財産等を平等に保持すべきものであると主張することは、勞働せざる怠惰者にも亦、これを平等に保有せしむることになる。動物の體も、社會の體も、何れもが一種の聯體機關である。動物體に於て或る器官が、勝手に、餘計の食物を攝ると、體の生理作用が破壊せられて病氣になり、遂に、全個體が倒れることとなる。又、或る機關が餘分の分泌液を製造しても亦、全體に禍をなすのである。人間の社會にあつても、個人の孜々充々として貯積せる財産が、朝より酒色に耽溺せる人間の爲めに、分與せられざるを得ないと云ふことになると、夫れこそ、人間の奮闘の刺戟を消失することになる。否な、體力に於ても腦力に於ても、人の技量は蟻や蜜蜂の夫れの様には平等のものではない。其無能者と有能者との差別は、殆んど、無限で、爰に宵壤の差別がある。其差別は、蓋し、生存競争を基調

とせる奮闘努力によりて定まるものである。若し、共產主義の下に競争なくして衣食住が容易に得らるゝものとすれば、夫れこそ、生物界の原則は、破壊せらるゝ事になる。此原則に逆行するものが滅び、これに順應するものが進歩發達する。この事は、生物學が、明瞭に、吾々に、教へて呉れる。今日の世界は、民族や國家を以て單位となして居る。恰も個人間に、生存競争の行はるゝ様に、團體を單位とするの競争の團體間にも起るのは理の當然である。即ち、生存競争に有利なる性質を帯びた團體が勝ちて榮へ、不利の性質を帯びたものが破れて亡ぶ。然れど、吾々は又、世界共通の利益や文明の爲めを考へざるを得ない。我利々々の爲めに文明を破壊する國民は、今や、社會より葬られんとして居る。故に、守錢奴となり、世界の文明に何等の貢獻をなさざる猶太人は、世界の嫌忌的となつて居る。獨逸は、嘗て、ミリタリズムの張本であつて、白耳義との條約を反古同様に破棄した事は、人道の無視であると看破せられ、世界共通の敵と喝破せられたのである。これ、恰も、烏が近隣の烏の巢の材料を泥棒せる時に、夥多の烏團によりて懲戒せらるゝと同様に世界共通の道德の破棄に對しては、其制裁を受けるのは理の當然である。斯くの如く、不道德、不合理なる傍若無人的の行動をなす者は、他の世界民族の制裁を受くる事になる。鶴や燕やが氣候を追ひ、大海を横ぎつて、大陸より大陸に移動するが、翌春になりて、歸り

來れば、必ず、先年の巢のある所に巢を造る。雀は、年中、他國に移動しないで、常に同じ家の軒に巢を造つてゐる。若し、一羽の横着なる雀が、同僚の造つた巢を奪つたり、否な、其一すぢの巢を奪つても、其仲間は、必ず、これに、制裁を加へる。團體的の社會をなしてゐる動物間にも亦、多かれ少なかれ、共通の正義の觀念がある様である。自己の團體の一致協力を計る爲めには、その社會の制裁が必要である。横着者が多く、他人の勞働より贏ち得たる財産を横掠する様な人間が、此社會に蔓延すれば、それこそ、其社會の破滅である。然れど、甲乙の團體間にありて、食物が缺乏したり、住所の狹隘を告ぐる様になれば、お互に、死を賭しても、戦端を開き、そこに争奪の起るのは理の當然である。これは、最も、合理的の相互扶助の行はれ居ると言はれてゐる蟻の社會にも亦、普通なるを見るのである。此場合、お互に正義の觀念も亦、道德の觀念もないのである。彼等は、戦はざれば食ふに糧なく住むに家がないのである。これは、個體であらうが、團體であらうが、必ず起り得べき生物界の歸結であつて、夫れは、唯だ、時の問題である。甲乙兩團體の戦争になると、自己の立場が異なつてゐるので、往々、何れに正義のあるや否や、第三者にあらざれば判然せざる場合が少なくない。己れの不正を知つて戦端を開くの民族は、先づ、あり得ないのである。故に、今日では、國際聯盟とか、國際裁判なるものが設置せられて、

第三者によりて中立裁判が行はるゝ様になつて来た。これが爲めに、戦争の度數が減じ、勃發すべき戦端の阻止せらるゝことは、往々、あるに違ひない。然れど、いざ、己れの民族の滅亡すると云ふ様な、危き瀬戸際に立ちては、何等、左右を顧慮するの暇はない。危険を犯しても猶、戦はざるを得ないのである。假令、國際聯盟の機關があつても、いざ、自國に不利であれば、直に夫れを脱會すると云ふ様な國のある間は、餘り頼りにならないのである。

世界の一強國は、一回ならず、二回迄も、國際聯盟に軍縮會議を提出してゐる。嘗て、羅馬は、カルタゴに對して、勝算なきを知るや、軍備縮少案を提出して、これに應ぜしめ、遂に、それを亡ぼした。家康は、冬の陣で、大阪城の堀を埋めしめ、夏の陣で、豊臣を亡ぼしてゐる。歴史は、常に、同じ事を繰り返してゐる。抑も、一國が他國に對して絶對優秀なる地歩を占むることは、斷じて平和を確保するの道でない。恰も、空中氣壓に均衡の破れた場合に、暴風の起るが如く、世界の兵備に均衡の破れた場合に、戦争の起るのは過去の歴史が證明してゐる。絶對優秀の兵備を有する國家は、常に優秀の地位にあるが爲めに、自ら進んで戦端を開くの危険性を帯びてゐる。人間には、争闘の本能があるが爲めに、何か、機會が來れば、好んで争闘する。何も人を殺したり、傷けたりするの意志なき時に、村正や正宗の銘刀を手にすれば、野蠻的の本能を喚

起するが如く、己れに絶對の優秀の兵備のあることを自覺せる場合には、その民族は戦争して見なくなる。それが、人間性であり、而も亦、民族の自負心でもある。これが爲めに、今回獨逸は世界戦争を誘發したのである。國際聯盟に依る軍備制限の會議は、英國の支障に遇ひ、今日、實現せられないが、國際聯盟に關與せぬ米國の主唱によりて、第二回の軍縮會議の行はれた事は、如何にも皮肉である。一國が強ければ國際聯盟も、仲裁裁判も、何にもあつたものでない。生殺與奪の權は、今日の文明時にも、猶ほ、依然として、強者の手裡にある。今日、世界共通の正義人道に立脚しない國民は、獨逸の如く、國際的の制裁によりて、懲戒的に、攻め亡ぼさるゝと云ふ。夫れでも、絶對優秀の兵備を有して居る國民には、夫れが除外例であるのだ。獨逸は、不幸にして、ヴェルダンの要塞を抜くことが出来なかつた。然れど、前、獨逸皇子は當時、三日間の強雨がなかつたならば、必ず、ヴェルダンは、陥落したと云うてゐる。若し、ヴェルダンが陥落して居れば、定めし、巴里も亦、陥落して居つたであらう。此場合にも、吾人は、力は正義があり」と云ふ古き諺を追想せざるを得ない。彼の南阿ツランスパールのボア人は、彼等は正義があつたのみか、而も世界の同情を普く、受けながらも、英國に攻め亡ぼされて仕舞つた。日清戦争に於て、我が贏ち得たる戦利品は、正義人道の問題にお構なしに、露佛獨の三國同盟に奪はれて

仕舞つた。即ち、日本の戦利品を掠奪せんが爲めに、これ等三國の相互扶助が行はれたのである。若し、吾が民族が、其當時、英國の如き強國であつたならば、誰もが、何事もなし得なかつたであらう。

兵備のなき國民は、定に、氣の毒なもので、恰も、赤子の如く、手を捻られても、泣き寝入りする許りだ。如何に、侮辱せられても彼等に反抗するの能力はない。露佛獨の三國同盟に對して日本は、正に、其地位にあつたのだ。若し、世界が、擧げて、兵備を全廢する時が來れば、夫れは別問題であるが、今日、絶對優秀の兵備を有する國家の地に存在する以上は、傍若無人的の勝手のことをせられる憂ひがある。吾人はこれに對して活眼を開き鋭耳を立て、注意し居らなければならぬ。眞實、國家の利益を計り、國を愛し、其前途を心配するものは、蓋し、其國家を組織する民族の外にはない。今日、民族を基準として獨立せる國家の重きをなせるは、一は、其國民の數である。和蘭や丁抹や白耳義の如き、少數の國民を有する、國家の將來は、到底、大活動の出來る見込はない。いざ戦争と云ふ場合に、肉弾は何よりも必要なものである。第二は、富源である。富は則ち力である。貧乏では、勝算のある大戦争は出來るものではない。富國は所謂、強兵である。第三は、其國民自身の能力である。假令、國に數千萬の人口を有し、他國の羨む巨萬

の富源があつても、其人間、それ自身が、人間性を脱する以上は、萬事窮すで、問題にならぬ。此三者が併存せらるゝ時に、實に、國家は泰山の安きにある。彼の歴史大系の著者、ウエルズが謂つた様な、「世界の政府」、トーマス、ベーンの謂つた様な「世界の祖國」、これは一場の夢想であつて、世界同胞主義や共產主義の社會の發現は、蓋し、生物進化の道程を研究すればする程、あり得べからざるものである。

吾人大和民族は、他民族の主唱や宣傳に誤らせられないで、國家安寧の爲めに、最善の努力を盡さざるを得ない。これと同時に、國家に有害なる分子を除き、人間性を脱する危険思想や宗教や人間發達を消失する様な無抵抗主義を剔除せざるを得ない。

嚮に、賀川豊彦氏は、「生存競争の哲學」を著し、人類の進化は、ダーウキンの所謂、生存競争に據るものでない、寧ろ生存競争は生物を退化せしむるの傾きがある、故に階級争闘も、世界の戦争も、嫌忌すると云ふて居る。無論、生物の進化は、全部、生存競争によるものでない。然れど、吾人は、急流に棹さして居ると同様に、其流れに反抗して奮闘せざれば、直ちに、流されて仕舞ふことを、眼前に見るのである。恰も、競技場に於て、奮闘せざるものゝ惨敗するが如く、人生の競争場裡に、最善の努力を盡さざるものが落伍するのを、眼の當り、見るのである。これ

は、吾人の日常の生活に於て目撃する赤裸々の事實で、夫れは、誰れも、否定し得ないのである。タゴールやガンジーの様な、無抵抗主義に去就する人士が多くなればなる程、印度は獨立し得ないのである。

吾人は、生れながらに、競争すべく創造せられてゐる。人は、故なくして、赤子の如く、護謨管によりて、牛乳を飲まして呉れない。人間の食物は、下等動物の夫れと異なりて、料理しないで、食ふ譯に行かない。人間は、副食性であるが爲めに、蔬菜許りでも、肉類ばかりでも、良くない。其上に、下等動物よりも一層、不幸なることは、衣服を要する事であり、住宅を要する事である。これが爲めに、人には、一層の努力が入用である。又、病氣に侵さるゝ事が、決して、稀でない。時には饑渴に襲はるゝ事もある。これが爲めに、貯蓄を要する。人には明日を保障する、財産が必要である。今日の生活は、昔時キリストが言つた様な、明日のことを思ひ煩ふ勿れの暢氣の夫れではない。吾人は、何れもが、國家を雙肩に擔ひ得る有力者とならんが爲めに、奮闘努力を冀ふて止まない。これが爲めに、吾人は、教育を要する。教育に於ても、智育のみが全部でない。或は體育と云ひ、或は徳育と云ひ、其他、民族の他民族に對して優秀なる地位を占むるに必要な條項は、他に、幾らもある。然れど、民族として、世界的孤獨の地位に立つ事は、

最も危険なるが故に、お互に同盟したり、共同の行動を取ることが必要である。此意味に於て、相互扶助が必要になつて来る。遮莫、百尺竿頭更に一步を進めて、東洋の一大同盟を圖り、人種的にも、宗教的にも、壓迫し来る銳鋒に對して、應戦せざるを得ないのである。時代の進歩と共に、今や國と國との戦争は終結を告げ、人種的の戦争に移らんとしてゐる。これが爲めに、嘗てカイゼルは黃禍論を發表した。吾人は、これに對して、白禍論を唱道すべきである。無抵抗で行けば、人體機關の退化すると同様に、民族や團體は退化する。大羅馬は敵を失つて亡びた。此意味に於て、假定の大敵を有する事も亦、民族の進歩發達に大なる刺戟となる。クロボトキンの唱道する相互扶助には、根柢に於て、矛盾がある。蓋し、彼れの唱道は、食物や住家のある場合を前提としてゐる。而して、更に、其大なる矛盾は、生存競争を狹義に解釋した所にある。彼れは氣候や環境に對する生存競争を餘り認めてゐない様である。而して、彼れは、人類の祖先と想像せらるゝアミーバや其他、單獨なる生物に、相互扶助の現象を認めてゐない。彼れは、進化の過程として生存競争を認めない譯ではないが、夫れを相互扶助と同格若くは夫れ以下のものと見てゐる。彼れは、共產主義の高調の爲めに、僻論を草したもの云はれてゐる。其論法は、所謂オニトロギーで、何物が爲めにせんとする所があつた様である。蓋し、夫れは、敵本主義であつて、

其目的は、共產主義の夫れにあつたのであらう。彼れの相互扶助の例證は、何れも、團結しつゝ敵に當る事であるから、夫れは、無論、生存競争の一現象に外ならない。恰も、蟻が共同して大蛇を屠るが如く、鼠が團結して猛獸を倒すが如く、弱者も相協力すれば、強者を倒し得るのである。蓋し、團體的の競争は、現代に於ける進化したる夫れであるからだ。クロボトキンは、鷺の狩獵の相互扶助に關して、シエウエルストフの左の面白い記事を述べてゐる。即ち、或る日の事一羽の鷺が、空中高く昇つて往つたのを見た。三十分ばかりの間は、唯だ靜かな大空に圓を描いてゐたが、一聲、高く刺し通す様な鋭い叫び聲が聞えたと思ふと、これに應ずる一聲と共に、何處からか、又、一羽の鷺が現はれた。第三、第四、第五と、見る間に、九羽か十羽の鷺が現はれて、一團を造つて、やがて、彼方を指して飛び去つた。其日の午後、シエウエルストフは、先きに一團の鷺が事ありけに飛び去つた方向を指して辿つて往つたが、果せる哉、或丘の小蔭となつた場所に、先きの十羽の鷺が、一頭の馬の死骸を取り巻いてゐるのを發見した。彼等は、何時でも、獲物があれば、先づ其中の一番の年長者から始めて、順々に、年若い仲間が食ふのであるが此時は、早や、年老いた一羽は、食事を濟ませて、程遠からぬ乾草の積重ねた上に座つて、若者等の食事の間、四邊を見張つてゐた。そして、數群の鳥が周圍を取巻いて、空しく彼等の盛宴を

眺めてゐた。と。此事實は團體の求食法としては、最も有利なるもので、恰も、蟻の一匹が、食物を發見した時に、これを同僚に注進せんが爲めに歸り來り、後、其大群が列をなして其地に進行すると同一である。此場合、他族の蟻が侵入し來れば、爰に、争鬪を起すに違ひない。鷺の場合に於ても、五匹や十匹のものなれば良いが、百匹も二百匹も集まり來れば、其處に争奪の行はるゝことは想像に拍車を當てる迄もない。若し、鳥や鳶が集まり來つた場合には、鷺は全部、これを追ひやるに違ひない。札幌地方に、鳶が居らないが、夫れは、鳥の集團が其繩張りを侵さしめないらしい。鷹が飛び來つても、盛に、鳥群が、これを襲撃する。又、クロボトキンはペリカン鳥の面白き例を擧げてゐる。元來、ペリカン鳥は、協同して漁獵に出掛けるのであるが、此處ぞと思ふ濱邊を見定めて、多數の同勢が、水中に入りて、海岸に向つて、陣列を作る。そして、波のまに／＼、漂ひながら、岸に向つて、一齊に進軍し、半圓形を段々に狭めて、其内に圍まれたる魚を捕へる。若し、狭き川なれば、彼等は、二手に分れて、丁度、吾々が網でやる様に、上手と下手とから各、半圓形の列を作つて寄せて行く。此間に挟まれた魚は、一匹も残らず、彼等の餌となつて仕舞ふのである。これも亦、餌を捕へる爲めの同盟であつて、食物の多き場合には、お互に、争奪戦は行はれないが、其食物の少なき場合に、而して彼れ等が互に饑渴に迫りある時

には、必ず、爰に、争闘の行はるゝは、理の當然である。一方、魚の方では、鳥に食はれない様に、鱒や毒や臭氣や其他、自衛の武具を以てこれに當らなければ、忽ち食はれて仕舞ふ。クロボトキンの記載する所は、多く斯くの如き例であるが、何れもが求食の爲めの共同生活であつて、其協力一致は團體の盛衰に大なる關係のあることは理の當然である。

結論。

余はこれで生存競争の種類として、人體内の生存競争、同種間の生存競争、異種間の生存競争、團體間の生存競争と相互扶助の四つを稍々、詳細に説明した積りである。而して、動物間の相互扶助は、常に、共同の敵を有するものゝ間にのみ行はれてゐる。故に、假令、同種間にありても、他を倒す爲めに、都合が良ければ、相共同して相互扶助的の行動を執る。異種間に於ても、團體間に於ても、亦、然りである。即ち相互扶助の目的の對象は、食物の獲得が、それとも共同の敵を倒すかの孰れかにある。民族と民族との同盟は、蓋し、強力の民族に對する攻守同盟に外ならない。相互扶助は、畢竟、單に敵と相争ふ場合の策略として、同志間に行はるゝ二次的手段たるに過ぎない。世には、甲の民族の困難し居る時に、これを救ふ乙の民族のないことはない。他人の困難して居るのを見て、これを助くるの慈善家もないことはない。然れど、夫れは、お互に

衣食に足つて、而して、後の事である。己れの身を殺して、他人を救ふ様な人間は、蓋し、人間性を脱却するものである。宗教に捉はるゝものゝ内には、獨逸の一富豪の様に、漫然、百萬マーカーの寄附をなして、遂に、乞食になつたものもゐる。銀行の破産する時に、これを救済するの銀行も、亦、破産する。他人の貧を救はんが爲めに、己れも、亦、貧するが如きは、生物界の成立を知らないものである。一定の富を有する社會に、共存共榮の現象は、決してあり得べからざるものである。而して、相互扶助の精神は、道德的には違ひないが、人間の増加と共に、恰も、今日の人道や道德と共に、益々薄らぎ行くは、火を見るよりも瞭である。生存競争を加味しない相互扶助の行はるの前提は、先づ人類の利己本能の征服である。然れど、利己心のない生活は、恰も、吹かぬ風の如く、燃へぬ炎の如く、全く無意味のものである。如何に平和を標榜する鳩でも、其生活の様式は、徹頭徹尾競争である。競争により斯くも進化し來つた人類の過程より、競争の本能を脱却する事は、恰も、彼れに死を宣言する様なものだ。人間の奮闘努力の精神、換言すれば、競争の精神の消滅したる時は、則ち、彼れの墓場に行くの時である。吾々が競馬に於て見るが如く、馬にも亦、競争の本能がある。夫れは犬にも、鳥にも、魚にも、否な、蜂や蝶の如き昆蟲にも見ることが出来る。而して、團體間に於ける競争の手段として、相互扶助の行はれ

戀愛と年齢その他

あることも、亦、否定は出来ない。

八、戀愛觀

戀愛は理論的には至上である。然れど生物界に於ける戀愛の對象は、子供を産み、子孫を繼續することにある。而してその目的を達し得ない場合には、夫れが生物界の目的に悖ることになる。又、人が生理學や、優生學や、遺傳學の知識を除外する場合には、夫れが不幸なる子孫を、産出することになる。人が社會を組織し居る以上は、社會の道徳や因襲や、風俗を破棄する場合には、その社會より除外せられ、孤立の地位に立たざるを得なくなる。殊に年齢の問題となると、社會の因襲や、風俗やに關すること多きを以て、餘程、注意を要する。何れの生物にありても、戀愛の現象は成熟期に於て、始めて、現はれるのである。性慾の晩發なるものや、其薄弱なるものや、其他、未發時代の幼年者にありては、殆ど不可解に近き程、不感性のものである。故に、戀愛關係の成立すべき年齢は、國境を越へては、大に其趣きを異にしてゐる。彼の印度や阿弗利加の如き熱帶地方にありては、十歳にして、正式に結婚するものが少なくない。然れど、我が國の如き溫帶地方にありては、有能の精子は十二、三歳より成熟し始め、二十歳以上にあらざれば、先づ、完全の發達をしないのである。故に、夫れ以前に結婚することは、生理的に餘り好ましくない。生理學的に云へば、子供は生れたその當時より、既に性慾を有してゐる。日本には、男女七歳にして、席を同じうせすと云ふことがあるが、其當時の戀愛なるものは、無論、成立するも

のでない。完全なる性交の伴はない戀愛關係はなく、また不完全なる生殖器を有するものゝ戀愛は幾等、精神的にしても成立しない。蓋し戀愛の對象は、性交を前提とし、これがなければ實質上、満足の出来るものでない。故に、性交の無能なるものや、性交を缺ける男女間には、常に相手のヒステリヤ、ヒポコンデルヤの多きを見るのである。人間の最大目的は、何んと云つても、自己満足にある。其内でも、この強發本能の性慾を満足せしめる位の満足は、恐くは、他に見られまい。其時には、全感覺及び全精神が性慾衝動に依りて刹那的、癡醉に陥るのである。其恍惚たるエクスタシーの快感は、他の何物にも比較し得ないのである。人の戀愛的、發情に支配せらるゝ事は、恰も一種の催眠に掛り居るが如く、一種の魔術に弄ばるゝが如きものである。人は、全世界を唯、この表象と見るのである。それが宗教となり、哲學となり、また、藝術ともなるのである。生物界はこれある爲めに、同情もあり、また同感もあるのである。これが爲めに、興味は森々とし湧き來り、現象は無限に複雑性を帯び來る。生物界は、下は眼に見えざる細菌より、上は高等の人間に至る迄、何れもがこの統一せる戀愛生活を繰り返へして居る。これが爲めに、生物には永遠の生命があり、個體は子々孫々、未來永劫へと其種を傳へて行く。

抑も生物の生きんとする努力は、却々強性である。生殖の目的を達せんと欲せば、生物は先づ

第一に生きるの必要がある。其生きんとする努力は、何物かを贏ち得んとする暗示を持つて居る。故に生殖の目的を達するに困難を感じない蜂蟻の如きものは數時間にして死する。然れど、其數百粒の卵塊は水中に落ちて、其子孫を永遠に傳へ行く點に至りては何等他の昆蟲と異ならない。蟬は兩三日の戀愛生活に其終結を告げるが、其卵子は枝に産下せられ、それが孵化すれば、地中に入りて、十七年の長き幼年期を其處に送る。其長き幼年期は蟬には決して、安逸の夫れであるまい。夫れは來らんとする戀愛生活を目ざして堅土を掘り開き、甲樹の根より、乙樹の根に移り、其液汁を吸収する。吉丁蟲の三十年の幼蟲時代も聽て來らんとする、數十日間の戀愛生活の準備期である。人を呑むてふ恐ろしき印度の毒蛇も、廣野に咆哮する南阿の獅子も、何れもが、優しき戀愛生活に憧がれるのである。して見れば、苟も、空氣の通ずる所、假令、太陽の光線は通過せずとも、生けるものとして戀愛生活に憧がれるものは、何處にもない。即ち、地球と云ふ惑星、夫れ自體が、戀愛の結晶である様にも見える。夫れが爲めに、生存競争が起り、小にしては個人の嫉妬となり、大にしては民族の戦争ともなり、或は城を傾け、國を傾けることにもなる。十七世紀の哲人、バスカルは「女王クレオパトラの鼻が、も少し低かつたならば、世界の歴史はすつかり變つてゐたであらう。」と云ふてゐる。

唐の項羽は虞美人の爲めに、國を亡ぼし、玄宗皇帝は楊貴妃の爲めに自滅した。其他、義仲の勾當内侍に於ける、清盛の常盤御前に於ける、或は、エイネアスとデイドの如き、ロオメオとジュリエットの如きは、戀愛生活によりて其身を亡ぼしたものである。世界の歴史や、宗教や、詩文や、藝術は、戀愛を除外しては、何等、見るべきものがない。

犯罪の裏面には、必ず戀愛問題が伏在して居る。

人間が子供を造り、其子孫を造らうと云ふ事は、抑も本能であらうか。夫れとも子供は性慾本能の副産物として現はれ来るものであらうか。子供を産みたいと云ふ本能があつても、夫れは戀愛の本能よりも一層、強性である場合があるだらうか。十九世紀に於ける一部の戀愛觀は、確に、人間が其子孫を造らうと云ふ意志に動されて、そこに戀愛と云ふ一つの幻影を追ふて居つた様である。故にシヨベン、ハウエルは次の時代の者を造り、更に又夫れから出づる幾多の子孫を造るのが、要するに、戀愛であると説明して居る。其當時の哲人は、戀愛夫れ自身よりも、寧ろ、生殖に重きを置いた様である。

生物の目的は、何と云つても、子孫の存続にある。其子孫を未來永劫に存続せしめんが爲めに、自然は總ゆるる方法を講じて居る跡あるを認める。併しながら、人の子供を生みたいと云ふ本能は、

蓋し、餘り強性のものでない。夫れは少なくも、戀愛に比較し得べきものではない。人には子供のなきを悲觀して自殺せるものあるを聞かないが、失戀の爲め、死の道を通るものは決して少ない。また多數の子供に取り圍まれ居るものは、其子供の更に生れ来る事を非常に苦にしてゐる。これが爲めに、歐米にありては、近來、産兒制限が行はれてゐる。産兒が強愛の本能でありとすれば、何ものをも犠牲にして子供を生むべきであらうが、實際、夫れはさうでない。若し生物學的に生殖が本能でありとすれば、何が故に生殖の手段たる性交に快感が伴ふかであらうか。何が故に自然は子孫を存続せしめんが爲めに、あらゆる手段や、方法を生物に附與し居るかであらうか。試みに、彼の百合の花を見よ、其艶麗なる紅色や、白色の花は、抑も何を意味して居るか。それを夢乎として眺むれば自然は人間に美花を供して、吾々、人類に享樂の道を與へたとも思へる。早春、梅が枝に啼く鶯の美聲は、抑も何を要求して居るか。朦乎としてそれを聞けば、自然は吾々、人類を樂ます爲めに餘程、苦心した様にも見える。何ぞ知らん、其鶯の雄の高き叫びは、一生懸命で、雌を呼ぶの切なる聲である。若し雄が啼かなければ雌が集まつて來ない。鳳蝶は百合の美花を索ね、翩々として、朝より夕に至る迄、飛び廻はつて居る。此間には或は雨に打たれ、風に飛ばされ、或は鳥に追はれ、或は蜘蛛の巣に掛らないとも限らない。百合は

それが爲めに、異花交配の機會を得、蝶は茲に異性と、相逢ふの好機を得るのである。奥山に紅葉ふみ分け鳴く鹿も、戀しくと鳴く蟬よりも更に、その身を焦す螢も、何れもが、強烈なる性的要求の美的表象である。藝術として性慾に根ざるゝものが、何程の價值があらうか。眞善美の極致は、何れも、戀愛生活によりて始めて味はるゝのである。

人間の美貌も、猿の尻の赤いのも、何れもが、性慾に關係せざるものはない。彼の蠶や蛾やの口部は退化し、其體內には萎縮せる食道の痕跡がある。彼等の食慾は封ぜられて、只管、戀愛生活に全生命を捧げ居るのである。雄は森を越え、河を越え、原野を徘徊、飛翔するが、その唯一の目的は雌蛾に相達せんが爲めである。否な、彼等は性交を唯一の目的とし、其衝動の爲めに渾身の努力をなすのである。雄の嗅覺は營養機關を犠牲にして發達せるものであるが故に、頗る鋭敏である。幸福なる先覺者は、早くも、其愛者に達し、數時間、愉快らしく嬉々翻々として飛び廻はり、遂に、其翼の相抱擁したる後、雄蛾の幸福は既に封ぜられて、間もなく、死んで仕舞ふ。鱗は秋になれば、假令、その鼻は破れ、その尾は切れても、河源に溯り、産卵するの異性に逢はざれば、死しても猶、止まない底の強發の本能を以て居る。幸にも雌の産卵せる河床を發見すれば、雄はこれに放精して、間もなく死んでしまふ。故に、雄や雌の本能的の行動は第一、交尾若

くは放精であつて、其産卵は第二次的のものである。

人間が戀愛的、享樂の瞬間に於ては産兒の苦痛を考へ、養育や、教育の困難を慮るものはない。戀人や、愛人は共に現實の總ての損害と苦惱とを看過して、その享樂が永久に繼續するかの如くに感するのであらう。相互の迷妄は瞬間に生命を樂園の幻像に變じ得るのである。最も平凡なるものでも、否な嫌忌すべきものさへも猶、慾望の對象となり得るのである。この時には、山海の珍味も、酒地肉林も、何等願慮せられない。然れど、性慾が満足せられた場合には、飽滿の感情は忽然として現はれ、エクスタシーの場面はその終結を告ぐるのである。

實際的には、戀愛に年齢はない。然れども未成年者の戀愛には、餘程、注意せざれば、危險が伴ふのである。戀愛生活に第一、大事なるものは、何人と云つても、知識である。未成年者には充分なる、知識のなきが爲めに、熱情的、戀愛に驅られて、前後、左右を顧ざるものが多い。故に、高等教育を受けて、知識を養ひ理性を、發達せしめた後にあらざれば、盲目的の所謂、猿婚に陥り易い。戀愛は、恰も、齒車の如きもので、一方突起せる部分と、一方凹陥せる部分とが、能く喰ひ合つて滑車の如く、運轉するのである。人間性は、畢竟するに、一であつて、其半分は男性に宿り、その残りの半分は、女性に宿り居る。人間は兩性、相合して一體となる事によりて

始めて完全なる一個體となり得るのである。男も女も單獨にして何れも完全なるものではない。両性が互に、相補足の作用をなすが故に、二つの個人が相求め、相牽く事によりて、相互に自己を新たに、全からしむるものである。男でも女でも、孤立しては決して、満足の出来るものではない。蓋し、その何れかの要求する要素を、お互に、別々に、有して居るからである。恰も、陽極と陰極とが相合して、熱や、光を喚起すると同一である。

戀愛には、飽く迄も對者の爲めに身をも心をも捧ぐる自己犠牲の精神が必要である。夫れが夫婦間の相互扶助の精神となり、至高至大の情誼と變じ、更に進んで親としての子供に對する愛情に轉化し行くのである。即ち、母性愛は戀愛の延長で、親が子供を産んだ許りでは、其目的を達してゐない。親はそれを養育し、教育し、將來への母や父として、その遺傳性を發揮せしむる様に努力しなければならない。

故に西歐では、教育を生殖の延長と説明して居る。男性や女性の何れかのみによりて養育せられた子供は、何處かに、夫れ／＼の缺點を有つて居る。

西歐に「若き葡萄の花どきに、古き葡萄も醗酵する」と云ふ諺がある。これが爲めに、ビョルンソンの「若き葡萄の花時に」と云ふ有名な喜劇がある。即ち主人公アルヴィクは、妻や子供に

捨てられ、其妻の姪に當るマルヴキルデと云ふ女の若き姿に、新しき葡萄の花の咲くのを見、年甲斐もなく、アルヴキクの寂しき胸に、古い葡萄が醗酵したのである。そこで遂に彼れは、此女と手に手を取り家出してしまつた。妻や其子供等は父に對する今迄の仕打ちを後悔し、悲み居る時に、彼れアルヴキクは飄然として己れの家に歸り來つた。それからがこの喜劇に入るのである。これは抑も何を意味するであらうか。妻や子供に捨てられた場合、愛の緒の切れた時、それは人間に無論あり得べき必然の歸結である。即ち、この場合、戀愛には年齢がないのである。「人生の至上善とは何ぞや」の質問に對して、八十歳に近き老詩人ブラウニングは「人生の至上善は、少女の接吻にある」と答へた。昔より西歐の小説に能くあるが、其失戀の結果、他人に、嫁した戀人に子供が生れ、其成人するのを待ち、白髪の老人が年甲斐もなく、その子供を妻にしたと云ふ例は少なくない。また少女を教育し、其成長を待ち、妻としたと云ふ例も敢て少なくない。

昔時、英雄や帝王の連中に、若き婦人を妾となし、これによりて一種の若返り法となしたと云ふ事が、色々の書物に見當るが、これは確に若返り法の一手であつた様だ。人は若き婦人のゐる交際場裡に出入しても、若返りするのである。現今、日本の富豪の内にも、若き婦人を其座右に侍らしめ、これによつて、若返りの方便となし居るものも少なくない。若き婦人を左右に握き、

郊外を散策する様な事は、歐米では稀でない。これでは老人も亦、若返らざるを得ないのである。これと同様に、年長婦人の若き燕との、戀愛生活も亦、一種の若返り法となるのである。故に、戀愛の要素には年齢は何等、大なる障害とならない。否、寧ろ有利なる場合も亦、少なくないのである。然れど、人間には、甚深の嫉妬心あるを以て、年齢に大差あるものゝ、戀愛生活には往々悲劇が伴ひ易い。これが爲めに破鏡の歎に呻吟し居る女も少なくはない。朝鮮では男が既に小學校時代より、年長の婦人と結婚し、常に、其婦人によりて世話せられ、時には、其婦人に背負はれて、學校に通ひ居るものもある。其性慾に満足せざる年長の婦人は、未成年者の性慾を常に助長せしめんとするの傾きあるが故に、遂に其相手は、完全の成長を阻害せられ、不幸なる人間となり終るものが少なくない。無論、個人によりて異なるが、男子は早くも二十歳以上にあらずんば、その結婚は生理的に有害である。のみならず、其子孫にも亦、不健全のものが生れる事が多い。彼の有名なる佛人ベルチヨン博士は、二十歳以下で結婚せる男子に死亡率が非常に高い。即ち、佛國では二十歳未満で結婚した、青年の死亡率は、一千人に對して百人であるが、之れに對して、未婚者は僅に十四人しかない。故に男子の結婚期は二十五歳以上三十歳位で、女子は二十歳以上になりて宜しく結婚すべきであると主張してゐる。歐洲に住する著者の知人で、五十歳

になりて始めて、若き妻を迎へたものが兩三人あるが、彼等の何れもが大概は不幸に終つて居る。蓋し、その性慾の異なる年長者と、若き女との結婚は、生理的に往々缺陷があるからである。之れと同様に、民族の異なりたる人の戀愛生活も亦、大に注意を要するのである。殊に歐米人の性慾旺盛なるものに對して日本人は、到底、太刀打ちが出来ない。歴史的に日本人にして、歐米の婦人を妻にせるものは大部、不幸に終つて居る。これに反して、歐米人の妻となれる日本人には別に大害がない様である。故に戀愛生活は餘程、人種や、その體の強弱にも注意を拂ふべきである。

抑も睾丸内に於ける内分泌物は、人間の保健に重要な營養であつて、若し子供の時代にその甲狀腺より生ずる分泌液を除却すれば、其子供の成長は防害せられ、その歩行も、談話も出來ない滑稽な白痴となつてしまふ。子供が成長して、發情期になると、これよりまた別の内分泌物を製造する。これも亦、少年の成長には無くてならぬ一種の内分泌物である。一滴の精液は二十滴の純血に相當するの價值を有するもので、其浪費は二十倍の生血を損失することになる。而して之れが内分泌の製造に必要な養分を血液より奪ひ去る事になる。昔時、彼の有名なるライカルガスはスバルタ民族に強健なる男性を造らんが爲めに、三十歳迄、帶妻を禁じた。これに依りて